

死の超越者と白夜の騎士

ステイレット

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてない自由度を誇るDMMO—RPG「YGGDRASIL」。
2chが残っているなら彼の人物をロールする人も居るのでは?
序盤は置いてけぼりにしない為ブロント検定初級です。要望があ
あつたら徐々にブロント語レベルを上げていきたいと思
います。

こちらの作品はPixelとのマルチ投稿です。

※この作品の誤字のほとんどは仕様です。詳しく知りたい方はブ
ロント語で検索してみてください。

目次

第一話	
第二話	
第三話	
第四話	
第五話	
ナザリック小話的なもん	80
第六話	
第七話	
第八話	
第九話	
第十話	
第十一話	
第十二話	
第十三話	
幕間 スレイン法國では	
第十四話	

プロローグ

時は22世紀。人の技術は日月進歩と言つたもので、インターネットゲームもその様相を変えてきた。

DMMO—RPG・・・・その中でも極めて高い自由度が売りのゲームがある。それが「YGGDRASIL」であった。

だが、それも12年と言う歳月を過ぎればコンテンツも出し尽くされ・・・・現在サービスの終了が秒読み段階である。

ナザリック地下大墳墓。

ここには先ほどまで3体のアバターが居たのだが、内1体、スマート体のアバター・・・・ヘロヘロさんは既にログアウトしていた。「せめて最後まで・・・・」と言いたかつたんですが、ヘロヘロさんもお疲れのようでしたね」

「うみゅ、だけどヘロヘロさんもリアルに鞭打つて来てくれただけありがたいと考えるべきこうすべき。それによ。まだ俺が居るんだが？」

「そうでしたね。プロントさん。失礼しました」

豪奢なローブを着た骸骨・・・・死の超越者オーバーロードが謝罪のアイコンを送つて来る。その強面の割りに愛嬌を感じさせるリアクションだ。「俺がギルド武器とチャンピオン取りに行くぞつて言つたときには何か手伝つてくれたのもいい思い出だぬ」

そういう俺は純白のサークートを身に着けたガタイのいいダークエルフだ。

「はは、まさかアイテムの販売はともかくRMTで資金繰りしているとは誰も思いませんでしたよ」

「こつちには経験があるからな」

現在の俺はヴァナheimの頭なんだが過去に一度「アインズ・ウル・ゴウン」を抜けたのだがチャンピオンになつて戻つて來た。現在ヴァナheimにあるギルド拠点の武器はダミーで、今ギルド武器は俺の腰に吊るされている。

元々祭りみたいなノリで「天辺取りに行こうず」の発言からぱりと萌えさんが知恵を貸してくれ、るし★ふあーさんとか、ヒヤツハーダーク♪」に加入し、さらにヒヤツハー共を雇つたり情報を可能な限り直前まで伏せたりして電撃的にチャンピオンの座を奪い取った。それからは一応ナザリックから不眠不休で働くゴーレムを買いつつて今も警備に回している。課金罠でヴァナheimの拠点のテレビーターにひつかかるとナザリックで盛大に歓迎されたりするけどな。

その後は「アインズ・ウール・ゴウン」の傘下に収まるという形で元の鞘に收まり、ヴァナheimの拠点は完全にトラップ、ナザリックのようなロールプレイ無しガビルドNPCとゴーレム、自然POPモンスターの巣窟兼死蔵庫だ。別荘と言う見方もあるんだがあんなのはもう糞豚の住処だろうな。

おつと、紹介が遅れたな。俺はブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザー。略してブロントだ。謙虚だからさん付けでいい。

「しかし最後までブロントさんが残つてくれるとは思いませんでした。思えば長い付き合いでですね。たつちさんに誘われるまでのゲリラ戦を思い出します」

「あれはなんとか囮のアンデッドを呼べるくらいまで諦めずにレベリングしてたモモンガさんの貢献が大きいと思った。俺は不意だましだけど謙虚だから自慢はしない」

「相変わらずのロールですねー」

「これでも誤字再現とか抑えているほうだべ。本気になつたら聞き手の頭がおかしくなつて死ぬ」

そう、俺は古代から居るブロンティストの一人。だが、新しいネットゲが出来る度「ブロント」を演じるようになつてから長い時間が経つた。2ch連盟とかが居るだけあつてどんなキャラなのか特定されたりもしたが、むしろそれがウケたらしい。これが仮によしひろだつ

たら許されなかつた。

そのブロントさんだが、ヒューム（人間）の男とも、エルヴァーン（ダークエルフの皮を被つたドワーフ）とも言っていたが、Wiki等で広く浸透していたダークエルフ風味を採用している。

もちろん種族的な問題が議題に上がつたが、茶釜さんの「ダークエルフのNPC作りたいしいいんじやない？」とかタブラさんの「ダークエルフとドワーフの血を引き各地から異端者扱いされてきたとか・・・・設定が捲る！」との事で「アインズ・ウール・ゴウン」のギルメンとは以前からフレだつたがモモンガさん達と比べると後から入つたといういきさつがあるのだよ。

「もう10分を切つたか。最後は玉座の間で迎えませんか？」

「いいぞ。なんならそれを持っていけばいいと思う」

「スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン」ですか・・・・。
そうですね。最後くらいですよね」

さつきはへ口へ口さんがログアウトしたことで落ち込んでいたが、持ち直したようだ。笑顔のアイコンを送つてくる。

部屋を出るとメイドがこつちに向かつて頭を下げている。特にレベルの高くない一般メイドだ。

ここナザリックを運営するメイドなどの使用人の他に料理人とかマッサージ師なんかも居る。

モモンガさんが七匹の宝珠を銜えた蛇が絡み合うような杖からコツコツと規則正しい音を出しながら俺と一緒に歩いていると、10階層に繋がる階段が見えてきた。

そこには一般メイド達とは明らかに違うふいんき（何故か変換できない）のメイド達と初老くらいの執事が居た。

メイド全員が方向性が違う。だが、しつかりと調和が取れている。

執事は温和そうだけどやたら眼光が鋭い。
こいつらは戦闘メイド「プレアデス」。そして家令のセバス・チャンだ。

「付き従え」

侍つていたセバスと戦闘メイド^{プレアデス}を従え、俺とモモンガさんは並んで

歩く。

玉座の脇には純白と言つたほうがいいサキュバス。アルベドが控えている。

「ひれ伏せ」

付き従つていたNPCが全て跪く。

「どうせだから最後にNPC達の設定でも見てみましょう」

「良いぞ」

まず手始めに・・・・・「スタッフ・オブ・AIN兹・ウール・ゴウン」で一番近くに居たアルベドの設定を見てみるらしい。

「長つ！」

とてとて長いらしい。

「ブロントさん・・・・・これ」

「なんぞー？」

アルベドの指差された最後の一文を見てみると。

“ちなみにビツチである”

「うわあ」

「流石のブロントさんも引きますか」

目の前の骨が疲労のアイコンを出し、ため息付しそうになつている。肺がないから出ないけど。

「こう、なんか変えたほうが良いんでしょうかね？ああ、でもせつかくのタブラさんの設定をいじるのもなあ」

「ビツチだとシモでストレスがマッハだから「モモンガを愛してる」とかでいいんじやにいのか？まあ一般論でね」

「んな一般論があるか！「ブロントを愛してる」にしてもいいんですよ？」

「・・・・・無難にギルメンで」

「次、シャルティアでも見ます？」

「エロゲマニアのペロロンさんが数分程度で読みきれる文章を打つわけがない。後時間も押している様だし下手に削除項目発見したら可哀想だべ」

「それもそうですね」

脱力する骨。流石に時間が足りない。仕方ないね。

「これでサービス終了か。ブロンントさんは何か遣り残したことはありますか？」

「何週間か前にギルド潰しでタイムアタックしてたからそれの戦利品整理くらいか」

使うアイテムや最近入手したアイテムは主にこつちの蔵に入れてもらっている。

「ならそれほど悔いは無さそうですね」

「モモンガさん、これまで楽しかった。また逢えるかなって分からな
い。だから、元気でな」

「はい、ブロンントさんもお元氣で」

57、58、59、0、1、2、3・・・・。

「どういう事だ？」

「最後の最後で締りませんね」

なんだこの気の抜けた感じは。

「ん？」

「どうかしましたか？ブロンントさん」

「モモンガさん、口が、動いている」

「あ・・・・本當だ。ブロンントさんの口も動いている！」

「あの、モモンガ様、ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザー様。どうなさいましたか？」

俺はここでカカツと〈伝言〉を起動。これは一級廃人なら顔色一つ窺わせずこなせるが、貧弱一般人がやると挙動不審になつて詮索される紙一重のスキル。

〈モモンガさん〉

〈ブロンントさん？〉

〈嗅覚が働いているんだが？〉

〈いつの間にかYGGDRASILⅡになつたとか？〉

〈だとしたら、GMコールとログアウトを試してみないとだぬ〉

心配げに俺達を見るアルベドをよそに俺達はリアルへの復帰を試みる。セバスたちも何か言いたそうだが、上司であるアルベドが代表

して声をかけているからか許可が出ていないからか、跪いたままだ。

「ブロントさん、GMコールが出来ません！」

「ログアウトもだ」

「あの、モモンガ様？ ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザー様？」

「…………長いだろうからブロントでいい」

「ブロント様。何か私に不手際でもございましたか？」

「なんかおろおろしてるんだが？ アルベド」

「ブロントさんお任せします！」

「しゃあねえなあ」

「GMコールとログアウトが使えなかつただけだ。気にするほどのことじやにい」

「そうですか、無知なわたくしにはじいえむこおるもうぐあうとも聞いたことが無い言葉です。申し訳ありません」

アルベドがモモンガさんにしなだれかかろうとしている。潤んだ瞳がやばい。

「モモンガさん、非常措置だ」

「なんですか？ この事態を開拓する策を思いついたんですか!?」

「ああ…………これはモモンガさんを信じての大任だから心して聞くべき。死にたくなければそうするべき」

「なんでしょう？」

「倫理コードだ。アルベドの胸を鷲掴みにする！」

「ハードル高すぎますよ！」

「はやく！ はやく！ はやく！」

「どうなつても知りませんよ！」

「アルベド…………」

「モモンガ様…………？」

「し、し、失礼する」

「きやつ」

「文字通り鷲掴みに行つたな。いやらしい」

「あんたがやれつたんだろーが！」

さつきからモモンガさんがちよくちよく光る度に賢者のようなふ
いんき（何故か変換でき r y）を出す。

「あ、あの、モモンガ様」

アルベドがちょっと苦しそうだ。

「モモンガさん！ 負の接触^{ネガティブタッチ}切つてない！」

「あ、ああ、すまないアルベド」

「いえ、良いんですモモンガ様・・・・・どうぞ、来てください」

アルベドが一人だけのふいんき（何故か r y）を出してい

る。「魔法使いには難題過ぎますよ！」

「G Mを呼び出すための緊急措置つて言つとけ」

「アルベド、これまでこのような行為を取るとG Mからの警告があつたのだ。風紀を乱す輩を罰するためにな。だが、どうやらそれも叶わぬらしい」

「そうだつたのですかモモンガ様・・・・・ですが私達の逢瀬の邪魔をするとはなんと罪深き輩なのでしょう。じいえむと言う者を見たら八つ裂きにします」

本当は警告が送られてきてからなんか無視して色々すると実名晒されてB A Nとか社会的死が待つっていたのだが、そういうのもなくなつたらしい。

「セバス

「はっ」

モモンガさんが逃げられ無さそうなので俺が命令を出す事にした。

「プレアデスから一人付けてちょっと外の様子を見て来い。何か分かつたら俺がモモンガさんに連絡する。他は九層から上で侵入者とか居ないか見回りだ」

『かしこまりました』

とりあえずこれでよし。

「アルベド、各階層の守護者を第六層のアンフィテアトルムに集結させよ。アウラとマーレには直接私が言つておく」

モモンガさんが復活したらしい。

「御意に」

「モモンガさん、どうするつもりだ？」

「俺とブロントさんでも流石に守護者全員に襲われたら苦しいです。アルベドやセバス達は忠誠を誓ってくれているようですが、最悪襲われても逃げ切れるように忠誠心があるか確認しないと」

「分かった。アルベドの設定にさつきギルメンを愛してゐるって書いたがよくよく考えてみたら俺今ギルメンじやなかつた」

「もし仮にこれまで俺達がやつて來たやりとりを覚えて いると言ふならブロントさんがギルド再加入すればいいと思ひます」

「グラットンがどうなるのかいまいち不安なんだが・・・・・・」

「確かにギルド武器の損失は大きなダメージです。普段から入り浸つて いるからそんなどこにはならないよう祈りましょう」

「とりあえずアルタナ神にでも祈つておくか」

「この後まさか一世紀前の小説のようなことになつて いるとは予想すらしていなかつた。」

プロローグ2

「プロントさん」

モモンガさんの声は困惑に満ちていた。

「さつきアルベドの……む、胸を触つた時、心臓の鼓動がありました」

信じられないと言つたようだ。そうだろう。口が動く、人間並みの感情表現、それに加えて心臓の鼓動など、明らかにマシンスペックが足りていない。そして電源を切らないで複数のプレイヤーのハードウェアを全く同時に拡張するなど、物理的以前に様々な理由で無理がある。

「うみゅ、それにセバスに何気なくそちら辺の偵察を命じてみたけど抛点NPCはギルドから出られないはずだべ」

ナザリック周辺に自動POPする雑魚や騎乗用生物、傭兵NPCならともかく、抛点NPCは外に出られない。仮に出来るとしたら捨て垢を作つてガチビルド抛点NPCや使い捨て用にギルド武器を作り、捨て駒で削つた後、美味しいところだけを本命のギルドやプレイヤーに吸わせることに繋がる。ギルド武器自体はギルドが機能すればいいのでそこまでの性能は必要ない。そしてRMT業者ならエミュ鯖（エミュレーションサーバー）や外部ツールで検証して行動に移す可能性もある。RMTそのものがある程度黙認されている「ユグドラシル」ではあるが、ここまで大々的にやると普通にBANされるし最悪訴訟も辞さないので危険が危ない。

「これは……ひよつとして」

「1世紀くらい前に結構流行つたジャンルだな」

「やはりプロントさんもそう思いますか」

「だけど答えはセバスが情報を持ち帰つてきたり他のNPCを見てからだな。焦るとぷにつと萌えさんに怒られるだ」

「そうですね」

とりあえず答えはしばらく保留かな。

「後はとつさに〈伝言〉を使ってみたが、魔法関係が元の仕様通りか検

証だな

「ええ、それも含めてアンフィテアトルムを選びました」

「メイン盾は死傷率が高いから各種アイテムの自動蘇生^{オートリレイズ}も試してみた
いところだが……もう一本の線でデスゲームの方だつたら目
も当たられない。リスクが高すぐる」

「こればっかりはどちらか片方が死んでから蘇生なんて軽々しく言え
ませんしね。プレイヤーの蘇生は最終手段としておきましょう」

「まとめるとNPCの忠誠度確認、周辺の探索、仕様の確認つて所か。
ゲームの線は容量的な問題で薄くなつたから現実なのか、現実なのに
ゲームの仕様が反映されているのか。その辺だぬ」

「ええ、ネタ的に着の身着のまま知らない世界に放り出された場合も
考えられますから、一人じやないだけとても心強いです。いや、その、
ブロントさんを道連れに出来て良かつたとかではなくてですね」

「大丈夫だモモンガさん。どつちにしろリアルに未練はないだよ。ど
ちかというと生身は義体化がマツハだからこの身体になつてなんか
色々復活した感。逆にモモンガさんは良いわけ？ 骨になつている
から味覚とか無いんじやにいか？」

「アンデッドですからね……食道が無いから食べることは不可
能そうだし、睡眠がバッドステータス扱いだつたらそれも必要ないか
もしれません。性欲はそこはかとなく残っています」

「だつたら完全なる狂騒でも使つて自分に眠れる魔法とかかけたほう
がいいべ。負の接触^{ネガティブタッチ}で分かつたんだが多分同士討ちも解禁され
てるみたいだし。生身だつた頃の習慣は出来るだけ大事にすべき。睡
眠が取れないと心に余裕が無くなつて顔に出てくる」

「ブロントさん、俺表情筋が無いんですけど
「ものの喰えだ」

「他に今話し合つておくことはありますか？」

「ヴァナヘイムの拠点がどうなつているか知りたいが今転移して戻つ
て来れなかつたら怖いからこれは保留。仮に守護者が信頼出来そう
でも俺はこのロール続けるけどモモンガさんはどつかで打ち明ける
機会が必要じやないかな？ 今後やつていく為にもね。少なくとも設

定反映されてたらアルベドは味方だから最悪アルベドだけにも打ち明けるべきそうすべき」

「確かに、あの調子じやどこまでもお供が着いて来そうですし、アルベドなら他の守護者も納得すると思うんですが……魔法使いにはちよつとハードルが高いかななんて」

「あつ（察し）」

「未使用のままなくなつちゃつたなあ・・・・・・」

「半端に性欲が残るともじもじして困るからサキュバスのアルベドにでも相談すべき。大丈夫だ。サキュバスにビッチ設定被せてくるタブラさんなら許してくれる」

「ああ、タブラさんに申し訳ないことしちゃつたなあ・・・・・・こんなことになるなんて」

「もともとサキュバスの時点でビッチなのは種族の特徴だべ。ビッチ設定のままだつたら多分モモンガさんとマーレが食われてた」

「ブロントさんは？」

「黄金の鉄の塊のナイトがドレス装備に遅れを取るはずがない」

「すごいなーあこがれちゃうなー」

「それほどでもない」

話のオチが着いたところで俺達は第六層のアンファイティアトルムに移動することにした。

リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使用して俺とモモンガさんは第六層の円形闘技場コロッセウムに転移してきた。

「アイテムは問題なく使えるようですね」

「うみゆ、後で戦闘中でも目的のアイテムを問題なく取り出せるように練習しないとかな」

第六層に踏み入れるとまず最初に感じるのは、リアルでは当の昔に失われた濃い緑の匂いだ。

「空気が美味しいな」

「そうですね」

リアルでは大金を叩いても出来ない贅沢だ。

俺達はブルー・プラネットさんが求めてやまなかつた自然を満喫しながら格子戸をくぐり、闘技場の内部に入る。すると、客席全てを埋め尽くす土くれのゴーレム達が迎えた。

「どう！」

一際目立つ貴賓席の辺りから掛け声と共に小さな影が飛び降りる。ビル6階分くらいあるんじやないかな？ NPCのスペックであれだつたら俺も出来るはず。

「ぶい！」

なんか回転しながら軽々と着地すると、満面の笑顔でダブルピースしてきた。見た目10歳くらいのダークエルフ。

「アウラか

「お邪魔しますん」

そう、こいつはぶくぶく茶釜さんが作ったNPCの姉の方。名前はアウラ。竜鱗装備の軽鎧に白いベストと同じ色の長ズボン。背中にはやたら豪華でかい弓を背負っている。

「いらっしゃいませ、モモンガ様、ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・デザー様！ お邪魔だなんてとんでもないです！」

アウラは恐縮するようにそう言つた。

「大丈夫そうですね。ブロントさん」

「ああ、後はある意味一番厄介なデミウルゴスだな」

武力だけならどうにか切り抜けられるけど知略方面は投げっぱなしでつたからこればかりは仕方が無い。

「でもうれしいです。あたしの守護階層まで来てくれるなんて！」

尻尾があつたらぶんぶん振つている事だろう。今にもじやれついて来そうなアウラは敵意とかそんなものは皆無だ。

「ちょっと確認しておきたいことが出来たのでな。ところで今居るのはアウラだけか？」

「申し訳ありません！ ほら、マーレ、至高の御方々が来ていらっしゃるんだよ！ 早く来なさい！」

「無理だよお、お姉ちゃん」

アウラとは違う色の軽鎧に白い上下、葉のような色のマントを羽織り、下は丈の短いスカートだ。飛び降りたらそれが気になるらしく躊躇している見た目はダークエルフの女の子・・・・だが男だ。

「ほら、早く！」

「うう・・・・えいつ！」

マーレはスカートを気にしながら観客席から飛び降りた。翻つていないことを確認すると小走りに近づいてくる。だが男だ。

「まつたくもうこの子はモモンガ様とブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザー様が来ているって言うのに」

「アウラもその辺にしておいてやれ。二人がいつも良く仕事をしてくれている事は知っている。それに俺は二人の元気なところを見られたから満足だ」

「そうだな。それにマーレよ。優しい姉に感謝するのだぞ？ アウラがこうやつて叱ることで私達にこれ以上罰を与えないで欲しいと行動しているのだ」

モモンガさんも便乗してアウラを諫める。

「う、うー・・・・分かりました」

やつぱり茶釜さんが作つただけあるな。姉より優れた弟がいるわけが無い理論。それが良く分かつたよアウラ感謝。

「茶釜さんとペロロンさんのやりとりを思い出しますね」

「そうだな。きっとこれも茶釜さんがこの二人に望んだ姿なんだろうな（遠い目）」

「ところで、御二方はどうして第六層に？ もしかして遊びに来てくれたんですか？」

「ちよつと色々試したいことがあつてな

モモンガさんが杖を掲げる。

「それは、モモンガ様しか使うことを許されないと言うあの・・・・」

「そうだ、これがスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンだ。後は少し身体を動かしたくてな」

「そうだつたんですか。それにしても彼の伝説の宝具をこの目で見られるなんて感激ですか！」

「す、すごいです！」

ダークエルフ姉弟は興奮気味だ。

「スタッフ七匹」が銜える宝玉が全て神器級アーティファクト。そしてこの宝玉はシリーズアイテムであり、全て揃うことによつて真の能力を発揮する。これら全てを揃えるには多大なる労力を費やさなければならぬ。そのために宝玉をドロップするモンスターを数えるのも億劫なほど狩り続けようやく揃えたのだ。その他にもこのスタッフ自体に自動迎撃機能があり……ごほんっ、つまりそういう事だ」

途中で我に返つたモモンガさんがばつが悪そうに説明を中断する。俺だつたらグラットンテンプレに倣つて全部説明するだろうな。「ところで甘い匂いがしているんだが、これはアウラのスキルだつか？」

「も、申し訳ありません！」

ちよつと疑問を口にすると平伏された。

「いや、別に効かないからいいんだが、俺達も有効範囲に入つていたか？単なる疑問だから別に怒つていらないしそここまで気にするな」

「は、はい」

「ちなみにこれの効果はなんだつたか？」

「恐怖状態です」

〈モモンガさん〉

〈ええ、フレンドリィファイアと耐性確認ですね〉

モモンガさんがアイテムを使って月光の狼を召喚する。

「こいつら」と私達をお前の吐息の有効範囲に入れてほしいのだが

「えつ、でも至高の御方々にわざと、いえわざとじやなくとも駄目なんですけど、そんな、恐れ多いです……」

「何、ちよつとした実験だ。お前に罰を与える訳でもない。私の我侷だから気にせずやってくれ」

「うみゅ、俺達がそんな理不尽な事するはずが無い」

「分かりました。では」

こうして様々な状態異常をかけられたが俺とモモンガさんは異常

耐性もしくは無効化でなんとも無かつた。一方月光の狼はレベル2
0そこらと低いので割と効果的だつた。

「大体分かつた。では、送還」

月光の狼が送り還される。

「ゞ苦勞だつた。次を頼むんだが？」

「えへへ」

アウラの頭をぽふぽふしてやるととても嬉しそうにしていた。そ
の一方で羨ましそうにマーレが見ている。

「モモンガさん、マーレの頭を撫でてあげテ！」

「う、む、そうですね。なんか可哀想ですしね」

モモンガさんがマーレを撫でてやると控えめにはにかんだ。

プロローグ3

「おつととそなうだつた。アウラ、的の用意をしてくれにいか？俺とモモンガさんは少し身体を動かしに来たのだよ」

和やかなふんいき（何故 r y）に浸つていたら他の守護者が来てしまうので残りの用事を片付けることにした。

「あ、はい！ 分かりました！」

アウラは俺の手を名残惜しげに見ると、配下のドラゴン・キンを使つて的の用意をし始めた。

「では、そろそろ私もだな」

マーレの頭から手を離し、ドラゴン・キンの用意した藁人形に照準を定めるモモンガさん。

マーレは撫でられていた頭を放されて、耳がしょんぼりしている。不味いな。俺の耳もああなるのか？

「火球」

小手調べのファイヤーボールから行くらしい。火の玉は藁人形に接触すると、内部に溜め込んでいた炎が一瞬で火達磨に変え、消し炭と灰になつた藁人形が残つた。

「うむ」

魔法が行使出来る事に満足しているらしい。

「モモンガさん、機会があつたら死体ありとなしでのアンデッド作成も検証するだよ」

「そうですね。次はブロントさんの番ですよ」

少し離れた位置にある藁人形に一つ試してみることにした。

「生半可なナイトには使えない〈聖なる光線〉」

物理ダメージの通じない相手の為に威力の上げてある聖属性魔法を放つ。光線は文字通り光速で、指先から放つた瞬間には既に着弾していた。

当たつた瞬間に貫通しているため派手な見た目ではない。それどころか100円そこらのレーザーpointerを当てたかのようなくずくずく。それをそのまま左右に振る。

すると、切断面が焦げると言った事も無くバラバラになる藁人形。出力は十分か。少なくともモモンガさんにはダメージが通るから誤射はしないようしよう。

「こつちも大丈夫そうだ。次はモモンガさんだぬ」

「じゃあ、次は何にするかな」

この後〈焼夷〉から〈火球〉のコンボを試してみたりして満足したらしい。今は死体が無いしな。

「では、そろそろこいつの起動実験でも行うか」

そう言つてモモンガさんはスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掲げる。

「ドラゴン・キン共を退避させろ」

「はい！」

アウラが手下を退かせた所で何かやるらしい。

「〈根源の火精霊召喚〉」

レベル80台のエレメンタル召喚だ。これだけ聞くと相当強そうなのだが、シャルティアやアルベド相手だと数分もつか怪しい。

「アウラ、マーレ、見ていて退屈だつただろう。ちょっとあれと戦つてみないか？」

「いいんですか!?」

「お姉ちゃん、怖いよう」

どこまでも対照的な姉弟だ。

「何言つてんの！ セっかくのモモンガ様のご好意を無駄にするの？ ほら、行くわよ！」

うずうずしていた姉とは対照的に根源の火精霊を見てビクビクする弟。まあ、いざ戦闘になつたらなんとかなるだろ。

「ブロントさんは何かと戦つてみますか？」

「そうだな。適当な奴を頼む」

「なら、その間俺は〈伝言〉がどこまで通じるのか試してみようと思います」

「分かった」

グラットンの斬り応えを実感するかな。

「思つた以上に弱すぐる・・・・・・」

試しにケルベロスを召喚してもらつたんだが、グラットンを装備した俺の前には剣先でちょっと撫でるだけで盛大にダメが入つていた。

グラットンはの能力の一部を記すと

・捧げたステータスの7倍のバイタルを得る・・・・元々グラットンソードはVIT以外のステータスを1下げて、VITを7上げる武器だつた。そしてそれの上位互換にデバウラーと言うものがあり、それはVIT以外を2下げて14上げると言うところがこの効果の由来だ。ちなみにバイタルが上がるとHPとか物理防御力が上がる。
・HPを吸収する・・・・グラットンと同じ形の剣でブラッドソードと言うものがあり、それに付随されていた能力。ちなみにブラッドソードはナイトは装備できない。与えられた僅かなダメージも高ステータスで繰り出す高速連撃により塵が積もれば山となつて回復する状態。

今回使つたのはこんなもんか。まだまだ能力はあるけど出すまでも無かつた感。

しかし痛みと言うものが久しぶりすぎて逆に新鮮だつたな。俺の集中力を削ぐには至らなかつたが。精神作用耐性が付いているおかげもあるだろう。考えてみたら強制的に無効化はされず、常に耐性で沈静化されているから義体化で消滅していた性欲も理性の端っこでもじもじする程度にしか出てこない。

あちらで大きな火の塊というか熱が消滅していくのを肌で感じた。
「アウラとマーレもやつたか」

見ると根源の火精靈が空中に溶けていく様子が見られた。

「モモンガ様、ありがとうございます。とてもいい運動になりました

！」

「うむ、それはよかつた」

アウラとマーレは汗だくだ。

「アウラ、マーレ。ジュースをおごつてやろう」

アイテムボックスと念じて空中に手を突つ込み、メロンジュースを

出してやる。これは果汁100%にしてサンダーメロンを再現した一品なのだよ（設定）。

「え、いいんですか？至高の御方々から手ずからなんて恐れ多いです」「悪いですよ」

「子供はそう言う事気にするな」

「ありがとうございます。ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザール様！」

「長いだらうからブロントでいい」

「ありがとうございます。ブロント様」

「ありがとうございます」

アウラとマーレは瓶の頭に付いている王冠を取り外し、「パチパチする」とか言いながら美味そうに飲んでいる。

「それで、何か分かりましたか？ ブロントさん」

「うみゅ、五感が全部働くからより緻密に操作出来ているな。モモンガさんの方はどうだつたわけ？」

「セバスに伝言で確認したところ、ナザリック周辺が沼地ではなく草原になつていたそうです」

「これはいよいよヴァナヘイムのギルド拠点がなくなつてしまつた可能性が高い。ヴァナヘイムがあるかすら怪しい。まあ逆に言うとギルドはグラットン以外失うものが無くなつたからギルド武器破壊がそこまで怖くなくなつたんじやないかな？ そこの雑魚に転移アイテムを使わせるつて手もあるけどね」

「そうですね。だけど、やはり他のギルメンにもGMにも繋がりませんでした」

「INしていた我々だけ転移してきたつて線もあるからな。だけど逆に言うとサーバー終了までログインしていたのは俺達以外にも居る可能性は高い。そして俺達はPKKでクソスレ乱立させたほどのギルド。うかつにプレイヤーには接触できにい」

「慎重に行くしか無いですね」

「うみゅ、これがラノベの異世界転移だつたらどんだけイメージモードだったかなとも思うんだがな」

「仕方が無いですよ。俺達ラスボス枠ですし」

「ウルベルトさんが喜びそうなシチュエーションだな」

「ですね」

「伝言」を終了させ、アウラ達を見る。メロンジュースを飲み終えたらしい。

「ご馳走様でした。ブロント様！」

「ご馳走様でした」

「うみゅ、お前達なら成長すればきっと俺達にも追いつけるだろう。これからも元気でいるべき」

ガントレットあまりガチャガチャ撫でると痛そうだからやめておく。

「ブロント様つてもつと自他共に厳しい方だと思つてました。それにモモンガ様ももつと怖い方がと」

「優しかったねお姉ちゃん」

ニコニコと笑顔を浮かべながら空になつた瓶を手のひらの上で大事そうに転がしている。アウラ。マーレも決して悪い気はしてなさそうだ。

「怖いほうがいいか？」

「いえ、優しいほうがいいです！　あ、でも、私達だけに優しいとか？」
「悪いことをしたら叱るけど必要以上に厳しくする必要は無いだよ。ナザリックのメンバーはみんなの子供達みたいなもんだからな」

「ブロントさん、そんなこと言つたらアルベドに性欲の相談するなんて出来ませんよ！」

「タブラさんなら「寝取られ……しかも友人に自分の娘がか……アリだな」くらいは言うと思う。下手したらペロロンさんも何本かそういうジャンルのエロゲ持つてそう」

「くつ、否定できない！」

「まあそんなわけだから気にすんな」

「あ、ブロントさん？　ブロントさん！？」

目の前で発光したり点滅したりする骨を無視する。なんか近くに居る気配がするし。

「おや、わたしが一番でありますか？」

その声を聞くと同時に地面から影が盛り上がり、扉を形成する。そこから一人の少女が出てきた。

着ているのは漆黒のボーグガウン。こぎつぱり説明するとフリル多い系とかあんな感じだ。手足の露出は一切無く、顔は白蝶じみるほど白い。髪は銀色。年のころは15行かないくらいだと思われる。幼さが残る顔だ。だが、その胸が不釣合いな程大きい。否、盛つている。

「……転移が阻害されているナザリックでわざわざ〈転移門〉なんて使うなっていうの。こんな距離すぐ来れるんだから歩いてくればいいでしょうが、シャルティア」

こいつの名前はシャルティア・ブラッドフォールン。ちょっとぴり胸が貧しいのが気になる吸血鬼の少女だ。

アウラの豹変にマーレは冷や汗をかきながらじりじりと離れ始める。立場の弱い弟が姉の喧嘩に巻き込まれてはたまらない（戦慄）。

シャルティアはマーレと一緒に若干引いているモモンガさんににじりよる。確かネクロフィリアって設定だつたか。

この距離からでも分かる香水の香り。

「くせ」

アンデッドだから腐ってるんじゃないの？と続ける。アウラが変わりすぎて生きるのが辛い。

これにはモモンガさんも思わず自分の腕を顔に近付けて臭いを確認しはじめる。

「それは不味いでしょ。モモンガ様もアンデッドなんだから」

「モモンガ様はいいのよ。超アンデッドとか神アンデッドとかだから」

モモンガさんは解せないふんいき（何ry）を出している。長年付き合ってきた俺には分かる。

「でも、お姉ちゃん、今のはちょっと不味いよ」

「一回くらいはやり直させてあげるわよ」

「うつ…………分かったわよ」

テイク2をするらしい。

「屍肉だから腐つてゐんぢやないの？」

「うん、まあ、それならいいか」

今のやり取りに思わずほっこりしてしまった。こいつらほんとは仲良いんぢやね？

「ああ我が君、唯一支配できぬ愛しの君」

「恋は盲目なのだなと言う顔になつてしまふ」

「あ、ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザー様！　これは失礼しました！」

「俺のことは気にすんな。あとブロントでいい」

「で、ですがブロント様……」

「いあ、微笑ましいものを見たと思わず顔がほころんでしまう。モモンガさんも好かれる方がいいだろ？」

「あ、ああ、そうですが……」

「モ、モモンガ様が！　わたしに好かれてまんざらでも無いと！」

シャルティアは見ていて飽きないな。あのくらいの歳から一緒に下着を洗うなどか言い始めるだろうからそんなことを言われたらペロロンさんは立ち直れなかつただろう。

「騒がしいわよ、偽乳」

ピキリとシャルティアが止まった。

「なんで知つてるのよー！」

「一目瞭然でしようが！　何枚詰めてるのよ！」

「わーわーわー！」

キャラ崩壊。てきどーな廓言葉も投げ打つて全力で否定にしにかかるシャルティア。まあ、ありじやにいか？

「そんだけ盛つていると……走るたびにどつか行つちやうんでしょう？」

「くひい！」

「図星？　図星ね？　どつか行つちやうんだ！だから〈転移門〉で來たんだ！　どつか行つちやわないよう！」

「黙りなさい！　このちび！あんたなんか……あれよ！　全然

無いでしょ！わたしは・・・・少しあるんだから！」

「あんたこれ以上成長しないじゃない。それに比べて私はまだ76歳。これから大きくなるのよ。でも残念ねー。これ以上大きくならないんだから。ああ、だから詰めてるのか」

アウラはふっと表情を崩し――。

「足搔くな。運命を受け入れろ」

いつぞや茶釜さんと議論したイケボ台詞集を引用しました。

「おんどりやー！　吐いた唾は飲みこめんぞー！」

「望むところだ！　その偽乳もいでやる！」

二人が戦闘態勢に入り、徐々に謎の緊張感が高まってきた。一体どうなってしまうんですかねえ？

プロローグ4

「サワガシイナ」

二人の乱痴気騒ぎに、ぬつと蒼銀色に輝く二足歩行の甲虫が姿を現した。大きさは2メートル半ほど、残る4本の腕にそれぞれハルバード、メイス、ブロードソードを持している。特にブロードソードはなかなかの歪みっぷりでかっこいい。

「御方々ノ御前デ遊び過ギダ」

「この小娘がわたしに無礼を——」

「事実を——」

「控エヨ」

しょんぼりする二人。後でキングカワイソス肉まんでもおごつてやろう。

「二人ともその辺にしておけ

なんかモモンガさんが魔王ボイスになつてる。

『も、申し訳ございません!』

跪き許しを請う三人。マーレ、お前は別にいいんだが?

「まあ、普段階層から離れられないんだし、たまにははしゃきたくなるんだろう。その辺で許してやれよ」

「・・・・・ブロントさんの顔に免じて許してやる

『ありがとうございます、モモンガ様、ブロント様!』

「モモンガさん、あんまり魔王ロールしてるとストレスがマツハだから程ほどにしとくべき」

「俺はブロントさん程ロールに慣れてるわけでもまだ疑いを捨てきれている訳でも無いんですよ

「何、善人口ールでもそれをするために少女を殺して食べ続けると言うものがあつてだな」

「俺魔王でいいです」

なんか色々諦めが入つた思念が送られてくる。

「良く来たな。コキュートス」

「オ呼ビトアラバ即座ニ」

コキユートスの吐息が空氣に触れるたびにパキパキと言う音が鳴る。それだけ温度が低いんだけど、この面子にその程度でどうにかなる奴は居ない。

「最近は侵入者も居なくて暇じやないか?」

「確力ニ——」

虫キングなのでいまいち分かりにくいが笑っているらしい。顎を力チカチ鳴らしている。

「トワイエ、セネバナラナイトガアリマス故、サホド暇ト言ウ訳デハゴザイマセン」

「しなければならないこと?」

「鍛錬デゴザイマス。如何ナル時モ鈍ルト言ウ事ガアツテハナリマセン」

「流石コキユートスだな。素晴らしい常在戦場だすばらしい」

「ソノオ言葉デ報ワレマス」

このユグドラシルはレベルを上げればいいと言うものではなくて、プレイヤースキルもそれなりに必要とする。身体を動かす感覚などで運動神経もあつたほうが良い。

「デミウルゴストアルベドガ来タヨウデス」

「らしいな」

なんかこの身体になつて気配の感知とかが鋭くなつたっぽい。

ふと闘技場の門の方を見てみると、アルベドとその後ろにつき従うように一人の男が歩いていた。だけど男も人間ではない。その証拠に先端に棘の付いた尻尾を持つている。

二人は優雅にお辞儀し、それから男の方が口を開く。

「皆さん、お待たせしました」

2メートルは無い、俺より高くない上背にスーツを着こなし、メガネをかけている。顔立ちは東洋系で、笑っているというより閉じているような視線が特徴的だ。こいつがデミウルゴス。ナザリック地下大墳墓七階層守護者と防衛時のNPC指揮官と言う設定を持つていたはず。

「皆揃つたようだな」

モモンガさんが辺りを見回し鷹揚に頷く。

「モモンガ様、2名ほど来ていいようですが」

「ヴィクティムとガルガンチュアはその特性の為今は除外されいる」

「左様でございますか。失礼致しました」と、デミウルゴス。

「我ガ盟友モ来テイナイヨウデスナ」

その言葉に女性陣が固まる。

「…………あれは、わた、わらわの階層の一部の守り手にしか過ぎぬ」

「そうだね～」

シャルティアの言葉にアウラが頷く。まあ、いかに紳士的だろうとでかいゴキブリだとな。苦手な奴は苦手だろう。

「確かに、今回は領域守護者に知らせておいたほうがいいな。紅蓮やグラントにも伝達しておけ。それは各階層守護者に任せる」

守護者ることは・・・・・アルベドを除いた。アルベドは守護者統括なのでちよつと違う。

「では、至高の御方々に忠誠の儀を」

俺とモモンガさんを置いてけぼりにして物事が進む。アルベド達が隊列を整え俺達の前に跪く。空気が引き締まつてさっきまでの遊びは無さそうだ。

「第一、第二、第三階層守護者、シャルティア・ブラツドフォールン。御身の前に」

「第五階層守護者、コキユートス。御身の前二」

「第六階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ。御身の前に」

「お、同じく第六階層守護者、マーレ、ベロ・フィオーレ。お、御身の前に」

「第七階層守護者、デミウルゴス。御身の前に」

「守護者統括、アルベド。御身の前に」

アルベドはそのまま続ける。

「第四階層守護者ガルガンチュア及び第八階層、ヴィクティムを除き、

各階層守護者、御身の前に平伏し奉る」

俺？俺はモモンガさんの横でそれっぽく剣を立てて立つてるだけだよ。

「ゞ）命令を。至高なる御身よ。我等の忠義全てを御身に捧げます」

「ブロントさん！ 俺どうすればいいんですか!?」

「とりあえずツラ上げさせて良く集まつてくれた的な事を言つとけばいいんじやね？」

「適當すぎますよ！」

「すかしその辺りからやらないと始まらないべ」

「ああもうちくしょうめ！」

モモンガさんに表情筋があつたらやばそうな会話を〈伝言〉で行いつつ、この場面を切り抜けることを考える。俺からの助言と言つたらその辺が限界だった。

「面を上げよ」

その言葉にこの場に居るN P Cが一斉にモモンガさんを向く。

「まず、良く集まつてくれた。感謝しよう」

「感謝なぞおやめください。我々は至高の御方々に忠義のみならず全てを捧げた身。至極当然のことですぞ」

アルベドが代表して口を開く。

「どうすればいいの？ ブロントさん！」

「沈黙は金なりと言う名ゼリフを知らないのかよ。とりあえず黙つてそれっぽいふいんき（ry）を出しとけば大丈夫だ」

「…………モモンガ様はお迷いの様子。当然でござります。モモンガ様からすれば私たちの力など取るに足らないものでしょ。しかしながら至高の御方々よりゞ下命いただければ、私達階層守護者、いかなる難行であろうと全身全霊を以つて遂行致します。造物主たる至高の四一名の御方々——AINZ·WURL·GOUNに恥じない働きを誓います」

『誓います！』

アルベドに各階層守護者も続く。

うん、大丈夫そうだな。モモンガさんはなんか点滅してるけど。

「素晴らしいぞ、守護者達よ。お前達ならば私の目的を理解し、失態無く運べると今この瞬間、強く確信した」

モモンガさんは一息置き、守護者達を見回して続ける。

「さて、多少意味が不明瞭な点があるのだが、心して聞いて欲しい。現在ナザリツクは外部組織喧嘩チームD R A K ↗ ダーク↗と分断され、喧嘩チームD R A K ↗ ダーク↗とは連絡が取れない。そのため、ナザリツク地下大墳墓は原因不明且つ不測の事態に巻き込まれていると思われる」

各守護者は一文字も聞き漏らさないと言うような気持ちで聞いているらしい。

「何が原因で事態が誘発されたかは不明だが、最低でもナザリツク地下大墳墓がかつてあつた沼地から草原へ転移したことなど聞いたことが無い。この異常事態について何か前兆など思い当たる節がある者はいるか？」

アルベドが後ろの守護者達を見回し、代表して答えを出す。

「いえ、申し訳ありませんが、私達に思い当たる点はございません」

「では、次に各階層守護者に聞きたい。自らの階層で何か特別な異常事態が発生した者は居るか？」

「第七階層異常ございません」

「第六階層もです」

「はい、お姉ちゃんの言うとおりです」

「第五階層異常モ同様デス」

「第一及び第三階層以上ありんせんでありんした」

「——モモンガ様、早急に第四、第八階層を調査したいと思います」

「うむ、その件についてはアルベドに任せる。が、第八階層においては注意していく。もしあそこで事態が発生していた場合、お前の手には余る事となるだろう」

アルベドが了解の意と頭を下げる。

「では、地表部分はわたしが」

「いや、地表部分の調査には既にブロントさんがセバスを送った。現在探索の最中だ」

なんか守護者達が驚いている。まあセバスは上から数えるほうが早い戦闘力だからな。偵察で出すなんて普通勿体無い真似しないだよ。

「時間的にはそろそろなのだが……」

丁度のタイミングなのか、小走りでセバスが近付いて来る。

「モモンガ様、ブロント様、遅くなり誠に申し訳ありません」

「いや、構わん。それより状況を聞かせてくれるか?」

セバスは一瞬守護者の方を見る。

「非常事態だ。これは当然、各階層守護者が知るべきことだ」

「了解いたしました。ナザリック周辺一キロ探索したところ、草原となつており、人口建築物は一切確認されませんでした。生息していると思われる小動物は何匹か発見したのですが、人型生物や大型の生物の存在は確認出来ませんでした」

「その小動物と言うのはモンスターか?」

「いえ、戦闘力がほぼ皆無と思われる生物でした」

「…………なるほど、では草原というのも、鋭く尖っていて足に突き刺さつたり、凍つっていたりしないのだな?」

「はい、单なる草原です。特別になにがあるとは思えません」

「天空城などの姿もない?」

「はい、ございません。他にも人工物の明かりと言つたものは皆無でした」

「そうだつたな。星空だつたな。セバス、『苦勞』

リアルにおいて大気汚染が深刻なので、星空を眺めると言う事が出来ない。それだけ空気が澄んでいると言う事か。

「ともかくモモンガさん、ここがユグドラシル内と言う線が極めて薄くなつたな」

「それだけだといいんですが、どこかの国境内だつたら面倒な事になります」

「だつたら同盟か、敵対か。恭順は無いな」

「なんにせよ情報が足りなき過ぎます。とりあえずナザリックの警戒レベルを上げておきましょう」

「各守護者よ。各階層の警戒レベルを一段階上げよ。何が起ころるか不明な点が多いので、油断はするな。出来れば怪我をさせず禍根を残さないというのが一番ありがたい。言うまでも無く何も分からぬ状況はごめんだからな」

「俺からもいいか?」

「どうぞ、ブロントさん」

「お前達は人間を舐めているが、俺みたいなやアウラ、マーレが居るようにはレベルが上がれば自然と強い奴は出てくる。お前達の中から死傷者を出さないためにもまずは捨て駒をぶつけて戦力を測ることをして欲しい。今の段階では油断と遊びは無しだ」

俺の言葉に自然と守護者達の顔が引き締まる。うむ、いい傾向だな。

モモンガさんは頷いてから――。

「次に組織の運営システムについて聞きたい。アルベド。各階層守護者間の情報のやり取りはどうなつていてる?」

設定に不備が無ければ自己で完結するくらいにはナザリックは完璧だったと思う。

「各階層の警備は守護者の判断に任せておりますが、デミウルゴスを総責任者とした情報管理体制が出来上がっております」

「素晴らしい仕事だすばらしい」

「恐縮です」

俺の賛辞にそう返すアルベド。

「ナザリック防衛の責任者であるデミウルゴス。それに守護者統括としてのアルベド。両者でより完璧なものを構築せよ」

「了解しました。それでは第八、九、一〇階層を除いたシステム作りということでよろしいでしょうか?」

「八階層はヴィクトイムが居るので問題ない。いや、八階層は原則立ち入り禁止とする。七階層から九階層への封印を解いておけ。八階層には私が許可を与えた者のみ立ち入りを許可する。次に、九、一〇階層も含めた警備を行う」

「よ、よろしいのですか?」

アルベドがびっくりしている。いや、アルベドだけじゃなく他の連中もだ。第九階層から下はギルメンのプライベートルームになつてるのでそこを警備するとか普通は考えられないのだ。ちなみに俺の部屋も残つていたり、課金したものも維持している。

「至高の方々の御座します領域に、シモベ風情の進入を許可してもよろしいのでしょうか？…………それほどまでに」

シモベというのはナザリック内で自動POPするモンスター達の事だ。正直あんな雑魚共がうろついていても時間稼ぎにもならないと思うんだが…………まあ忍者対策とかにはなるか。

それともう一つ、これまでウルベルトさんの意見に則つて、そこまで突破されたら悪役らしく玉座で待ち構えようというのがあつたからそういうのが許されなかつた。ある意味聖域扱いされているのもそのせいだ。

「…………問題は無い。非常事態だ。警護を厚くせよ」

「かしこまりました。選りすぐりの精銳かつ品位を持つ者たちを選出致します」

警備はこれで一段落か。モモンガさんはアウラとマーレの方に視線を向ける。

「アウラとマーレだが…………ナザリック地下大墳墓の隠蔽は可能か？展開できる幻術だけでは心許ないし、その維持費用の事まで考えると頭が痛いからな」

アウラとマーレが顔を見合わせ、考え込む。口を開いたのは魔法担当のマーレだ。

「た、単純に魔法だけだと難しいです。地表部分の様々なものまで隠すとなると…………例えば、壁に土をかけて、植物を生やすとか…………」「栄光あるナザリックの壁を土で汚すと？」

口調は柔らかく、視線は鋭く。マーレが萎縮している。周囲もアルベドに同調して剣呑なふいんき（ry）を出している。

「アルベド、余計な口を出すではない。私がマーレと話をしておるのだ」

魔王モードなのかやたら低い声を出すモモンガさん。

「はつ、申し訳ありません、モモンガ様！」

一同の空気が一気に引き締まる。同調していた奴等も同様と受け取つたのだろう。

「壁に土をかけて隠すことは可能か？」

「は、はい。お許しいただけるのでしたら……ですが……」

「いいんじやにいか？古墳みたいにするんだろ？」

「だが遠方より確認された場合、大地の盛り上がりが不自然に思われないか？ セバス、この周辺に丘のようになつた場所はあつたか？」

「いえ、残念ですが、平坦な大地が続いているように思えました。であれば周辺の大地にも同じように土を盛り上げ、ダミーを作ればいかがかと」

「そうであればさほど目立たなくなるかと」

本格的にバタリア丘陵じみてきたな。虎が懐かしいべ。

「モモンガさん、周りが草原だつたら恐怖公の眷属に偵察させればいいんじやにいか？ 共食いにも飽きてる頃だろうし」

「そうですね。ブロントさんの言うとおり、恐怖公に伝えておけ。ただし、交戦は避けろとな。周辺警戒にエイトエッジ・アサシンとシャドウデーモンもいくらか付けておけ。さて、今日はこれで解散だ。各員、休息に入り、それから行動を開始せよ。どの程度で一段落着くか不明である以上、決して油断するな」

俺以外が一斉に頭を下げ、了解の意を示す。

「最後に各階層守護者に聞きたことがある。シャルティア、お前にとつて私とブロントさんはどのような存在だ？」

「美の結晶。その白いお体はいかなる宝石にも勝ります。そしてブロント様は力の結晶。数多の難敵を叩き潰し、今現在もその進化を止めることなど誰にも出来ません」

うん、まあプレイヤーは俺だけでギルド潰しなんてよくやつてしまし。

「——コキュートス」

「ナザリックノ叡智ニシテ、ナザリックノ盾デアル御二方ハ正ニナザリックヲ支配スルニ相応シキ方々カト」

「——アウラ」

「慈悲深く、配慮に優れた方々です」

「——マーレ」

「とつても優しい方々です」

「——デミウルゴス」

「賢明な判断力と、即座に実行する行動力を有されたお方。そして常に己に試練を課し、挑戦し続けるお方です」

「——セバス」

「モモンガ様は至高の方々の統括を行っていたお方。ブロント様は至高の御方々の古きよりの盟友にしてモモンガ様と共に最後までナザリックに残つて下さった慈悲深きお方です」

「最後になつたがアルベド」

「至高の主人であり、モモンガ様を守る最高にして最後の盾でござります。そして、愛しき方々です」

「どうやら俺もギルメン認定されているらしい。」

「……成程、お前達の考えは十分に理解した。それでは私達の仲間が担当していた職務の一部までお前達を信頼し、委ねる。今後とも忠義に励め」

俺とモモンガさんは指輪を起動し、レメゲトン——玉座前の大広間まで転移してきた。

「何あの高評価」

「予想以上だつたな」

「あの嘘が許され無さそうな状況でブロントさんの保障が出来たのは良いんですが、無いはずの胃がキリキリします」

「近いうち俺達の体がアバターで本来の肉体が別にあつたことをなんとか説明するからよ。それまでの辛抱だべ」

「お願ひします。精神異常無効で色々抑えられている状態ですが、あまり気分の良いものではないんで」

「モモンガさんも完全なる狂騒を探して少しくらいは寝ておくべき。事前にアルベドに説明しとくべきだな」

「分かりました。では一旦休憩で」

「んだな」

気疲れが激しいので一旦俺達は部屋に戻つて休むことにした。

第一話

自分の部屋に戻った俺は、メイドに茶を淹れさせた後下がらせ、くつろいでいた。

「こんなことにはなるとは思わなかつた感。でもまああのあちこち機械をつけはぎした身体よりこつちの方がいいな」

手をぐつぱぐつぱしながら一人ごちる。モモンガさんはちゃんと寝てるかねえ？

茶に手を伸ばし、一口すすると芳醇な香りが食道から鼻へと逆流する。

一眠りしたらコキユートスのところにでも行つて鍛錬に付き合つてもらうか。アイツ鍛錬用に刃の潰したのとか持つていなきそそうだから鍛冶長のところによつて研ぎに出す前の奴でも作つてもらうかな――。

俺のナザリックでの仕事は主に外で稼いでくる事だつたから今はやることが無い。いや、在庫整理とかはあるけど。かと言つて配下をぞろぞろ引き連れてナザリック内を歩くのもどうかと思うし。

「イカガ致シマシタカ？」

「いあ、一本ずつの縛りにちよつと飽きてきただよ。ハルバードとかも作つてもらつたからコキユートスは武器を追加して欲しいんだが？」

今俺は第五層の氷河エリアでコキユートスと鍛錬の最中だ。

「カシコマリマシタ」

そしてまたキンッキンッと打ち合う。これはただのアダマン製の研いでない武器だから急所以外は当たつてもどうにもならないだよ。万が一でも俺回復出来るし。

「ああそうだ」

「？」

「腕一本程度無くなつたくらいで戦闘出来なきや仲間は守れないからよ。コキユートス悪いが俺の腕を切つてくれにいか?痛みで集中力

途切れないと内に回復魔法を使えるか試しておきたい

「オ許シクダサイブロント様。至高ノ御方々ニソノヨウナ事ヲスルナド」

「なあに、俺が鍛錬で不覚を取つたつてことにはすれば良い。それにダメそなうなら切断面にポーションかけるから」

「シカシ」

「まあ、失血とか切断部分が壊死しないようにするのが重要かぬ。それに何故こんな事を言い出したのも後で全員集まつたら発表するからまず身体に慣れさせるべき。死にたくないからそうすべき」

「…………御意思ハ固イト言ウ事デスカナ」

「必要な事だべ」

「カシコマリマシタ」

「んだけばポーション渡しておく。ガントレ外すから切れる武器を出しておいてくれ」

「御意…………」

俺は左手のガントレットを取り外し、治癒薬をアイテムボックスから出しておく。くつつける程度ならこれで十分だろ。

「オ待タセ致シマシタ…………」

言葉に張りがない。よっぽど気が向かないらしい。

「じゃ、手を出せ。薬渡しておく。こつちの外したほうの腕に頼むんだが？」

「オ考工直シ頂ケマセンカ?」

「お前なら分かるはず。腕一本切られた程度で動搖して動きを止めていたら死ぬって事を」

「デハ…………御免！」

コキユートスの持つてきた刀は斬神刀皇。かつては武人建御雷さんの所有していた神話級ウエポンだべ。どうやら切れ味重視で持つてきたっぽい。

スツ……と腕に切れ跡を残すことなく通過していく斬神刀皇。俺は痛みを感じる前に切った先の腕を押さえて、痛みが来るまで待つ。

「ふむ、この程度か」

痛い、確かに痛い。が、我慢出来ないほどでもない。もつと痛いのとか・・・・・ニューロニストは気が向かにいな。まあ、この辺りで妥協しておくか。

「ブロント様、才加減ハ」

「この程度どうつて事無かつた感。ちょっと待つちえろ」

「大治癒」を唱えてくつつけた腕をねじつたりぐるぐる動かしたりする。うん、切斷された奴を細切れとか焼かれたりしたらどうなるか分からんけど切り傷くらいなら問題無いな。

「辛い役目を押し付けたな。コキュートス」

「イエ、我ガ身ナド至高の御方々ニ比ベレバ瑣事デゴザイマス」

ガントレットを着け直しながら応答する。人間だからなー。精神異常耐性があつてもゼロじやないからそこら辺は気合とかで耐えないといけないからな。

ニューロニストに比べればデミウルゴスの方がまだマイルドな拷問方法とかにしてくれるだろ。検討しとく必要があるかな。

「そいいえばコキュートス、さつき鍛錬始める前になんか言いかけてただろ。なんだつたんだ?」

「モモンガ様モブロント様モ適齡期デゴザイマス。御結婚ノ予定等ハゴザイマスデシヨウカ?」

「結婚、結婚かー」

モモンガさんは、結婚は出来るだろうけどブツが無いから交渉が出来にい。この世界のアイテムか残つてゐるデータクリスタルでそういう装備を作るくらいしか思いつかにい。俺、俺は・・・・・アルベドはギルメン愛してるだけど、どちらかというとモモンガさん派っぽいし、シャルティアはネクロフイリアだから論外。アウラは幼すぐる。だとしたらメイドから誰か選ばないといけないといけないのか? いや、そもそもこの世界に来てから片手で数え切れる日数しか居ないぞ。そう考えたらまだ早いんじやにいか?

「今はまだそんな予定は無いな」

「左様デゴザイマスカ」

なにやら肩を落としている。コキュートス。

「どうすた？ 武人タイポのお前が結婚とは珍しい。誰かに何か吹き込まれたか？」

「イエ、コウ言ツテハ不敬ナ話ナノデスガ——」

どうやらいつかは俺達が他のギルメンみたいにここを去る可能性があるから世継ぎとか言う話になつたらしい。おいおい（笑）

「この先の予定は未定だが、少なくともここを当分離れるつもりは無いぞ。空けるとしたらなんかの仕事が出来たときくらいじやないかな？」まあ一般論でね。だがお前達が懸念している事は分かった。この先どう状況が転がるか分からんが前向きに検討しておく」

そう言つて安心させるくらいしか俺には出来ない。腕斬らせてちょつと申し訳なく思うし。

「ナント勿体無キオ言葉……我々ノ言葉ヲ聞キ届ケテクダサリ深ク感謝シマス」

「気にすんな。ならくつつけた腕の調子を見るためにももう少し鍛錬に付き合つてもらうか。そうだな……子供が出来たらコキュートスに習わせてみるか。得物は大事だが得物に拘る様じやこの先生きのこれないからよ。武芸百般は上流階級の必修項目だべ」

「カシコマリマシタ。ソノ時ハ全身全靈ヲ以ツテオ教工サセテ頂キマス」

お、気合入つてんな。調子が戻つたつて事でいいのか？このことはモモンガさんにも言つておこう。悶える様が目に浮かぶ（愉悦）

この後メチャクチャ鎧を削つた。

「——つてコキユートス達が心配してただよ」

「あいつ等は……」

現在モモンガさんの私室で雑談中。どうもナザリック内でもうろつくたびに儀仗兵が着いてくるから気疲れしてつぽい。「ナザリックにおいてお前達の警備を信頼しているからもう少し気軽に歩かせろ。ん？俺の信頼に背くのか？」とか言つて儀仗兵は無理やり解散させたけど。後茶の用意をしてもらつたらメイドは下げた。

「そういうえばアルベドには相談したか？」

「完全なる狂騒を使うことはアンデッドの俺が寝室で寝てたら騒ぎになるから伝えてありますけど、その、性欲については……もじもじする骨。

「モモンガさんはペロロンさんくらい開き直ることが必要不可欠。たっちはん程のリア充になれとは言わないから自分に正直になるべき。それにアルベドはサキュバスだから夢の中で【ヤーン】な事をするかもしれないから骨でも関係無いんじゃにいか？」

「そ、それは確かに……！」

「だども夢の中でも出来るものは出来るかもしないから気をつけろよ」

「それって全然大丈夫じゃないって！」

「ファンタジーの世界は理屈が通らない時とかあるからしようがない」

「はあ、しようがないか……」

話が落ち着いたところで茶をすする。うみゅ、リアルでは味わえない芳醇な香氣が鼻腔をくすぐるべ。

「そうだ、ブロントさん。ちよつと外を見に行きませんか？セバスが星空を見たって言つてたんですよ。ああ、ブルー・プラネットさんにも見せたかったなあ」

「いいなそれ。でもどうせだからこつそり行くか。モモンガさん変装するべき」

「そうですね。ブロントさんはどうするんです？」

「俺はサポにシーフ持つてるから大丈夫だ。だけど念のためオジエサーチートに着替えておくか」

オジエサーチートはガラントサーチートの黒い奴。夜間行動するのに向いているんじやないかな？

「分かりました。では着替えたら円卓で待ち合わせして、指輪で第一階層に飛びましょーか」

「んだな」

一旦俺達は着替えることにした。

「モモンガさん、その格好は？」

「たまには甲冑もいいかなつて」

「でもそれだと魔法使えないだろう」

「5個くらいなら何とか・・・・・・」

「後で甲冑着けた魔道士の参考画像見せるからよ。魔法が使えるよう

に作つてみるべきそうすべき」

「そうですね。魔法詠唱者が甲冑着けてても別におかしくないですよ

ね！」

こんなことを駄弁りながら第一階層を目指していた。

すると目の前に12体の悪魔が。

「どうします？ ブロントさん」

「普通にご苦労つて言つて通ればいいんじやにいかな？」

「試してみる価値はあるか」

特に気負わず普通に歩く。

「やあ、ご苦労」

「これはブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・デザー

様と・・・・・？」

「ダークウォリアーとでも呼んでくれ」

「そう言う事だ。今はダークウォリアーらしいぞ？」

〈普通にダークでよかつたんじやにいか？〉

〈いい、いや咄嗟に出たのがあれだつたので〉

〈今度お忍びで出かけるとき苗字はダークな。戦士が入つてゐるのに魔

法メインとかQMZだけでいい〉

〈解せぬ〉

突然の来訪に困惑する12体の悪魔。

「ちょっと通るぞ」

「お、お待ちください！」

平伏されながら待つたをかけられる。

「何、気にすることは無い。最近警備体制とか強化したし抜き打ちで見て回つてるだけ。でも目立つと意味が無いからこんな格好をして

いるだ。それとちょっと外の空気吸つてくる」「

「おや、どうされましたか？ブロント様」

悪魔達の後方にデミウルゴスが居た。影になつて見えなかつたようだ。

「ちよつとこのダークウォリアーさんと抜き打ち検査だ。ついでに外の空気を吸つてくる」

「しかし至高の御方々に万が一のことがあつてはいけませんので・・・・」

「ならデミウルゴスでいいや。お前着いて来い」「かしこまりました」

「な？ どうつてことなかつただろ？」

「ブロントさんの肝が太すぎるんですよ・・・・」
なにやら呆れられているようだが細かいことを気にしているとは

げるのに気にならない。

「じゃ、行こうか」

行軍を再開することにした。

第一層の靈廟から出ると、とても素晴らしい光景が広がつていた。
「素晴らしいなすばらしい」

「これは凄いですね」

一面の星空にしばし見とれる。

「ブロントさん、ちよつと上に上がつてみませんか？」

「いいね」

『飛行』のペンドントを起動し、俺達3人は空を目指す。

「まるで宝石箱のようだ。ブルー・プラネットさんに見せてあげたかつたな」

黙つて同意し、景色を堪能する。

「そうですね。美しいのは、至高の御方々の身を飾るためかと思われます」

「デミウルゴス、俺は愛であるだけでも十分なんですがね？」

「そうだな、この宝石箱を手に入れる、なんてのも良いかも知れない

な

やばい、忌まわしき厨二の記憶（クロレキシメモリー）だ！

「いや、私一人で独占するのは良くないな。ナザリック大墳墓を——
AINZ·ウール・ゴウンの友達を飾るのにふさわしいかもしない
な」

モモンガさんの独白は続く。

「お望みとあらば、ナザリック総力をあげてこの宝石箱を手に入れて
参ります。そして私が敬愛する至高の御方々に献上できれば、それに
勝る喜びはございません」

「世界征服とか——いいかもしれないな」

「デミウルゴスが感極まっている。

「ん？ やるか？」

ギルド潰しにも飽きてきていたところだ。

「やりましょうか」

俺達は軽いノリで笑つて頷きあつた。

その後マーレが大地を大波のごとき魔法で動かしているのを見て、
いたわることにした。

「ブ、ブロント様、モモンガ様。ようこそお出でいタダキます」

「落ち着きたまえ。ほれ、深呼吸」

俺はエースにだけ許される魔法の言葉を発する。俺はナザリック
のエースだべ。

「すーはー、すーはー」

「落ち着いたか？」

「は、はい」

「何、マーレが頑張っているようだから褒美をやろうと思つてな」

さつき降りるときヘルムを脱いだモモンガさんが幾分か優しい声
で話しかける。

「え、で、でもこれはナザリックに必要なお仕事ですし……」

「そう、そしてとても重要な事だ。ナザリックの外においてどうして
私達を凌駕する存在が居ないと言い切れる。そういう存在の有無を

確認するまではナザリックを他者の目に触れさせてはならん。故にマーレよ。お前の働きに私は大変満足しているのだ

うむ、アビセアで有頂天になつてた俺はアドウリンでそこら辺のバツタ相手に死にかけた。

「…………分かつてくれたか。マーレ」

「はい、モモンガ様！」

「よし、ではマーレの仕事に対して褒美をやろう」

「そ、そんな、当然の働きですよ！」

「仕事に応じて褒美が出るのは当然のことだ」

「至高の方々に仕える為にみんな働いているんですから貰うなんて畏れ多いです！」

なんか長くなりそうだな。

「マーレ」

「ブロント様？」

「お前は良く頑張つているしこれからも頑張つてくれるだろうから貰つとけ」

「モモンガ様にブロント様まで…………わ、分かりました！」

分かつてくれたか。

「では手を出せ」

そう言つてモモンガさんは指輪を取り出した。

「そ、そんな過分すぎます！」

出したのはリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。モモンガさんの信頼の証もある。

「お前はよくやつてくれている。そしてこれからはこれが必要になるだろう。転移の阻害されているナザリックで間に合わなくなつても仕方が無いからな」

一回俺が喧嘩チームD R A K ～ダーク～を作つてしまやすくしたときにはやらかしだよ。それで1500人相手の時にモモンガさんの世界級アイテムのモモンガ玉が発動して一応難を逃れたが。

だからこっちをチラ見しないで下さいませんかねえ？モモンガさん。

「それとも……お前自身が過小評価していると、お前以下の働きしかしていないものは全員受け取れなくなるぞ？」

パワハラだけどこうでも言わないと受け取らないだろうから仕方ないね。モモンガさんの言葉に同意だ。

マーレはモモンガさんからリング・オブ・AINZ・ウール・ゴウンを受け取ると、何故か左手の薬指に着けてほうつと眺めていたが――。

「も、モ、モモンガ様！　僕にこれほどの褒美をいた、いただき、ありがとうございます！」

茶釜さんが居たなら「結婚しよ」って言つてたかもしれん。ペロロンさんも言つてたかもしれん。業の深い姉弟だ。

「これからも励めよ」

モモンガさんがぽんとマーレの肩を叩く。

「はい！」

丸くまとまつた。イイハナシダナー。

「でも、モモンガ様、どうしてそんな格好をしているんですか？」

「そ、それはだな」

俺は色違いであんまり変わらんがモモンガさんは甲冑だ。

「簡単よマーレ」

後ろには月を背負つたアルベドが居た。絵になるな。

「モモンガ様とブロント様がいらっしゃつたらその御威光にみんな仕事の手を止めてしまうわ。それにお二人はナザリックの警備強化に当たつて抜き打ちの検査をしていたの。誰よりもナザリックを想つての事よ」

「そうだつたんですか！　モモンガ様、ブロント様！」

「さ、流石だアルベド、私達の真意を見抜くとは」

「うみゅ」

「モモンガさん、嘘は言つてないんだから気にするんじやない〈でもぎくつてするじやないですか〉

「守護者統括として当然でございます」

につっこりと慈愛を込めて笑うアルベド。聖母のようだ。悪魔だけ

ど。

「そ、 そだつたんですか！」

驚くマーレに視線を向けたアルベドが温度を感じさせない表情になつたが、それも一瞬の事ですぐに元に戻つた。

「うわあ（戦慄）」

「何かございましたか？」

「い、いやなんでもにい」

触らぬ神に祟りなしつて言う名ゼリフを知らないのかよ。

「で、ではマーレよ。邪魔をして悪かつたな。休憩を取つたら隠蔽作業に戻れ」

「はい、モモンガ様！」

「やばいモモンガさん！」

「どうしました？ ブロントさん」

「アルベドがマーレをロツクオンしてた！ 多分原因是指輪だ」

「ど、どうしましよう？ アルベドにも渡したほうがいいですか!?」

「だな。アルベドは守護者統括つて言う肩書きだけでリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを貰う理由があるだよ。でも『デミウルゴスはまだだな』

「え、守護者全員に配つたほうがよくありませんか？」

「きつつき相応の働きつて言つてしまつたから散歩に付いて来ただけのデミウルゴスにはまだやれにい」

「分かりました」

多分モモンガさん一人でも時間をかければ答えに辿り着くんだろうけどその時間が致命的になつたり選択肢に余裕が無くなつたりする可能性がある。まだ光らないけどもう少しで光りそудだし。

「アルベド、守護者統括、常々ご苦労。見れば身を粉にして駆けずり回つて いる様子。よつてお前にも褒美を与える」

「えつ、そんな、モモンガ様！ 勿体無いお言葉です！」

「いいのだ。みなまで言うな、アルベド。私もブロントさんも解つて いるのだ」

「うむ、常に身だしなみを気にするアルベドが埃とか気にする余裕も

無く動いているのは解っているだよ。受け取つとけ

「ブロント様・・・・・」

「それにそこまで一生懸命だからお前の魅力は埃なんかにびくともしないんだが？ だろう、モモンガさん」

「ああ、そうだとも」

全力でヨイシヨする俺達。荒御靈には供物を捧げて鎮めなければならぬ（鎮魂）

「ほら、モモンガさん、サービスして薬指に嵌めてやれ！」

「ええ！ そんなことしたら取つて食われそうじやないですか！」

「大丈夫だ。食われるも何もブツが無いじやにいか」

「さつき完全なる狂騒の事伝えちやつたんですよ！ 今夜の夢が悪夢じみた淫夢になるじやないですか！」

「沈静化するまでシャルティアかアウラのそばに居とけ。デミウルゴスとコキユートスはダメだ。賛成しかねない」

「でもそれって根本的な解決になつてませんよね？」

「モモンガ様・・・・・？」

「時間切れだ」

「畜生！」

ああ、るし★ふあーさんだつたら絶対この状況楽しんでたな。俺もちょっと楽しい。

「・・・・・・アルベド、手を出せ」

「はい・・・・・！」

当然のように左手を差し出すアルベド。期待を裏切つた時俺は全然力でとんずらしなければならない（警戒）

モモンガさんは震える手で嵌める指を選んでいる。前衛の筋力で誘導するアルベド。あ、モモンガさんが負けた。

「嗚呼、モモンガ様・・・・・！」

「んん！ これからも忠義に励め、アルベド。デミウルゴスはまた次回だな」

「はい、その指輪に見合うよう全靈を尽くします」

なんとかデミウルゴスによつてお茶を濁したモモンガさん。頑張

れ、モモンガさん！ 負けるな、モモンガさん！ 完全なる狂騒は一時間で効果が切れるから全力で逃げろ！ でもプレアデスを召集している時に完全なる狂騒を持ったアルベドが追いかけてきたら諦めろといわざるを得ない。

第二話

マーレが仕事を終え、守護者各員が顔を出せるようになつたので伝えるべきことを伝える為、この短い間に何度も呼ぶのは悪いと思いつがらも召集をかけることにした。

「お前達、良く集まつちえくれた。今日は略式でいい。モモンガさんと俺以外の至高の41人と呼んでいるみんなの事にも関わる重大な情報だ。心して聞け」

『はっ』

玉座の間でモモンガさんは玉座に座り、俺はその横に立つてゐる。モモンガさんは俺の指導したとおり目を瞑るような感覚で眼窩の奥の赤い光を小さくして沈黙を貫いている。

「まず、俺達を含め至高の41人と呼ばれる、分類的にはプレイヤーと言ふ者達だ。俺達は別の世界に肉体を持ち、この身体には化身として降臨している」

息を呑む。ここに居るナザリック各員。

「そしてかつての世界「ユグドラシル」を管理する創造主の下、特に使命とかそう言ふのは無く、結構好きに生きちえいた。創造主はたまに試練とか出したけどこれも受ける受けないは自由で、むしろそれを娛樂として認識していたな」

続ける。

「だけど長い年月が過ぎ、創造主に世界を維持し続ける力が無くなつて來た。41人が居なくなつた理由はそこにもあるべ」

「誠で御座いますか!? ブロント様!」

他の連中も同様の疑問だつたんだろう。代表してアルベドが問い合わせてくる。

「うむ、最後まで話すから落ち着くべき。……まあそんな感じで創造主に力の限界を感じる中、俺とモモンガさんはせめて最後まで世界と共にしようと言ふ結論に至つたわけ」

要約すると「サーバー終了するまでINしませんか?」って事。

「もちろん他のギルメンにも伝えた。でも肉体が2つあつても操れる

のは1つずつだけ。リアルと言う世界でも生活するために働いたりしなきやいけないから仕方が無い。疲れた身体に鞭打つてへ口へ口さんが来てくれたけど、まあそう言う事だべ。あっちの世界は息一つするにも代償が要る世界だ」

人工心肺が必要とかリアルオワコン過ぎだろ。

「だからギルメンは恨んでくれるな。とと、脱線した感。話を戻すぞ。そんな感じで俺とモモンガさんが世界の最後を見ようと玉座の間に居たら、そのときふしげなことがおこった」

誰かがゴクリと息を呑む。

「世界が終わつたはずが……この世界に來ていたわけだ。そこから先はお前等も知つてはいるはず。だけど思い出せ。俺達プレイヤーはリアルに肉体があつた。それも三大欲求を必要とする肉体で、俺もモモンガさんも今の身体より脆弱だつた。そして一国を統べていたとかそう言う事も無くて、普通。つまり世界に強く影響を与えるような存在では無かつたわけだ。質問は最後に受け付ける」

だから黙つて聞いてとけ。

「だからな。俺もモモンガさんも、あまり畏まられると居心地悪いだよ。お前等の事が信頼出来るからモモンガさんと相談してぶつちやけた訳。俺達から見たらお前達は至高の41人……つまり友達の子供みたいな感覺。もう少し恐怖より親しみを込めて欲しい。後期待に背く事を死ぬより怖がつてゐるみたいだけど、俺達の心がそこまで狭いわけが無い。失敗したらダメだつたところは叱つて、許す。良く出来たら褒める。お前達真面目だからいきなりは難しいかもしれないけど、俺がこう言う事を言つてたなつて覚えておいて欲しい」

見回すと感動して泣いている奴も居る。そつとしておいてやろう。

「私が言いたい事は事前の打ち合わせによりブロントさんに全て代弁してもらつてはいる。お前達に製作者の面影を感じ、また、ギルドメンバーの「私の子供はこうであつて欲しい」と言う願いを感じるのだ。よつて相性が悪い者同士も居ると思うが……製作者であるギルドメンバー同士が本気で仲が悪かつたわけではないと理解せよ」

ここはモモンガさんのアドリブらしい。まあ、アライメントの方向性の違いで仲違いとかは勘弁して欲しいとは思うな。

「以上だ」

モモンガさんがその一言で締めた。

「モモンガ様もブロント様もそのような事を胸に秘めていたのですね。その辛さは私には想像すら出来ません。それで……モモンガ様はアレの存在を私に話してくれたのですね……申し訳ありません！　至高の御方々の心中を察せず私だけ浮かれてしまい……」

アルベドは自責の念で押しつぶされそうな顔をしている。

「よい、よいのだアルベド。その件については後で話し合おう」

〈これって二人つきりの方がいいですよね？　突然豹変して（性的に）襲われませんよね？〉

〈どうしても心配なら俺も同席するが……二人の方がいいな。気まずいだろ。俺が居ると単純に〉

〈うつ！　そうでした〉

玉座の間はしめやかなふいんき（何故か変換できない）に包まれているが、いつまでもこのままでもいかんだろ。

「お前等、気分を一新してこれからも俺達に仕えて欲しい。よろしく頼むんだが？」

『御心のままに！　至高の御方々よ!!』

感涙して声を裏返しながらも忠誠を示すナザリックの従僕達。俺がやれることは現段階で全部やつた感。これでモモンガさんの重圧も解消すればいいんだがな。

「いやー、これで少し楽になりそうですね」

モモンガさんの声が明るい。現在モモンガさんの部屋で慰労会だ。セバスが控えているけど、いつもアレの後思うところがあつたようで、口元にかすかな笑みを浮かべている。

「こういうのは早めにやつとかないところじれるからぬ。モモンガさんは嬉しそうな時も何故か光るから、心労は少なくして小さくても楽し

いことをたくさん見つければいいと思った（精神分析）」

「そうですね。當時心の平静を取るのは戦闘だと有利なんでしょうけど、本当に心までアンデッドになつたみたいで強制的に拘られるのはあまり気分がいいとは言えませんから」

「さて――次はどうするかな」と、こぼす。

「外の様子でも見てみますか？」

モモンガさんが提案を出す。

「モモンガ様――」

「あー、分かつてている。セバス。直接ではない。マジックアイテムを使うのだ」

まだ魔王ロールが抜けていないが、幾分か軽い口調になつたモモンガさん。

「なんかよさげなのはあるけ?」

「特に対策とか取られていないなら遠隔視の鏡でいいかなと」

「んだば見てみるべ」

部屋の壁に立てかけてある鏡をモモンガさんが操作しはじめた。

「ここは……こうで、えーと……」

「……タツチパネル操作するような感じじゃないか?」

「ふむ……じゃあ、こうして、こう。おっ、出来た」

「おめでとうござります。モモンガ様。ブロント様もご慧眼でいらっしゃいます」

「どうよ？ モモンガさん」

「どうもタツチパネルにマウス操作が混じっている印象ですね。ほら、ここをぐるつとやると視点が変わる」

「全部タツチパネル式にしたグーグルアースみたいだな」

「言ひえて妙ですね」

そんな感じで近郊の森から徐々に視点を広げていく。

「ん？」

「どしたー？」

「これは……祭り？」

「血祭りだぬ」

「誰が上手い事言えと」

モモンガさんはさほど気に留めていないようだ。俺も戦争映画の略奪シーンとかを見ているようでこれを見ながら肉食うのは辛いな。とか言う程度の感想しか出でこない。

「如何致しますか?」

控えていたセバスが俺達に尋ねてくる。

「捨て置く」

さも当然のように選択するモモンガさん。

「まあ、落ち着きたまえモモンガさん。見たところ装備に統一感があるから正規兵か騎士団クラスかもしだれにい。近場の戦力を測るのに丁度いいかも」

「そういう見方も出来ますね」

視線は鏡から外さず答えるモモンガさん。

「弱過ぎて即死で瞬殺されたらしようがないから……中位アンドツドでも送つて様子を見てみるか。ほう」

鏡の向こうでは村娘が甲冑の兜に拳を入れているところだった。なかなか気合入つてんな。

「頑張ったが、こるは拙そうだな」

「モモンガ様……」

セバスが何か言いたげにしている。ああ、確かにアライメントの善性が高かつたな。

「誰かが困つていたら、助けるのは当たり前。か……」

「ほう?」

「行きましょう、ブロントさん。まずあの娘を助けてから。いいですね?」

「うみゅ」

どうやら誰かさんの影を見たらしい。やっぱあの人もナイトだつたか。

「私とブロントさんで行く。後詰めにアルベドを呼んで来い。編成はアルベドに任せる」

「かしこまりました」

「行きましょう、ブロントさん！」

「ああ」

俺とモモンガさんはこの世界で人助けをしてみることにした。

俺が〈転移門〉をくぐると、モモンガさんが一人仕留めたところだつた。

「ブロントさん、こいつ等弱過ぎます。〈心臓掌握〉に全く抵抗しませんでした」

「見た感じただの鉄装備みたいだしな。魔法付与もされてない。それでも思わず隠し玉とか持っていたりする可能性もあるから油断はないでおくべき。自分のHPを捧げた分だけダメージ与えてきたりとか」

「それは怖いですね。まあ、もうちょっと弱い魔法にしてみましょうか」

俺達がその場でのほほんと会話していてもこいつ等は動かなかつた。それとも動けなかつたのか？

「な、なんだダークエルフじゃねえか！ そつちのアンデッドはやばそうだが黒耳長程度なら俺達でもなんとかなるだろ!?」

「ぶち殺してやる！」

自分に言い聞かせるように鯨波を上げる騎士達。

「この国だとダークエルフはそんなに社会的地位が低いわけ？」

「後で誰かに聞いてみましよう」

「ごちやごちや喋つてんじやねえ！」

一人がこちらに斬りかかってきた。振り下ろしてきた剣を俺は盾で弾き、体勢の浮いた相手に――。

「メガトンパンチ！」

グラットンを使わずそのまま殴りつけた。

「げはあ！」

アツパー気味に殴つた相手は宙を浮き、受身も取らず地面に叩きつけられる。

「うーむ、俺は前衛なんだがモンクは取っていないんだが?」

見ると鎧が骨ごと大きく陥没し、喰らつた騎士は四肢を投げ出し血反吐を吐いて動かない。一撃で死んでしまつた(フェイタルK.O.)

「こいつ、強いぞ!」

「モモンガさん、こいつ等全力でぶん殴つたら穴が空きそうだ」

「それで済めばマシだと思いますけどね。では、〈龍雷〉」

残る敵を第五位魔法で一掃するモモンガさん。魔法抵抗力も無しか。

「片付いたな。さて」

村娘一人を見るモモンガさん。

「ヒツ!?

悲鳴を上げる村娘。

「あ、あーモモンガさん。レベル一桁っぽい村娘じゃスケルトンでも怖いと思うぞ。一般論でね?」

「む、それもそうか」

「俺が対処してみよう」

「…………頼みます」

あ、モモンガさん凹んだ。

「お前等」

「は、はい!」

「〈大治癒〉をおごつてやろう」

いちいち治療箇所をちまちま治すのがめんどい為、とりあえず〈大治癒〉をかける。

「ツ!…………痛くない。手も、痛くない」

「そつちのちびっ子にはジュースをおごつてやろう」

俺はアイテムボックスの中から「ジュース」とラベル打ちされる無限の背負い袋を取り出して、オレンジジュースを取り出した。貧弱一般人の幼女だと栓抜きですら使うことが出来なさそうだったのを王冠は取つてやる。

「ほれ、甘いものでも飲んで休んでいるべき」

村娘の小さいほうにジュースを渡す。

「あ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

「それほどでもない」

無事解決したのでモモンガさんの方を見る。

「それどうしたわけ？モモンガさん」

「いや、顔が怖いらしいんで隠そうと」

しつとマスクを被り、ガントレットを装備したモモンガさんが居た。

しかしよりによつてしつとマスクか。いや、待てよ？

「モモンガさん。これは俺も被るべきか？ ほれ、同じ組織とかそんな理由で」

「いえ、いいです。この世界でしつと団とか結成したくないです
し・・・・・・」

「そかー」

なにやら間の抜けたふいんき（何故か変換でき r y）になつてしまつた。

「お待たせしました。モモンガ様。ブロント様」

ちよつと遅れてアルベドが完全武装で出てきた。角ごと保護するフルフェイスヘルムに病んだ緑の光を放つバルディツシユが印象的だ。

「ちようどいいタイミングだつたぞアルベド！」

場の空気をこまかすためにモモンガさんが全力でアルベドに振る。「セバスから用件は聞いているか？」

「はい、村人の保護、と」

「そこの彼女等はその村人だ。敵はそこら辺で倒れている奴等と同じ鎧を着けている」

「了解しました」

「では、実験と行こう」

——中位アンデッド作成、デス・ナイト。

兵士の死体の上に黒い靄のようなものが発生し、騎士に覆いかぶさる。靄に包まれた騎士の死体は黒い粘液を吐き出し、それが身体を

覆っていく。

「ひつ！」

再び悲鳴を上げる村娘達。

「…………殺しますか？」

「保護対象を殺してどうする」

モモンガさんがアルベドをたしなめる。

「失礼しました」

「あー、大丈夫だ。あれは俺達の言う事を聞くモンスターを作つていいだ」

村娘に目線を合わせて優しく言い聞かせる。怖がつちえいるからな。

「あ、あの、騎士さま？　は、あの人たちとお仲間なのですか？」

「ああ、大事な友達だよ。それと人は見た目じやにいぞ？」

「す、すみません！」

「分かつたなんらしい」

ぽんぽんと頭を叩いて安心させておく。すかしこれはどう言う事だ？　器用値とか下がるとこうやつて軽く撫でたつもりがスプラッタな事になるか？

「オオオオオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「お、出来たか」

大きさは2メートルと2、30センチくらい。元の死体かは考えられないほどの肉体の厚みに加え、1・3メートルくらいのフランベルジュとタワーシールドを装備している。コイツが持つと両方とも片手用に見えるくらいだ。

中位アンデッド、デス・ナイト。レベルは35程度と低いものの、防御力はさらに+5レベルくらいに相当し、一撃なら致死量のダメージに耐え切るスキルを持つ。そのスキル故に壁役として魔法詠唱者に好まれているアンデッドモンスターだ。

「よし、デス・ナイトよ。あの鎧を着ている者共を殲滅せよ」
モモンガさんが指令を飛ばす。

「アアアアアアアアアア！」

そのままドスンドスンとデス・ナイトは村の方向に駆け出してしまった。盾が盾放棄してどうするわけ？

「ええー…………」

これには思わずモモンガさんも啞然。

「自由度が高くなつたな」

「そうですね…………プロントさん。 そとでも考えないとやつてられません」

「これだつたら〈星に願いを〉も選択肢が無くなつて経験値込めた分だけ願いを叶えてくれるんじやにいか？」

「ありえそうですね」

「まあ、なんにせよもう何体かデス・ナイト作るべき。使い捨ての壁は多くて困ることは無い」

「だけど忍者。てめーはダメだ。」

「そうですね。ならば」

さらに損壊が少ない死体を3体ほど見繕つてデス・ナイトを作成する。

『オオオアアアアアアアアアアア！』

「お前はこの場でこの娘達を守れ。残りは私達を守れ」

『アアアアアアア！』

「うるさい黙れ」

『……………』

「うむ」

モモンガさんが命じると黙るデス・ナイト。

「よし、じゃ、行きましょうか。プロントさん。アルベド」

「おう」

「はい」

でももしかしたら先行したデス・ナイトが敵を全滅させているかもしれに。

第三話

先行しているデス・ナイトに追いつくために〈全体飛行〉をモモンガさんが唱え、村の上空まで来た。

「そこまでだ、テス・ナイトよ」

見ると、敵の騎士がもう4人くらいしか残っていない。ちよつと遅かつたかな。

「初めまして。我々はアインズ・ウール・ゴウンと言う」
敵の騎士は怯えと、諦め、そして疲れ。そんな感情を煮詰めた顔をしていた。

「投降すれば、『いやあ、待てモモンガさん』ますテス・ナイトに、『いい等囲むよう言つてけれ』ブロントさん？」

こここの村人感情的に一人くらい生贊が居たつていいだろ。だからお前等、お前等の国に伝える奴が一人、生贊が一人、残り2人は俺達と

（こ）いつらを拷問にかけて国の情報を引き出しどうかないと。まあかけ

た

「それは確かに

「それにこいつ等は認めたくはないが騎士階級みたいだから識字率も高いはず。言葉は通じても文字が違うつてのはこういう異世界転

「流石ですねブロントさん。ウルベルトさんと厨二について何時間も議論するだけあります」

「それほどでもないがこの世界に来たからにはモモンガさんもそこら辺身に着けるべき」

善処します

俺の言葉に僅かな抵抗の意思を見せるも、さらに増えたデス・ナイトにより心を折られる騎士達。

「よし、お前等自推は間わないが立候補したら投石刑か両手足折つて死ぬまで棒叩きからせめてもの慈悲として自害してから斬首にして

やる俺は優しいからな感謝しろよ」「うわあ」

「そのような虫けら共に温情を与えるとは流石でござりますブロント様！」

ドン引きするモモンガさんは対照的に尊敬の視線を送つてくるアルベド。

「中世だとこれくらい当たり前だ」

「いきなり馴染み過ぎですよ！」

「仮に逃げたら逃げた奴はこいつ等のシモベとして肉体が朽ち果てるまでずっとゾンビだからな？」

そこら辺でうめき声を上げながらも号令を待つデス・ナイトとスクワイア・ゾンビ。後から合流した奴は黙つたままだが。デス・ナイトに殺されるとデス・ナイトに従うゾンビになつてしまふのだ。

「…………」

騎士達はどうしたらいのか分からないと言つた表情をしてお互に見ている。

「ほむ、分かった。じゃ、お前等武器を捨てて殴り合え。勝った奴が伝令、負けた奴3人から適当に生贅選ぶから。ちなみに相手を殺した奴は問答無用でゾンビにして伝書鳩代わりにするからな」

聞き終わるや否や絶望した表情で神を罵りながら殴り合う騎士達。デス・ナイトに囲まれているから村人を人質にすることすら出来ない。

「えげつないっすねブロントさん…………」

「敗者はこれくらい妥当だし、ぐだぐだしてるからだ」

体力も限界に達していたのか程なく決まる勝敗。

「デミウルゴスにも見せてやりたかつたな」

「ブロントさん確かアライメント極善でしたよね？」

「そら光輪の善神で死ぬくらいならクエストしてアライメント上げるだろうな」

「善性カNSTしている友人に悪性カNSTしている自分がついていけない件について」

「よくあることだべ」

逆に悪性が強くてメリットある時はやつたけど、そうじゃない時は基本そんな感じだ。ついでに言うとグラットン所持する時にもアラメントが関係してくるだよ。

「よし、デス・ナイト達よ。気絶している騎士達を連れて行け。お前は国に帰つて同じような事をするなら我々アインズ・ウール・ゴウンが直々に潰しにいつてやろうと伝えよ」

モモンガさんの命令で1人を除いて肩に担がれて行く騎士達。最初の1体が2人連れて行つてしまつたので1体余つたのが置いてけぼりにされている。

「悪は滅びた。どうするお前等。1人やるから処刑するか？」

「い、いいえ！ 全て貴方様方にお任せします！ 村をお救い下さりありがとうございます！」

村長らしき男が出てきて必死にお礼の言葉を言つてゐる。ん？ 対応間違えたかな？

「それは良かつた。ですが我々も無報酬と言うのは割に合わなくてね。生き残つた人数分を報酬に加算してくれるかな？」

モモンガさん抜け目ないね。

「こ、この村の状況ですとそれほどたくさんの金額を支払うのは難しいのですが……」

「モモンガさん、交渉は任せる。俺にデス・ナイトの命令権をくれ。騎士のゾンビとかどつかにやつとかないとな」

「分かりましたブロンントさん。デス・ナイト達よ。ブロンントさんの命令に従え」

「でしたら私がモモンガ様の護衛に回ります」

「うみゆ、任せたぞアルベド」

「そういうやあの村娘放置しつぱなしだつたな」

「ブロンントさん迎えに行けます？」

「行つてもいいが……モモンガさんが骨だつた顔を見られて、いるから俺だけだとスクロールでも使わないと記憶操作が出来ないだよ」

「スクロールも補充が効くか怪しいですしね。分かりました。俺が後で行きます」

〈任せた〉

俺は盗賊系のジョブを持つているが、こいつはスクロールを騙して使えるので本来使えるジョブじゃないのに使うことが出来るだよ。騎士の死体はともかく、村人の死体をゾンビ達に片付けさせるわけにも行かないでのデス・ナイトに命令して騎士の死体だけを片付けることにした。

俺達は部外者なので遠目から村人の葬儀を見ている。どうもこの世界では死んだらすぐに葬儀をするらしい。

「なあモモンガさん」

「なんでしょう？」

「デス・ナイトはとっくに制限時間来ているはずなのに消えないな」

「そうですね。後で媒介なしでデス・ナイトを呼んでみて比べてみましょう」

「それがいいべ」

「モモンガ様、ブロント様」

声を掛けられたほうを見ると、アルベドに連れられたアメコミ風な忍者装束を着て八本足の先が全て刃物になつている蜘蛛型モンスターが居た。敵意が無いから放置してたけどこいつか。

「エイトエッジ・アサシンか」

「本日はご機嫌麗しゆう」

「用件だけ話せ」

「はつ、私を含め400の従僕がこの村を襲撃出来るよう準備を整えております」

「どこをどう曲解したらそうなった。

「…………襲撃の必要は無い。お前達を指揮しているのは誰だ？」

「はつ、アウラ様とマーレ様です」

「モモンガさん」

「どうしました？ ブロントさん」

「さつきモモンガさんが言つてた偽装工作云々だつたら今回全滅した件で調査しに別部隊が来る可能性がある。村を見捨ててもいいって言うなら放置してもいいけど現地人に親切してこの村をセーフハウスクとかエクスチエンジ・ボックスにかける物資とか必要だつたら中継点にする為にしばらく張り付かせておくべき」

「成る程」

「で、どうする?」

「そうですね……この村だけだとリスクに見合わない気もしますけど、ナザリックが近いですからね。そこまで嗅ぎつけられたら困りますし、威力偵察と捨て駒に消耗戦を仕掛けさせて、戦力の分析と可能なら口封じをしましよう。……エイトエッジ・アサシン。今言つたとおりだ。アウラとマーレ以外は捨て駒を用意せよ。エイトエッジ・アサシン。お前達はどのくらい居る?」

「コキユートス様と共に周辺警備している者以外の10名です」「ならばお前達を伝達係に任命する。敵の戦力が予想より大きかつた場合の保険だ」

「御意」

「こんな感じですかね? ブロントさん」

「いいんじやにいか? いざとなつたら敵を怒らせてとかしてナザリックに誘い込んで潰せばいいだよ」

「ダメそだつた場合は?」

「村と捨て駒を見捨てて撤退だな。捨て駒に死兵を任せて俺達は散開して撤退後、ナザリックに帰還つてところか」

「せつかく救つた村ですしそうはならないといいんですけどね」

「んだな」

俺達は視線は葬儀に目を向けたままこの村の最悪を想定していた。

歩きながら色々な事をモモンガさんと情報交換したりこれから的事を話していると、どうにもピリピリした感覚がある。発生源はアルベドのようだ。

「どうすた?」

「——いえ

「…………人間が嫌いか？」

モモンガさんが指摘する。

「人間 자체は今は嫌いではありません。ブロント様やアウラ、マーレなどが居ますし。ですが、ナザリックの外のものは……」「そうか。だが侮るなよ。一度で踏み潰せる蟻の中には毒針を持つているものも居るのだからな」

「はい」

アルベドの教育はモモンガさんに任せよう。こういうのは寄つて集つて言つたところで逆効果だ。

村人が複数人、村長と何事か話している。

「おお、AINZ・ウール・ゴウンの皆様！ どうやら馬に乗つた戦士

の集団がこの村に近付いて来ているようです」

俺達は顔を見合わせる。

〈さつき言つてた別部隊か？〉

〈いえ、まだ分かりません。どうしましよう？〉

〈仮にさつきの奴等を討伐する為に差し向けられた奴等だつたらここは王国だから王国軍だべ。情報吐かせるのは多ければいいけど、1人なら引き渡しても許容範囲だな〉

〈では、ナザリックに送つた者から一人、記憶操作して引き渡しますか？〉

〈まあ、まずは様子見だな。重症でしばらくは動かせないって事で。記憶操作しても知らない技術でボロが出る可能性もあるべ〉

〈分かりました。では、まずは会つてみると言う事で？〉

〈うみゆ、敵だつたらデス・ナイトぶつけてみててこずるようだつたら捨て駒ぶつけて撤退。こんなところか〉

〈そうしましようか〉

「分かりました。私達にお任せください。村長殿の家に至急村人を集め、村長殿は我々と来ていただきたい」

方針が決定したのでモモンガさんが村長に言う。

「おお、そうですか！」

明らかにほつとしたらしい。ここは定期的に賊に襲われるフラグとか立つ村なんじやにいか?

敵で作つたデス・ナイトならコストパフォーマンスも良いし、後でモモンガさんと相談してみるか。

広場で陣形を整えて待つていると、騎兵が何人かやつてきた。装備に統一性が無いけど一応全員鎧に同じ紋章が刻まれている。だが・・・・・まあ、ぱつと見それがマジックアイテムだから統一性が無いとかそんなんじやないらしい。鉄か、ちょっと上のランクか。そんなところ。

「——私は、リ・エスティーゼ王国、王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフ。この近隣を荒らしまわつている帝国の騎士を討伐する為、王国の命令でこの辺りを回つていてるものである」

嗤いとかそんのは一切含まれていない。後ろの連中もだ。どうやら本当の様子。

「王国戦士長・・・・・・」

「どのような人物で?」

うむ、騎士団長とかじやなくてちょっと微妙な名前だなと思つたりはしないでもない。

「商人達の話では、かの王国の御前試合で優勝を果たし、王の直属の精銳を率いている人物だとか・・・・・・」

「目の前の人物が・・・・・・?」

「いえ、分かりません。私も直接見たことが無いので」

モモンガさんは半信半疑だ。と、言うか遅い。ようやく来たのか。もう勝負着いてるから。

「この村の村長だな」

言葉の端々に苦労のオーラが見えそうな感じになつちえいる。多分何度もマモレナカツタつて事態になつたんだろうな。

「彼等は誰なのか教えてもらいたい」

2・3メートルくらいの全身鎧のごついゾンビを4体くらい連れている集団。怪しそうな感じになつちえいる。多く

「いえ、それには及びません」

モモンガさんが一步前に出て答えた。

「我々の名はアインズ・ウール・ゴウン。私の名はモモンガ。この村が襲われていたので駆けつけた魔法詠唱者です」

「ブロントだ。謙虚だからさん付けでいい。モモンガさんの仲間だ」「ここが中世っぽい世界観だと名前が長かつたら面倒な誤解を招きそうだからな。略称でいいだろ。

「この村をお救いいただき、感謝の言葉も無い」

王国戦士長は、馬から降りると頭を下げてきた。

「いえ、お礼を言われるようなことではありません。それに我々は報酬目当てですから」

「ほう、報酬か。モモンガ殿達は冒険者なのかな？」

「なんか偉そうな口調に慣れていないっぽいな。」

「そのようなものです」

モモンガさん絶対裏で「冒険者、そういうものもあるのか！」って思つてゐよ。

「ふむ、相当腕の立つ冒険者とお見受けするが、アインズ・ウール・ゴウンの名は聞いたことがないな」

「遠くからやつてきましたから」

「そこで一つ聞きたいことがあるんだが?」

「何かな」

「ダークエルフってそんなに地位が低いわけ?ここを襲っていた奴等はモモンガさんにびびつてたくせに俺には調子こいてカウンター入られる始末」

「・・・・・・奴隸にされている者も居ます」

「ほむ。アルベド、殺氣立つな。理解した」

「俺もしつとマスク着けるべきか?」

「すまないが、ここを襲つた奴等の特徴を教えてくれないか?」

王国戦士長が話題を切り替える。

「もちろん喜んで。ここを襲つていたもののの大半は我々が命を奪いました。あれが全部なら、しばらくは来ないかと」

「命を奪つた・・・・・・殺したのか？」

「そうとも言えますし、そうでないとも言えますね」

「少なくとも一人以上は殺つたな。

「・・・・二つほどお聞きしたいことが有るのだが、アレらは？」
デス・ナイト達を示す王国戦士長。

「私の生み出したシモベです」

「では、その仮面は？」

〈どうしようプロントさん?!〉

〈宗教上の理由で〉

「宗教上の理由です」

「プロント殿は被つておられないようだが」

「俺はダークエルフだからな」

「外してもらつても？」

〈プロントさん!〉

〈肌を晒してはいけにいつて方向で〉

「肌を晒してはならないからです——宗教上の理由で」

「そうですか。では——」

「その前に、この村は先ほど武器を持った暴漢達に襲われました。なのでストロノーフ殿の隊の皆さんに怯えている様子。武器を外してもらつてもよろしいですか？」

一瞬緊張状態にはなるが、あからさまに柄に手を伸ばしている奴は居ない。ほう。

「・・・・正論ではある。だが、この武器は国王から頂いたもの。勝手に外することはできない」

「いいのです、モモンガ様。私達は大丈夫です」

「そうですか？村長。——失礼な事を言いました、ストロノーフ殿。申し訳ない」

「いや、モモンガ殿、あなたの言つてることは非常に正しい。王の命が無ければ武器を置いていただろう。さて、椅子にでも座つて話したい。それとそろそろ遅い時間になつてきた。この村で一晩休ませていただきたいのだが・・・・・・」

「そうですね。では、村長殿——」

「分かりました。私の家へ行きましょう。その辺も含めてお話を出来れば……」

「戦士長！」

なんだ急に慌てて走ってきた。騎兵。

「周囲に複数の人影。村を包囲する形で接近しています！」

うちの奴等はばれないよう森の方で待機しているはず。やっぱこの村なんかフラグ立っているんじゃにいか?

第四話

「なるほど、確かに居るな」

ガゼフが言う方向を家の影から見ると「ユグドラシル」で見たことがあるような天使系モンスターが結構な数浮かんでいる。しかしさレは只の上位天使の亞種。正直雑魚としか言いようが無い。

「一体彼等は何が目的でこの村に攻め込んだのでしょうか？彼等は一体何者なのでしょうか？」

モモンガさんが質問する。そりやな。フラグって言つてもなんかの戦略価値とか目的が無いと攻め込まないだよ。

「モモンガ殿も知らないとなると…………おそらくは私だ」

ガゼフが苦しげに吐露する。王国戦士長つてそんな偉いわけ？デス・ナイト程度にビビってるようだと30そこら程度のレベルしか無いと思うんだが？

「憎まれているのですね。戦士長は」

「戦士長の地位に就いている以上仕方が無いことだが、本当に困つたものだ。さて、このような数の天使を召喚し、魔法詠唱者が主な戦力な国となるとスレイン法國。それもこのような特殊工作に従事するとなると、六色聖典のどれかでしような」

ガゼフは肩をすくめて答えるが、どうにも焦りと怒りがオーラとなつて見えそうになつちえいる。自分のせいで近隣の村が壊滅してつからな。

「貴族共を動かし、装備まで剥ぎ取つてご苦労なことだ。あの蛇のような男が宮廷に居たとなつたら厄介だつただろうが…………これくらいで済んで不幸中の幸いと言うべきか。スレイン法國まで噛んでいるとは思わなかつたぞ」

しかしデス・ナイトに警戒する程度のレベルと装備での敵陣をなんとか出来るわけ？

「ブロントさん、あれは炎の上位天使だと思うのですが

「それ、もしくは亞種だぬ」

「そうですね」

「あれは炎の上位天使…………それかその亞種族でしょう」

〈召喚出来るモンスターも同じ? だとすると魔法にも我々のものと該当する箇所があると言う事ですね〉

〈んだな〉

「モモンガ殿、ブロント殿、良ければ雇われないか」

〈どうしましようか?〉

〈むしろこいつ等を先にぶつけるだよ。後はモモンガさんの好きにしたら良い〉

〈分かりました。この男を助けるだけでも恩が売れそうなので、その方向で行きます〉

「…………」

「報酬は望まれるだけお約束しよう」

〈モモンガさん、そういうや俺達こっちの貨幣持つてない〉

〈どうします? 報酬にしちゃいます?〉

〈うみゅ、金の方がいいな。この村にしばらく滞在するつて方針で、地位とか面倒なの押し付けられないように現金かな〉

〈となると…………また俺達がここに来ないといけなくなりますか〉

〈報酬の支払いにはガゼフ本人を付ける事を条件かな〉

〈王都への召集とかは全部バスの方向で?〉

〈うみゅ〉

〈しかしそうなると行動に制限が出来ますね…………あいつを引っ張り出すか。うう、気が進まないなあ〉

〈そういうやあいつには俺も用事があるんだつた。こないだ遊びで作った外装でネオナチの軍服に似合う銃作つただよ。自我持ち出したから多分喜んでくれるはず〉

〈これ以上あれをいじる気ですか!?〉

〈演技指導も考えている〉

〈やめテ!〉

「…………では、戦士長殿。いくつかの条件を飲んでいただければ」

「何でしよう?」

「まず、我々は堅苦しいのが嫌いなので報酬を受け取りに王都へは行

きません。そして、この見た目ですから貴方以外を寄越すと話がこじれるでしよう。なのでしばらく復興も含めてこの村に滞在しますので、戦士長殿もしくは直属の部下に報酬を持ってきて貰いたい。一括現金で」

「…………う、む。了解した。して、金額は？」

「貴方の誠意に比例した額をお願いします」

「ほんとは相場がわかにいだけだろ？ ん？」

「うるさいよ馬鹿」

ちよつと最近モモンガさんにダークパワーが影響しているのか言葉遣いが変わっちゃえている。この世界に来てダークパワーの仕様が変わったか？

ちなみにヴァナ・ディールだとグラットンを納められる鞘は無かつたんだが、神器級アイテムとしての鞘にグラットンを納めている。だから周りにはあまり騒がれない。

「では、戦士長。我々は村の防衛を行います。そちらより数も少ないので。馬を持つている貴方方は攻撃をお願いします。突進力があつた方がいいでしようから」

「分かった」

「後は、こちらをお持ち下さい」

モモンガさんが500円ガチャのはずれの木彫りの人形を出す。

「ありがたく頂こう」

「では、御武運を」

「下つ端共も一緒に広場に移動させたほうがいいな。それとアルベド。エイトエッジ・アサシンに伝達だ。伏兵の確認。捕捉したら生かして捕らえろ」

「かしこまりました」

それから俺達は指示を送った後、モモンガさんの魔法で会話と映像を傍受していた。

「おつなんか必殺技っぽいのを使つた」

「こつち特有の技か？ 戦士職で覚えられるなら使いたいだよ。さつ

きの六回攻撃も体得出来れば次元断切と併用出来るかも」

「うわあ」

「近接だつたらグラットンにもう一つアレを装備すれば攻撃力はそこまで変わらんから機会があればでいいんだがな」

「そろそろ限界ですね。おとなしく寝てれば楽に死なせてやろうとか・・・・・そういうやさつき似たようなこと誰かさんが言つてしましたね」

「だろ? 中世では当たりまえだべ」

「じゃ、そろそろ行きますか。では、〈魔法二重化〉〈集団標的〉〈上位転移〉」

モモンガさんが俺とアルベド、ついでにデス・ナイト達と入れ替わるようにガゼフ達を村の広場に転移させた。

「はじめまして、スレイン法国の皆さん。我々はインズ・ウール・ゴウン」

「・・・・・」

押し黙るスレイン法国の連中。

「我々は貴方方と取引するために來ました」

ニグンとか呼ばれていた奴が顎をしゃくつて続きを促してくる。

「お時間をいただけるようでありがたい。取引と言うのは貴方方には我々に勝てません。おとなしく投降していただけませんか?」

捕虜は多いほうがいいと言う点を話し合っていたのでこいつ等から色々情報を引き出すつもりだよ。

あいつ等は強さに自信があるのか、不快そうに眉をひそめた。

「無知とは恐ろしい。その言葉で愚かさのツケを支払うことになる」

「さて、それはどうでしようか? 我々は貴方方の戦いを見ました。負けそうならあれらを見捨て・・・・・勝算があるからここに立つているとは思えませんか?」

再び押し黙るスレイン法国の連中。戦闘前だがなんとも辛氣臭い奴等だ。

「それを理解してもらつたところでちよつとした質問があります。貴

方達の連れている天使は第三位階辺りで召喚できる炎の上位天使で
しようか？」

まあ、どちらかというとこれは質問と言うより確認。

「ユグドラシルと同じ名前のモンスターを召喚しているようですが、
呼称まで同じか気になつたものでして。ユグドラシルのモンスター
は神話などから来るモンスターが多く・・・・天使系や悪魔系は
神話関係が多かつたはず。天使や悪魔が多く使われているのはキリ
スト教関係。この世界にはキリスト教が無いにも関わらず、上位天使
と呼ばれる天使の存在は非常に不自然。それが意味するところは、
我々と同じような存在が居ると言う事」

「独り言はそれくらいにして、質問に答えてもらおう。ストロノーフ
をどこにやつた？」

痺れを切らせたらしい。

「村の中へ転移させました」

「愚かな・・・・偽りを言つたところで、村を捜索すれば——」

「偽りなどとんでもない。それに、質問に答えた理由はもう一つあり
ます」

「何？」

「貴方達は我々がせつかく救つた村を潰そうとしましたね。それがた
まらなく不快なのですよ」

徐々に魔王ロールに入つていくモモンガさん。後で悶絶するだろ
うな。

「不快とは大きく出たな。それで、だからどうした？」

「貴様等には色々と吐いてもらう事がある。抵抗しなければ傷つけず
に連行しようと思つていたが・・・・気が変わつた。こいつらと
遊んでもらおうか」

控えていたデス・ナイト達が突進する。

「各員、天使達で迎え撃て！」

まあ、確かに相性が悪い。相手は空飛んでるしな。だけどまあ、迎
撃するには降りなきやいけないわけで――。

「ウアアアアアアアアアア！」

「オオオオオオオオオオ！」

「ククカカカカカカ！」

「アオオオオオオオ！」

さらにデス・ナイトの遙か後方からスクワイヤ・ゾンビが向かって
くる。森に隠してあつた奴だ。

「敵の増援！」

「駄目だ！ 抑えきれない！ 天使達は割けない！ 各員迎撃せよ
！」

そんな感じの光景が目の前で繰り広げられている。

「なあモモンガさん」

「どうしました、ブロントさん？」

「ここで俺が天使呼んだら面白いことになるかな」

「ああ、なりそうですね」

「よし、やるかー」

そんな軽いノリで〈第六位階天使召喚〉を唱える。とりあえず様子
見と言つたところかな。

「あ、あ・・・・・そん、な・・・・馬鹿な」

「どうした、俺が天使召喚出来るのがそんなに不思議か？」

俺はここで初めて敵に言葉を向ける。

「そんな、ありえない！ 何だそれは・・・・劣等種族が召還など
絶対にありえない！」

〈第三位階天使召喚〉自体は第三位階魔法だしこれくらいちょろいも
ん。加えて俺はとりあえず〈蘇生〉使えるからこれくらいの天使も呼
べるんだが？」

哀れな忍者にレイズおこるために必要だけど、只の〈死者復活〉は
アイテム消費するからな。デスペナも激しいし。

「つまり主天使呼べる俺は必然的にお前等よりお前等の神を味方に着
けているつて事。 完 全 論 破 」

「あ、あり、ありえない・・・・・・・・」

なんか敵のリーダーが現実を受け止めきれないらしいが俺の勝利

は続く。デス・ナイトとさうに増えたスクワイヤ・ゾンビ、それに威光の主天使によつて敵は行動不能にされていく。リーダーの前に威光の主天使が立つも、横に控えている監視の権天使は下位の天使を強化するのに精一杯で動けないし命令も下つていないのでどちらにせよ行動不能。それを俺の威光の主天使があつさり叩き潰す。

俺の威光の主天使が何かをもぎ取つてきた。

「ふむ、魔封じの水晶か」

「それはちょっと拙かつたですね。熾天使でも封じられていたら属性的にやつかいでした」

「何が入つているわけ?」

「んー・・・・・付与魔法探知。これも威光の主天使ですね」

「ああ、だからあんななんなつてるわけ」

そりや悪いことしたかな。

「ま、いいか。天使はもう全部片付いて捕虜にまで被害出始めてるから収容すべきそうすべき」

「そうですね。待機しているアウラ達を呼んで収容しましょう」

「身構えた割りには拍子抜けだつたなー」

「いえ、これがたまたま弱かつたとかじゃないですか?六色つて言ってたし部隊の中では最弱とか」

「ああ、そういうのもあるね。でもせめてグラットンぶん回したかった感。捕虜取る必要が無かつたらダークパワー ブツッパしてたんだけどな」

「味方にも被害が出るからやめテ!」

「モモンガ様、ブロント様のダークパワーとは?」

「うむ、以前の仕様上は負属性の存在とアライメントが悪に偏つていいるとダメージを受ける負属性攻撃なのだ。もちろん負属性なので正属性相手にもダメージは入る。特にダークナイトやカースドナイトのジョブも持つていると致命的らしいが・・・・そこら辺は世界級アイテムの五行相克を使って一度変更云々について創造主からお詫びが来ていたんだが・・・・この世界だとどうなつているのか分からん」

「味方にも余波で影響が出る闇の力ですか……凄まじいですね
「あ、お詫びの内容に「頭がおかしくなるところは再現しました」つて
以前あつたぞ」

「使わないで下さい。よっぽどのことが無い限り使わないで下さい」

「お、おう」

モモンガさんに今まで言われたらしようがない。でも俺もたまには、ゲージ技とかのノリでブツパしたくなる事があるだよ。今回期待はずれもいいところだったしな。

第五話

事後処理は問題なく片付いた。

「ブロントさん」

「何かな？ モモンガさん」

アウラ達が指示を出しているので俺達はおしゃべりに興ることが出来る。

「どうもあのスレイン法國の連中を監視していた者たちが居るようにしてね。こちらの攻性防壁が働いたみたいですね」

「ああ、こつちでも確認してるだよ。モモンガさんは……なんだつけ？」

「強化した〈爆裂〉です」

「こつちは能天使をぽこじやか送り込んで、敵味方の死体を生贊に墮天させた熾天使を呼び出す奴だったかな」

「ぽこじやかつてはじめて聞いた。どこの言葉？」

「どこでもいいだろ言語学者かよ」

「…………まあいいです。あの程度の防壁に引っかかるようでは程度が知れる。もし熾天使呼び出されてたら辺り一帯殲滅されている可能性があるんですけどね」

「気にもしやーない」

「そうですね」

一方、スレイン法國、土神殿。

何が起こったのか分からなかつた。土の巫女姫が爆散したと思ったら中空から大量の天使が出現したのだ。それもただの上位天使クラスではなく、能天使。最高位と言われる主天使程ではないのだが、数が数だ。爆発によつてダメージを受けていた我々はたやすく葬られた。

その後、死した我々には与り知らぬ事柄だが、どうにもさがらに上位の天使が出現したらしい。スレイン法國はどうなつてしまふのか……。

その不安と絶望を胸に、私は天使に屠られた。

場を戻して、カルネ村。

こちらには復興支援と言う事で、デス・ナイト2体とゴーレムを貸し与えることになった。ついでにモモンガさんが、ゴブリン将軍の角笛を渡していたが、まあ、デス・ナイトだと細かな意思疎通ができるにいからな。弱くとも小回りの効く奴をとでも思つたんだろうか？

それで助けた村娘と言うと——俺の顔を見るなり赤くなる。んん？ まあ、あれだ。吊橋効果つて奴だろ。放つておいても問題なさそうだ。

「モモンガ様、ブロント様」

「どうした？ アルベド」

あまり口の挟まないお前が質問していくとは珍しいな。
「どうしてあの男を助けたのですか？」

「ああ、それはな。まず、一つ。我々はこちらの貨幣を持つていない。奴は王国戦士長と言う役職に就いていた。よつて助けたことで謝礼としてそれなりの金額が期待出来るだろう」

モモンガさんに続けて俺も説明する。

「二つ目。どうもここは三国の緩衝地帯になつたりするみたいだ。法國は論外として、帝国はよくわからん。だから王国に有る程度肩入れしておけば迂闊に手は出されにいつて事だぬ」

「左様でございましたか。しかし人間共の国など叩き潰してしまえばよろしいのでは？」

アレだけ弱い連中相手に警戒するのはどうも腑に落ちないらしい。

「まだまだ情報が足りないので、アルベドよ。連行した連中から情報を引き出し次第、次の行動を取ろうかと思っているが・・・・そ
の間は近隣調査と別口で王都へ行く準備だな」

「そ、それでしたら至高の御方々よ！ 私に同行をお命じください！」

「そ、そ、そ、そ、もうちょっと人間に化ける奴から厳選だな。
残念だつたな。アルベド」

「そんなー」

「アルベド、お前にはナザリックを守ると言う重大な使命がある」「モモンガ様……分かりました！ 不肖、アルベド。ナザリックにて帰りをお待ちしております！」

〈モモンガさん、そこでアルベドの頭を撫でるだよ〉

〈うえつ!?〉

「…………アルベド、頭を出せ」

「なんでしょう？」

「世話をかける」

魔法使いにはハードルが高いのがぎこちないモモンガさん。「そ、そんな…………くふー！」

フルフェイス越しでも嬉しいらしい。

〈これでしばらく大丈夫だろ〉

〈じりじりと距離が縮んでいるようでもちつとも安心できないんですが！〉

〈まあなんとかなるべ〉

正直アルベドの事はモモンガさんに任せよう。

玉座の間ではいちゃらめんどくさい手順が入るため、現在モモンガさんの部屋にて状況報告をしてもらっている。

「捕らえた者たちですが、現在氷結牢獄にて投獄しております」

「そうか」

「では、手はずどおりにニューロニストに情報を吐かせる方向で？」

「いや、何名かは〈支配〉を行った後、こちらの文章を覚えるための講師としておけ。ただし、ニグンと言つたか？あれからは可能な限り情報を取り出さなければならない。その点に注意せよ」

「畏まりました」

「ブロントさんからは何かありますか？」

「特に調べる点なら相手の兵器、マジックアイテムだな。どんなのがあるのか分からぬ以上、世界級も想定しておかないとダメだべ」「了解しました」

「こんなもんかね？」

「そうですね。一応騎士からもいくらかの金銭が取れましたし、王国戦士長からはパンドラズ・アクターに受け渡しをさせて俺達はちょっと王都にでも行つてみましょう」

「こつちの文字が読めるか怪しつて事忘れんなよ。多分ギルド潰したときに翻訳アイテムがいくつか紛れてたとは思うが」

「分かりました」

「先に誰かに習得させて俺達の講師に着けるべきかとも考えられるけどな」

「それでしたら是非私が！」

「アルベド？」

「デミウルゴスは最近忙しいようですし、これでも頭の回転は良い方だと自負しております！ 私にお任せください！」

「わ、分かった。お前に任せよう」

「ありがとうございます！ モモンガ様！ ブロント様！」

〈これ失望されないようにするプレッシャーが半端ないんですけど〉
〈どうせ誰かに任せなきやいけないことだつたべ。捕虜に教わるにしても俺達と捕虜じや、格差があるし〉

〈そうですね・・・・・〉

すかし冒険に出てもちょくちょく帰つてこないとホウレンソウが出来ないな。ままならにい。

ナザリック小話的なもん

——いかに休日を過ごさせるか

「ナザリックはホワイトにする！」

モモンガさんのその決意の下、守護者統括から一般メイドに至るまで休みと言う概念が発生した。だがしかし、「アインズ・ウール・ゴウンに忠誠を尽くす」と言う理念で塗りつぶされている下僕共は当然休日返上しようとし、次善の策として休んだ奴は俺とモモンガさんによる過去のエピソードとかが聞ける権利を与えてみた。

「さて、やつてきただよ「第一回ポロリもあるよ！ モモンガとブロントのナザリックエピソード集」

前もつて軽いノリでつて言つておいたから盛大に拍手される。

「提供はモモンガと――」

「ブロントでお送りしますん」

「どつちだよ」

聞き逃すまいと静かになる休みの下僕達。俺達は下僕も含めて玉座前のレメゲトンで椅子に座りながら進行している。椅子は休みじやないメイドに出してもらつた。

「やっぱ第一回となるとあれかな」

「なんでしょうブロントさん？」

「俺達の出会いを話すべきか」

「そうですね・・・・・ここナザリックに居を構える前、アインズ・ウール・ゴウンに俺とブロントさんが加入する前の話ををしておいてもいいでしよう」

「うみゅ」

「――そうですね。ブロントさんと出会つたのは、俺がまだスケルトン・メイジだつた頃でしたね」

「なんだ。汚い創造主が「異形種なら強すぎる氣がするし殺してもいいよ」なんてふざけた事抜かしてたけど、ふる快に思つた俺は何の罪も無い異形種を殺して回つちえいる人間種を率先して殺すように

なつた。つまりプレイヤーって呼ばれていたのは以前話したと思うけど、そのプレイヤーを殺すことをプレイヤーキル。PKと略された。そのPKをさらに殺す奴がプレイヤーキラーキラー。略称PKKだべ。AINZ・ウール・ゴウンもPKKがどうこうつて事で結成したギルドだが、そちら辺は次回だな」

「人間種でそのPKKを行っていたのがブロントさんだ。当時俺は異形種故に狩場に出でてはそちら辺のモンスターと一緒に討伐対象として殺されることに飽き飽きしていてな。この世界に降臨するのはもうやめようかと思つていた」

「そこで俺がモモンガさんを見つけただよ。スケルトンが沸かない場所に骨が一人で獲物を狩つているからつい声をかけてな。「PTどうですか?」ってね」

「俺はこの世界に降臨したばかりでろくな知り合いも居なかつたから正直戸惑いが大きかつた。「こいつそんな素振りしているけど結局俺を殺すんじやないか」とな」

「だから俺が一番最初に盾をした訳。いざとなつたらゾンビけしかけて逃げてもいいって事で話し合つてだな」

「最初は戸惑つていたけど、降臨する度にブロントさんが狩りに誘つてくれてな。——つまりそういうのを求めてたわけだ。仲間と一緒に色々なところを旅すると言う事を」

「だども、まあ・・・・・・PKがなくなつた訳じやなかつた」

「・・・・・どうなつたのでしよう?」

メイドの一人が続きを促す。

「最初は俺とモモンガさんと適当に作つたアンデッドで固まつて狩つていたんだが、3人以上で同じくらいのレベルの相手となるとアンデッドのレベルが低くて不利だつただよ。だから狩場に行く前にモモンガさんとアンデッドで固まつて、俺は一人でモモンガさんに尾行とか付いていないか確認しながら距離を離して着いて行つた」

「実際のところ、何回か襲われてだな。敵の背を見ているブロントさんが後ろから強襲して敵を減らしていたのだ。ダークエルフのブロントさんが襲い掛かつてると敵も見事に慌ててな・・・・あれ

は愉快だつた

「後は俺とモモンガさんと作つたアンデツドで袋にしただよ」

「まあ、ブロントさんの顔が売れてからは即座に立て直す連中も出てきてな。捨て駒のアンデツドを足止めに使い、それでも追つてきた奴等だけを俺とブロントさんで叩いたりもした。後は罠を設置した場所まで誘導したりな。状況に応じてモンスターを狩るより人間種を狩る事の方が多かつた場合もあつた」

「あれはあれで美味しかつた時もあつたべ」

「そうして俺がAINZ・ウール・ゴウンに入るまではブロントさんと二人で戦つていた。AINZ・ウール・ゴウン自体はたつち・みーさんとかが前衛を勤めていたんだがな。当時ブロントさんは人間種だつたからAINZ・ウール・ゴウンには加入出来なかつた。ブロントさんは後から加入したが、「異形種のみで構成した」AINZ・ウール・ゴウンの中でも数少ない例外なのだよ」

「さて、今回で次の話までしちえしまいそุดから今回はここまで『お話下さりありがとうございます。モモンガ様！　ブロント様！』

下僕が一斉に頭を下げた。

「おう、お前等休日は好きにしていいけどゆつくりするよ」

「ブロントさんと同意見だ」

『かしこまりました！　至高の御方々！』

話題が無くなつて来たら雑談に切り替えるかぬ。

——喧嘩チームDRAKU-DRAKU

異世界転移の際こちらに一緒に来ているかもしれないに喧嘩チームDRAKU-DRAKUを探すためにこないだ捕まえたスレイン法国の連中から1名、エルダーリツチを作つてもらい、送り出すことにした。

「では、モモンガ様、ブロント様。行つて参ります」

「うみゆ、よろしく頼むんだが？」

リング・オブ・AINZ・ウール・ゴウンのような繰り返し使えるアイテムだと、イザという時正体不明の相手に渡つたら困るので帰還

手段はスクロールを渡している。

六時間後。

「ただいま戻りました」

エルダーリツチが戻ってきた。意外に早かつたな。

「どうだつた？」

「それが・・・・喧嘩チーム／ダーク／に進入出来たのですが、中は生物非生物問わず時が止まっているようでした」

「そこから外に出られたか？」

「いえ、扉が開かなかつたので外には出られませんでした」

「ほむ、モモンガさんはどう思う？」

「転移、時が止まつた場所、となると・・・・まだ転移してきていない？」

「そうだな。俺は次元の狭間とか世界と世界の間とかそんなところに居ると思う」

「しかしそうなるとこいつが活動出来た理由が分かりません」

「ノータイムで別の身体になつている時点で理屈はよくわからんだけよ。位相がずれてるとか自分で納得出来ればそれでいい」

「そんなもんですか」

「だべ」

「となると・・・・グラットンソードが破壊されたら喧嘩チームD RAK／＼ダーク／＼も・・・・」

「極論を言うとそうだが、永劫の蛇の腕輪とかも材料に含まれているからそう簡単に壊れたら神話級は全部アウトと言う理屈になるだよ」「そうですね・・・・」

「まあ、気にして仕方がない。ご苦労。お前はシャルティアのところで仕事を割り振つてもらえ」

「はつ！」

「んじゃまあモモンガさん。この件は保留と言う事で」

「分かりました。ブロントさん」

俺も喧嘩チームDRAK（ダーク）に居たらやばかつたかもしか
んな。

——クルシミマスツリー

「魔王の台詞と言つたら「我が腕の中で息絶えるがよい」でしょう」「拠点で待ち構えるなら「Welcome to the under ground large grave of Nazarick.」からの「How do you like me now?」だろ」

「なんで英語なんですか？」

「昔大統領になつて欲しいぶつちぎり一位の奴が言つた言葉をすこしいじつた」

モモンガさんとチエスをしながらそれっぽく魔王談義をしていると、アルベドが玉座の間に来た。

「モモンガ様、ブロント様、ナザリック近郊の森にて強力な樹木の魔物が確認されたとの事です」

「ほう、どの程度だ？」

「相性もありますが、先日作成されましたデス・ナイトでは10体居ても歯が立たないかと」

「それは・・・・やはりこの世界は油断ならん」

「うみゆ。近場にこんなのが居たのならラスボスはもつと強いはず。その一方でスレイン法國の連中がのほほんと工作しているのはおかしいだよ」

「どうしましようか？ブロントさん」

「なんかこないだのニューヨニストからの報告でスレイン法國に傾城傾国つてのがあるらしいしうかつに守護者出して世界級のやばいのが出てきたら大死にするからな。自動POPする雑魚で消耗戦を仕掛けるべきじやにいか？」

「そうしましようか」

「では、そのように取り計らいます」

「あ、そうだアルベド」

「なんでしょうブロント様?」

「その樹木倒したらナザリックに持つて来いって伝える」

「かしこまりました」

「それ、どうするんです?」

「いあ、ラスボスと言えば昔トレント系の奴が居ただよ。挿し木すれば面白いのが育つかもしれにいと思つてな」

「ガーデニングですか」

「んだ。他にもサボテンとかいろんな種類の奴にも試してみるだよ」

「あまりマッドな事はしないで下さいね」

「善処する」

こんなやり取りもあって、魔樹ザイトルクワエは後ほど俺の部屋で盆栽として育てられるのだった。一応ジョディとかビビアンとかキヤシーとか言う名前も付けたがすぐすくと育ち、しばらくすると一部がナザリック内を徘徊するようになつたとか。

第六話

情報待ちを終えてナザリック各員の装備と配置転換を行つた。

ここで予想外に役に立つたのが、ギルド潰していた時に集まつたアイテムだ。

永劫の蛇の腕輪、そして、カロリックストーンを作るために必要な金属がギルドによつては保管されていたので、情報待ち中の在庫整理でそれらが発掘され、永劫の蛇の腕輪は3つしか無かつた為、今度俺とリ・エスティーズ王国の都市、エ・ランテルに行く時に付いて来るお供に持たせることになった。モモンガさんはモモンガ玉があるし。各階層守護者にはとりあえずカロリックストーンを持たせ、それで何を作るかはみんなでゆつくり話し合う方向で決定した。まあ、俺の分のカロリックストーンは地底湖に沈めてあるロト専用ゼータⅡの強化にでも使うんだけどな。アルベドだけ何故かギンヌンガガブを持っていたのでアルベドにはデータクリスタルでモモンガさんには内緒で等身大モモンガさんフィギュア（作成協力：図書館のオーバーロードのみんな。監修：シャルティア）を渡しておいた。ご満悦だったので後日メイドに様子を聞いたらその日の夜アルベドの部屋からモモンガさんを激しく呼ぶ声が聞こえたらしいが、それはどうでもいいだろう。

それと、自我を持つたパンドラズ・アクターを俺も見たかつたんだが、モモンガさんに断固拒否されてしまつたので転移してくる以前にお遊びで作ったモーゼルM712Ver.red9を代わりに渡しておいてくれと頼んだ。モモンガさんは軍服は強いと豪語するだけあって、むしろモモンガさんが欲しそうにしてたけど所詮衣装装備だし、急所に当てなきや1発で人間1人殺せない装備なんてデータクリタルの容量的にそこまで難しくないのでモモンガさんは装備ペナルティでも当たるよう命中率向上を組み込んだルガーP08を作つてやる約束をした。モモンガさんが弾の口径とかが分からなかつたらシズ辺りでも付けておけばいいだろう。

で、俺はエ・ランテルに行く前に俺の作ったNPC共の様子を見に、

ナザリツク各地を散策している。

「おいイ!? 俺が来たんだがー!」

現在第五層の氷河エリア。ここに課金モンスターのベヒーモスを放つ。

『Gyaooo!』

どしんどしんと言ふ地響きと共にベヒーモスの群れが迫つてくる。

度の事態だ。

け
?

卷之二

卷之三

群れのボスにしてベヒーモスの中で唯一職業レベル持ちの「キングベヒンもス」。職業持っている理由は隕石落とすためなので、肉体派に見えてINTもかなり高い。他のベヒーモスも角から電撃を出しが、そつちはただの属性攻撃なので魔法じやなかつたりする。

「お前等におみやげ持つてきたからな。まずはキングからな」

目の前にアイテムボックスの中の無限の背負い袋から切り分けてもらつたケルベロス肉を出す。これでヘルズバーグを作ると結構なSTR増強の食事効果が見込めるんだが、今回は氷河エリアだし熱そういうものでも食べたくなるだろうとのことでこれを持つてきた。生肉なのに高温を発している。

待て

G y u u n :

● ● ● ● ● 良し!

これ1つ50kg単位で切り分けてもらつたから無限の背負い袋には10枚単位でしか肉が入らない。群れは20頭以上居るので3袋くらい肉が入つてゐる。

「よーしよし、美味いか？」

Guon!

「そうか、いつも力二肉だからか」

ここには一緒に陸蟹を放している。元々氷河エリアにベヒーモス放牧しているのもクフイム島をモデルにしているから陸蟹なんだけどな。本当なら巨人族も徘徊してなきやいけないんだけど、NPCの巨人族はベヒーモスより弱いし食べられたくないのか、この辺には居ない。武器を持ったスケルトンは時折うろうろしているけど、それもカルシウム補給と言わんばかりにそこら辺のベヒーモスが捕食する。まあ、クフイム島からベヒーモスの縄張りと言う別エリアに繋がっているだけで蟹自体もそつちには居ないことになつていてるんだけどな。「近いうちに外に出してやるからな」

『Guooooon!』

こいつ等は喋れないけど頭はいいので言葉を理解している。なんか変な木のモンスターも居たし、森でこいつ等を遊ばせてもいいだろう。

「そろそろいいか。

俺は残りの肉を雪原の上に出した。雪が湯気を立て溶けていく。

「そろそろいいぞお前等」

『G y a o o o o !』

一斉にケルベロス肉に群がるベヒーモス。肉は逃げないんですけどねえ。

とりあえず騎乗用にこいつ等を出してもいいかモモンガさんに聞くとして、誰を連れて行くか決めないとけにい。

とりあえず人前に出しても一番無難そうな奴でいいと思い、第六層にやつってきた。

「おいイ？ リューサンおるかー？」

「居るのである」

頭上から声。直後に人が振ってきた。

「ヴァナを駆ける一陣の風、ブルーゲイル参上」

「いあ、リューサンそういうのはいいから」

こいつの名前はリューサン。ジヨブは竜騎士。ユグドラシルでは〈飛行〉の魔法も使えるため、ジャンプからの一撃離脱戦法を得意とし

ている。ついでに〈竜召喚〉により戦闘をサポートさせるティマーの側面も持つていて。

「久しぶり、ブロントさん。今日はどうしたんだい？」

「うみゅ、ナザリックが原因不明の転移に巻き込まれたのは知つているか？それで人間種の中から街に行ける奴を選別しているだよ」

そう、リューサンもダークエルフなのだ。ついでにリューサンと一緒に過ごしているエース三人衆の内2人が居るけど、片方は草生やしそうして聞き取りにくいしもう片方は影が薄すぎてレイスとかの死靈系モンスター扱いされかねないので連れて行くのは無理だと思った。

「ああ、聞いているよ。大変だつたらしいね。しかしオレを誘つてくれるとは……。そうだ、鍋作るよ！　ああ、でも食事効果が高いカレーの方がいいかな？　それだと後衛の人に悪いね。やつぱりシチューがいいかな？　それともキノコシチューに黒パンと干し肉つて言ういかにも冒険者の食事と言つた感じの方がいいかな？それとも基本に立ち返つて山串と海串とパイにするかい？　それだと腹は膨れないか。やつぱりシチューは定番……」

「落ち着きたまえ」

「すぐ落ち着いた」

そう、エースとは孤高の者。竜騎士は相棒の竜のみがパーティメンバーと言い、侍と暗黒はさほど得意でもない片手剣を持って延々を球出しを行う。BAされたときペンタスラストで有頂天になつた直後に修正喰らつても「いつもの事だよ」と苦笑いで済ませ、侍は「月光でござるw」と草を生やし、暗黒はアタツカーなのにスタン要員として地味に活動する。そんなジョブだつたのだ。

そんなリューサンのようなエースがパーティに誘われたら舞い上がってしまうのも無理は無い。性格は紳士なのに。

「食事はキノコシチューと黒パンと干し肉でいいから。今回行くのは俺とモモンガさんとリューサンと後1人だから最低2人分あればいいから気にすんな」

「了解したのである」

「じゃ、闇系の相談があるからこれで

「ああ、オレも荷物をまとめておくよ」

これでアライアンスとか組んだらちよつと不安になるが人選だと
こいつが一番マシなはず。いくら強いとは言え常時草生やす奴やモ
ンスターと間違えられる奴、ついでに踊り子とかも連れて行けないか
らな、街に入るのにビーストティマードと面倒ごとが多いそだし。

「つて事でこつちはリューサンを連れて行くことになつた」

「そうですか。リューサンならヘルムで耳が見えないし人格的にも無
難ですね」

「で、モモンガさんは誰を連れて行こうと思っているわけ？」

「人間に見えるのだつたらナーベラル辺りでいいかなあと」

「まずはNPCのカルマ傾向を見てから考えるべき。後人間に見える
奴だつたらセバスかユリ辺りがベターだと思うが」

「うつ、そうでした。確かにNPCはカルマ傾向に方針が左右されて
いるみたいですし、その方がいいですか」

「でもまあ、NPCの成長を促したいんだつたらその選択もありじゃ
にいか？最初はフォローしなきゃいけないとと思うけど、後々人間と接
触させる場合も考えたら、ナーベラル辺りが毒吐かない様接触させる
のも良いと思う」

「そうですね。ただでさえカルマ傾向が悪に傾いていますから、リカ
バリーやの出来る範囲で教育していくのも必要だと思います」

「じゃあどうする？」

「予定通りナーベラルを連れて行こうかと」

「おk、分かった」

オレとモモンガさんはパーティメンバーの編成を考えていた。最
初はマーレが浮かんだが、あいつ引きこもりだからな・・・・。。
「ところで、この間見せてもらつた甲冑魔道士ですが、白よりは黒いほ
うがいいかなつて思うんですよ」

「ほう、男なら黒に染まれつて言う名ゼリフもあるしな。いいんじや
にいか。それに俺とリューサンは前衛だし、ナーベラルとモモンガさ

んで後衛だろ？ほんとならルプスレギナ辺りがバランス良さそうだ
と思つたんだが、俺が「大治癒」使えるしモモンガさんは「大致死」当
てれば回復するから問題ないか」

「「大致死」なら自前でも出来ますし、大丈夫ですよ。そもそもそこま
で追い詰められる状態に持つていかれると困るんですけどね」

「そうだぬ。初心者にいきなりドラゴン倒して来いとかも言わないだ
ろう」

「ああ、サラマンダーに躊躇される帝国兵ですか」

「ヨヨの事を思い出させるのはやめろ。ついでにアンヘルもやめろ」

「大人になるつて悲しい事なの」じゃねえよ。あいつは絶対に許さ
ない。

「サラマンダーはともかく、アーフランド評議国は聞くところによる
と王国の北の方だからエ・ランテルとは反対方向ですし、気をつける
のは六色聖典のどれかくらいでしょうね。後は神人が出てくれば分
かりませんが、國の最大戦力を諜報活動に使うかは疑問です。アレが
プレイヤーの子孫だとしたらガチレベルでも100を超えることが
無いと思います。そこら辺は出たとこ勝負なのかな？」

「んなもんにいちいち気にしてたら冒険は出来ないし、その方針でい
いんじやにいか？」

「そうしますか」

「で、名前はどうする？ 真名で縛る系のスキルがあつたら困るし
「俺はモモンにしちゃります」

「それは紛らわしいしナーベラルが間違えそうじやにいか……。
？まあいいか。俺はブロントをさらに縮めてロトにする」

ブロントさんのさらに過去のログによるとロトと言うコテハンが
ブロント語と思われるものを使っていたらしい。

「ナーベラルはナーベでいいと思いますし、リューサンはどうします
？」

「本人がブルーゲイルって呼ばれたいらしいからそれに乗つかるか」

「分かりました」

「モモンガ様、ブロント様。授業のお時間です」

会話が途切れるのを待つていたらしく、アルベドが声をかけてきた。

「そうか。もうそんな時間か。楽しみを前にするといつも時間を忘れてしまうな」

「今日もよろしく頼むんだが？ アルベド」

「はあはあ、モモンガ様とブロント様との女教師プレイ。今日はどんなのがいいかしら？ ここは冒険して教鞭を……ダメよアルベド！ 至高の御方々は私の事を考えて下さりわざと間違えてくれているのにご好意に便乗するなんて！ はい、かしこまりました至高の御方々！」

なにやらピンク色のオーラが見えそうになっていたが大丈夫だろうか？ 多分大丈夫だろう。時間停止でも使つたのか1日ちよいでも文字をマスターしてきたアルベドの情熱を無碍にするわけにもいかないわな。

「冒険者ギルドとかあつたら代筆じやあ格好付きませんものね。しつかりやりましょう」

「（気合入れるモモンガ様格好可愛い！）」

「アルベドがちょっと不穏だがやる事はやらないとな」

これも冒険者のたしなみだ。ちなみに識字率が低くてマジックキヤスターが少なさそうなのは考えてはいけない。

第七話

「やれやれ……これからどうするか」

ナザリック地下大墳墓の玉座の間にて、白骨のアンデッドがそう嘆息した。

「すべてはモモンガ様とブロント様の御心のままに」

純白のサキュバスは平常運行だ。

「そろそろ案も出尽くしたし、セバスも情報収集に行つてもらつたら俺たちも出るだよ」

サークートに禍々しい柄が露出した剣を提げたダークエルフの騎士……俺が促す。

「そうですね。こちらも情報収集ですが、気分転換も兼ねますし」

この骨……モモンガさんは疲労とは無縁の身体になつてしまつた為、ちょっと書類を片付けるつもりが12時間経過していたとかよくやつている。ナザリックホワイト宣言とは一体なんだつか。

「…………で、だ。今日の分の報告は残っているだろう？ 次の報告は？」

「こちらになります。モモンガ様」

モモンガさんは羊皮紙を手にとつてその内容を読んでいる。

「なんて書いてある？」

質問してみた。

「アウラからですよ。他のプレイヤーとの接触は無し。調査は順調に進んでいるらしいです」

「ほむ」

まあ、俺らなんかのPKギルドだつたら友好的とはいからこうやつて隠れているつてのもあるし、相手にもそれが当てはまるかもしれない。

「うむ、了解した。アウラたちにはこのまま命令を遂行するよう伝えてくれ」

モモンガさんがアルベドに命令を下す。

「畏まり——」

その時扉からノックの音が。

「シャルティアが面会を求めています」

「構わん、入れろ」

モモンガさんの許可により、シャルティアが入ってきた。相変わらず盛つてゐるな。

「モモンガ様。ブロント様。相変わらずご機嫌麗しゆう存じんす」

「お前もな、シャルティア。して、今日俺の部屋に来た用件はなんだ？」

？

一人称がようやく俺になつたのに魔王ロールが抜け切つていないモモンガさん。そんな畏まる必要は無いと思うんですけどねえ。

「それは、モモンガ様のお美しい姿を一目見るためであります」

あれは冗談を言つてゐる目ぢやない。漫画的表現にすると目にハートを浮かべてゐる感じ。

それに対しアルベドが徐々に般若の顔になつていく。これは完全にモモンガさんにターゲットを定めているな。

「ならば満足でしょ。至高の御方々と私はナザリック地下大墳墓の今後について話し合つてゐるの。余計な時間は裂けないわ」

「……まず本題に入る前に挨拶するのが基本といわすのに……嫌でありますね。トウの立つたおばさんは、賞味期限切れのせいか、せわしくて」

「……保存料ぶち込みまくつて賞味期限をなくした食べ物つて、毒物と変わりないんじやない？」

「……食中毒菌を甘く見ないほうがいいであります。ものによつては感染症まで引きおこしんす」

「……その前に食べるところあるの？ 食品デイスプレイは盛り上げてゐるようだけど」

「……食品デイスプレイ？ 殺すぞ？」

「……誰が賞味期限切れだ？ あ、あ、？」

「こういう時はおとなしく嵐がすぎるのを待つしかない（経験）

「両者とも、児戯は止めよ」

モモンガさんが止めてくれた。ウルベルトさんとたつちさんの喧嘩で耐性が付いているにしても女のメンチ切り合いはなかなかに怖かったと思うがよくやつた。

「再び聞こう。何用だ。シャルティア？」

「はい、これより君命に従いまして、セバスと合流しようと思つております。今後少うしばかりナザリックに帰還し難くなると思われんすから、ご挨拶に参りんした」

「シャルティア」

「はい、なんでありんしよう。ブロント様？」

「行つた先であー、あれだ。「武技」と言つたかな？あれが使える奴を見つけたら連れて來い。俺の推測が正しければレベルカンストでも「武技」を覚えられるはずだからヒントが欲しい。別にそいつ自体は弱くても構わにいから五体満足でな」

「わかりりんした」

「では、シャルティアよ。勤めを果たし、無事戻つて來い」

「はっ！」

氣合入つてんな。

「下がつてよろしい。それとシャルティアよ。ナーベラルかエントマにデミウルゴスを呼んで来るよう指示を頼む。次の策について話したい事があると」

「畏まりんした。モモンガ様」

外へ出る前に着替えるために自分の部屋に向かっていると、背後から風切り音がした。

カカツとステッポで避けると、壁に手裏剣が。そして俺に良く似たガランクトアーマーを着たダークエルフと乱波装束に目線を着けた人間が一人。

「ブロントオ～」

「弟子がファイナル済まない。どうにも存在理由にファイナル板ばさみされたらしい」

「そうか。たつちゃんも大変だな」

そう、こいつ等は汚い忍者こと笠松ノブオとファイナル達也。忍者はたつちゃんの弟子と言う設定で、昔俺と同じLSに入っていたがネ実での工作や自演のしあいの結果、一度LSを抜け、復讐の機会を窺っていると言う設定持ちなのだ。

そしてその目的の為に蝉を極めると言う目標の元、パラ忍のファインナル達也に弟子になつたとかそんな感じ。

たつちゃんは物理、回避両方を臨機応変に努める盾として、60の忍者系のクラスに40の戦士から騎士系の職業レベルを持つている。ついでに忍者は60忍者系に対して道具作成の為、鍊金術師15、料理人15となつており、FFの忍術を再現するのにアイテム士のような内部データになつてている。たつちゃんはナザリック内の鍊金術師から購入と言う形だ。

「俺あ考えたぜ。ブロント。確かにお前は俺の創造主なのかも知れねえ。だがな。俺の中の忍者が、「汚い忍者」がお前を超えると叫びやがる。だからまずは役割に則つて動くことにしたのさ。そうすればナザリックも敵対しねえ。お前と言う個だけを狩ればいいからな」「ノブオの存在理由を考えると止めきれなかつた。ファイナル済まい、ブロントさん」

「いあ、いあ。忍者、お前今まで何してた？」

「アイテム作成とバフで強化だよ。このために図書館まで行つて全部かけてきてもらつたんだ。覚悟してもらうぜ」

ここで絶対忍者が俺に勝てない理由が一つ。俺はワールドチャンピオンで、ジョブレベルに換算すると大体105から115くらいなのだ。ワールドチャンピオンは強さにPスキルが必要不可欠だからとして、俺が「ブロント」をやるために盗賊系ジョブなど純戦士よりは余計なジョブをロールプレイの為に取つてている。だからワールドチャンピオン込みでようやく100を超えると言つた感じかな？まあそんなもん。

「いいだろうぬんじや。ここで今一度どつちが上か決めるべ。俺が勝つたらお前に「月に一度は襲つてきてもいい」と言う条件をつける。お前が勝つたら好きにする」

「へへ……へつへつへ。いいのかよブロンント。だつたら俺が勝つたらナザリックを出て行つてもらうぜ」

「うみゅ、よかろう」

近くで聞いていたメイドの顔面が蒼白になつてゐる。ギルメンでは無いとは言え至高とか呼んでいる奴が万が一でも出て行くと言つてゐるのだ。「奉仕する先が居なくなる」「お手本が居なくなる」系の状態になつちえいるのだろう。まあ勝つけど。

「そこの。聞いていたか？　これは謀反ではにい。それが忍者の存在理由だからだ。一応誤解が行き渡らないようにアルベドとか呼んでも来い。場所はアンファイティアトルムだ。多分デミウルゴスならこの状況を理解して動いてくれるはず。それと、Pスキル向上の為挑戦は常時受け付けるんだが？　これは各階層に伝えるべき。そうすべき」「が、畏まりました！ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・テザール様！」

「ブロンントでいい」

「はい、ブロンント様！」

忍者とたつちゃんに向き直る。

「待たせたな。じゃ、ちゃつちやと行くぞ」

「俺はいつでもいいぜえ」

「はあ、このファイナル馬鹿弟子が」

「たつちゃんちよつとこつちに」

「なんだブロンントさん？」

「ここで俺は耳打ちを一つ。これは忍者に聞こえたら致命的な致命傷となるかもしれにい諸刃の刃。」

「…………忍者は存在理由に悩んでいる。だから「俺に負けたから」と言う理由をつければなんとかなるかもしれにい。一応ジレンマ解消の為に「月に一度の襲撃」を加えたから大丈夫だろう。もし自棄になつていそなならそれとなくフォローしてやつちえくれ」

「ファイナル承つた。ブロントさん」

「…………もういいか？バフが切れたらかけなおしてもらうのがめんどいんだよ」

忍者がイライラしながら催促してくる。忍者はせっかち。

「おう、行くぞ」

俺たち3りは連れ立つて第六層に歩き出した。

「笠松……何か申し開きはあるのかしら?」

「あ? ねえよ。そんなもん」

現在アルベドのオーラが見えそうになつていて。

「まあまあ、アルベド。汚い忍者の存在理由は至高の御方々によるもの。よつてこれは至高の御方々の御意思でもあるんだ。常に挑戦を求め、挑戦するブロント様にふさわしいと思うよ」

「流石デミウルゴス。ナザリック一ノ知恵者ヨ」

「でもでありますデミウルゴス。あのペンギンと違つてレベルは非戦闘ジョブも加えて90相当。それも湯水のようにアイテムを使うために取らせたと聞いているであります。瞬間的な爆発力では盗賊系や忍者のジョブより上ではありますか?」

「まあ、それでも良く考えてレベルは90相当だ。よほどの奇策を持つていらない限りブロント様の勝利は搖ぎ無いよ」

「場所を移したというのも痛いんじゃないかな? マーク、なにか罠が設置されているとかある? 私は感じないけど」

「うん、無いよおねえちゃん」

階層守護者も各々の評価や意見を出している。

「ブロントさん……」

骸骨が心配そうに俺を見ている。

「なに、モモンガさん、大丈夫だ。それに色々考えもあるからよ」

「分かりました……」

作り出したNPCに挑まれて色々考えることがあつたのだろう。多分ルベドとか。

「じゃ、始めるか」

「おう、後悔すんじやねえぞ?」

俺は無限の背負い袋から「鈍器」とラベル打ちされた奴をとりだし、そのなかから一列に棘々の付いたものを取り出した。

「げ、クラクラかよ」

そう、クラクラ。正式名称クラーケンクラブ。この特殊能力は「時々2～8回追加攻撃」と言うもの。時々と言う割にはかなりの頻度で複数回攻撃が発生するが。そして一撃の攻撃力は低いものの、空蝉などと言ったデコイ系のスキルを真っ向から叩き潰すのに最適な武器だ。ナイトは他にもメリクリウスクリスやジユワユースと言つた複数回攻撃武器を持っているが、特殊能力発動率と手数の多さではこれがダントツ一位だ。

俺はさらにアイテムを取り出した。

「あれは……」

「知つて いるの デミウルゴス？」

アルベドもノリノリだ。

「あれは「白くべたつく何か」。武器に魔法攻撃力を付与するために定期的に作らせて いる品だよ」

そう、これはスクロールを使わないので同様の効果が得られるかの試作品だ。これでエンチャントすることにより、マジックアローよりも劣る無属性の魔法属性追加攻撃を加えることが出来る。かつてF11の赤魔道士がエンチャントしたのと同じ効果を再現した。ついでに言うと主成分はなめくじの粘液だ。命名は俺。

「喰らうぞ！」

忍者の先制攻撃。目を眩ますように爆炎が俺を覆う。俺は慌てず息を止め、忍者の気配に向かつて防御の姿勢を取つた。

「影分身！ 不動金剛！ 不動金縛り！」

さらに忍者はこの場で忍者のスキルによりステータスを強化し、レジスト覚悟で動きを鈍らせるために金縛りの術を使つてきた。

爆炎が晴れると忍者は居ない。俺は気配を頼りに盾を振るう。

影から音も無く忍者と影分身が出現。ガキイ！ つと俺の盾と忍者の鬼哭が火花を散らし、クラクラと影分身の刃がかち合う。やはり背後から鎧に覆われていない首を狙つてきたか。

「おらあ！」

俺はカウンターで忍者にクラーケンクラブを振るつた。

「ふつはつよ！」

忍者はクラーケンクラブによつて発生した追加攻撃を一撃は体術で避け、一撃は影分身を盾にし、最後は鬼哭で受け流した。

「まだまだ行くぞお！　忍者あ！」

さらにクラーケンクラブを振るう。追加攻撃は同時に出来るわけでは無く、連続でランダムに出るのでその間に次の攻撃に移れるのだ。

「うげつ!?」

今度は5回の追加攻撃が発生。流石の忍者も事前に仕込んでいた空蝉を剥がされて何発かダメージを喰らう。

「落ちろ！　ギガトン…………パンチ！」

振り切つたクラーケンクラブを引き戻し、雷属性の左をお見舞いした。これはガントレットに付与されているスキルの一つ。運がよければ脳震盪と麻痺に入る。

「ク…………ソ……………までか…………」

いい感じにジョーに拳がヒットした忍者はダメージも相まって崩れ落ちた。うむ、うまい具合に加減出来たな。

「勝負あり！」

モモンガさんによるジャッジだ。気絶確認。うん、しつかり気を失っている。

「んじやアルベド、たっちゃんを呼んで来てくれ。それと重ねて言うけどこれは忍者が存在する理由の一つに俺をライバル視すると言うものがあるから沙汰とかは無しな。後月に一度くらい襲つてくるけど邪魔はするんじやにい。こいつの在り方を決めたのは俺だし」

「…………畏まりました。ブロント様」

「ドタバタしちまつたけどようやく街に行けるな。んだば準備してくるべ。モモンガさん…………いや、モモン後でな」

「了解した。口ト。では後ほど」

忍者の襲撃は考えてみれば遅いほうだったな。しかし爆炎陣に火遁、雷遁も追加で目くらましに使われていたらどうなつっていたのか解らなかつた。結果を急いた忍者に敗因がある。リアル視覚にも影響が出るからブライン対策はどうにかないとダメだと分かつた。そ

の点については感謝。忍者。

今回の考えをまとめながら忍者を背負い、たつちゃんに預けるためにアルベドの元へと歩き出した。

第八話

現在俺とモモンガさん、それとリューサン、ナーベラルとついでに忍者はエ・ランテルと言うリ・エスティーゼ王国の都市に来ていた。現在のモモンガさんはアダマン製の兜に胸当て、ガントレットとサバトン、そして上からローブを着ている。兜と言えば仰々しいが、ようはしつとマスクも鉄仮面で似たようなもんだ。そして俺もフルアダマンだ。流石にグラットンはやりすぎなので腰にはダイインスレイフと、対甲殻などの鈍器にボドウンメイスを持ってきた。盾はケーニッヒシールドでは無くリツターシルトだ。リューサンはいつものプラモっぽいドラケン装備。忍者は何故か五神装備である、玄武兜、麒麟大袖、青龍籠手、白虎佩楯、朱雀脛当だ。ナーベラルが一番軽装だつたりする。

街の連中の反応は芳しくない。やはりエルフは奴隸と言う風潮が根強いようだ。そのせいでナーベラルがぶつぶつ言っている。

「…………ゴミ虫共が、下等生物頭を垂れ、跪くべき至高の御方々を無礼な目で見るばかりかブロント様に侮蔑の視線をぶつけて……死刑…………生温い。やはりニユーロニストのところに…………」

ちょっと良くない兆候だぬ。

「ナーベ

「は、はいっ！ ブロ 「ちょっと待て」

「今の俺は口トだ。そしてお前はナーベ。後モモンさんとブルーゲイル。ついでに忍者。復唱」

「口ト様と「待て」

「さんを付けろよデコスケエ！」

「h a i！」

「漫才はそこまでだ二人とも。ナーベ。今の俺たちは同じ冒険者仲間だと知れ」

モモンガ——モモンがたしなめる。

「そうそう、ナーベさん。少し肩の力を抜くのである。m i k a nたんもそう思うだろ？」

「クワーバー」

実は一番目立つてているのはリューサンことブルーゲイルだ。竜の肩ロース肉を媒介に最低位の竜を召喚したのだが、まさか竜がここまでびびられる存在だとは思つていなかつた。こんな子竜がだ。

「リューサンはm i k a nにインスニした方がいいと思うな」「こんな愛らしいm i k a nたんを見えなくするなんて！ m i k a nたんもそのままがいいだろう!?」

「クワーバー」

「そうだねm i k a nたん。たまにはロトさんもペットの面倒を見たほうが良い。アウラに任せつきりにしてないで」

「お前までブロントさんにアルパカの世話をろ言うんか!?」

第六層にはるし★ふあーさんが俺をからかう為に贈つて来たアルパカが居るのだ。

「ロト、崩れてる崩れてる」

「ん、んん！とにかくm i k a nはあまり自由にさせにいようにな。後アルパカ牧場には行かないでF A」

例えアルパカの畜産がナザリックの財政に貢献してたとしてもだ。「そんなにアルパカと一緒にされるのが嫌なのか・・・・」

当たり前だろう。それとダルメルとエルヴァーランを一緒にするのもNG。

「とにかくナーベさん、今回の僕達は冒険者です。名声や知名度を上げるのに大々的に暴漢などを伊達にして帰す程度ならかまいませんが、ナザリック外の者を露骨に蔑視するのはやめておいた方がいいでしょう」

誰だお前？って思うけどこれが猫を被つた忍者なのだ。こいつのように臨時パーティで猫を被つて行動するネットゲーマーはよく居る。

「忍者・・・・」

ナーベは複雑なようだ。至高のナイトに刃を向けたと言う反面、そう望まれて創造されたと言う事実がどう反応を返せばいいのか分からなくなっているらしい。

「役割は覚えているな？」

モモンが注意を促す。

「異国の没落貴族とその仲間達だな。ナーベは元従者つて事だからギリ様付けでもいいんだが、やつぱり出来ればさん付けが好ましいだよ。出来れば披露する必要の無い設定だからぬ」

「はい口トさ——ん」

先行き不安だな。

「とにかく、ナーベよ。今回のお前の課題は演技を覚えることだ。人間が嫌いなのは構わん。だが、今後人間の国と付き合っていくにあたり、上辺だけでも取り繕う必要があるので。無用な摩擦は避けたいからな」

「はい、畏まりました。モモンさん」

「特に、俺には分からんが人間、殺氣・・・・・・と言うものを感じ取れるらしい。敵意や殺意を持つと簡単に感知されるので気を付けるようにな」

「はつ」

「そこら辺は忍者、お前が演技指導する。モモン。こいつも人間だし、慣れには適任かと思うが」

「そうだな。口ト。汚い忍者なら感知能力も高いだろうし、検討する必要があるな」

そんな事を話しながら「絵」を探す。識字率がさほど高くない平民の社会ではそういう看板を目印にしているようだ。

そして多分合っているだろう目当ての奴を見つけた。

「あそこだな」

モモンを先頭に、俺たちはウエスタンドアを押し開け、中に入る。中は薄暗く、なんか小汚い。なのでアダマンバルブーナ（要はヘルム）のフェイスガードを下げて暗視機能を発動させる。

モモンは数瞬辺りを見回した後、受付へと歩いていったので俺たちも付いていく。

あちこちから踏みするような視線を受ける。これが無ければブロンズ装備にビースパタでも良かつたんだが、舐められない程度にレ

アで、かつ周りと隔絶していない程度の装備を選んだと言う訳。俺のガラントアーマーは内部データがレベランアーマーと言う上位互換装備になつてゐる為、解りやすさの為にアダマン一式を装備してき
た。

「宿だな。何泊だ」

「一泊でお願いしたい」

正直なんらかのスキルで外に家建ててそこで過ごしたほうが身体に良さそうだ。

「全員銅のプレートか。1人5銅貨。飯はオートミールと野菜。肉が欲しいなら追加で1銅貨だ、まあ、オートミールの代わりに数日経つたパンと言う可能性もあるがな」

「飯は不要だ」

「5人か・・・・となると既にパーティは組んでいるわけだな。6人部屋にしておくか?」

「うむ、それで頼む」

そう、ここは宿屋だ。酒も飯も売つているみたいだが。さつき冒険者組合に寄つてきたので今夜の宿を取ろうと言う訳。

「まあ、一応説明しておくところは同じ程度の冒険者が顔を広めてツテとかを作る場所だ。だからと言つて他の部屋にうかつに近寄るなよ。物盗りと誤解されてもしようがないからな。それと5人で25銅貨だ」

店主が手を出した。前払いと言う事なんだろう。

「では、これで」

「ひのふの・・・・丁度だな」

モモンが俺たちを連れて宿屋の奥に行こうとしたら、なにやら短い足がつつかえ棒のように出された。

「・・・・」

モモンはまるで気がついていないようにその足の前まで歩き——踏みつけた。

「いでえ!?」

「てめえ！ 何しやがる！」

「やんのか？　あ、あ、！？」

これには仲間の冒険者も思わずいきり立つた。

「兜の視界が悪くて足が出ているのに気が付かなかつた。最も……短すぎて見えなかつたのかも知れんが」

よく見ると男の鉄靴部分が陥没している。まあ本気では無いな。ロールプレイビルトとは言え、レベル100の異形種が思い切り踏みつけたら靴ごと足が爆ぜる。

「ただじやおかねえ……」

おそらく足の甲の部分を骨折しているだろう男が青い顔をしながら、剣を抜いた。

「ふむ」

モモンは一瞬だけ考える素振りを見せると男が反応するより早く距離を詰め――。

「飛べ」

掴んでぶん投げた。

投げられた男は他の席のテーブルを盛大に巻き込み、沈黙した。

「おつきやああああ！」

なにやら外野が騒がしい。

「俺が伊達や酔狂でこんな格好をしているという訳ではないと言ふ事を分かつてくれたかな？」

「あ、ああ！」

「すまねえ！」

残りの男の仲間達はこの職業不詳の鎧ローブが並々ならぬ力を持つていると感じただろう（確信）

「あんた！　何すんのよ！」

騒がしかつた外野がやつてきた。

「ツレは忙しい。何か用かな？」

俺が対応する事になつた。

「何が用かな？」じやないわよ！　あんたの仲間がアレを投げたせい
で……私のポーション！　使い物にならなくなつたじやない

！」

「たかがポーション一つで『ちやーちやうるさいな。それにそんな大事なもんをこんな治安の悪いところに出しておくのが悪い（有罪）』『たかがポーション？　たかがポーション！　食費を削り、依頼を増やし、汗水垂らしてやつとの思いで買ったポーションをたかが！』後半は聞こえない事にしたらしい。

「まあまあ、うちのものがすみませんね。僕がポーションなら持っていますから、現物で弁償と言う事はどうでしょう？」

忍者がもみ手しながら交渉している。

「ふん・・・・・まあいいわ。きちんと弁償してくれるなら文句は無いわよ」

忍者がポーションを取り出すと、それをひつたくるように外野の女が奪い、鼻息荒くも戻つていった。

「ブロント様にあの態度・・・・・」

「ああ、いや、ナーベ、冷静になつてみると忍者の対応で良い。ポーション一つで手間と時間を取られるよりかはさつさと解決したし。それと口トだ」

「申し訳ありません。口トさ——んがそう仰るなら」

「こちらも平和的に解決したぞ」

「思つたより気のいい人たちだつたのである」

「そおか」

「まあ、とにかくまずは部屋に行こうじゃないか。そこで今後の方針でも話し合おう」

「うみゅ」

俺たちはギイギイときしむ階段を昇り、1階を後にした。

部屋に到着すると、モモンが魔法で作られた甲冑を消し、黒の上下となつた。

「まさか冒険者がここまで夢の無い職業とはな・・・・・」

その顔は骨・・・・・ではなく、凡庸な男の顔。流れ星の指輪によつて「星に願いを」を使用したモモンの顔だ。これによつて食事が可能となつた。ただしアンデッド扱いなので睡眠は不要らしい。

「うみゅ、ただモンスターを狩るだけなら何も冒険者じゃなくても出来るだよ」

冒険者。別名、モンスター専門の傭兵。

「まあ、それも低ランクでの話では無いかな？ ランクが上がれば高難易度のダンジョンとか探索すればいいと思うのである」

「ブルーゲイルの言うとおりだと思いますよ。最初の内はランクを上げる事に専念しましょう」

ブルーゲイルと忍者が今後の方針の一つを提案する。

「もつと、こう、ランクの高い冒険者をギルドで返り討ちにして、それでギルドマスターとかに目をかけられて一気にアダマンタイトにとか・・・・・・」

「テンプレ乙」

チャンスは向こうからやつてくるものではにいと言う事だな。
「とにかく、手つ取り早くランクを上げることを考えよう。口トからは何かあるか？」

「俺からはにい。せいぜい夜の治安の悪いところをぶらぶらして、厄介ごとでも名声につながりそくながら首を突っ込むとかだな」

「お、それはいい。しかし徒党を組んで行動していると難癖は付けられないかもしねないな。各自自由行動でいいかな？」

「うみゅ」

「わかつたのである」

「はい。了解しました」

「畏まりました、モモンさ――ん」

次の方針が決定した。夜会話は基本だからな。俺は何か用事があると睡眠時間が自然と短くなるタイプなので夜明けに少しだけ寝ればそれでいい。まずは軽く一杯ひつかけてくるかな。

第九話

現在俺達は布や皮装備でそちらの露店で酒と食い物を買って食べ歩いているところだ。

「今日初めてこっちの食べ物を食べたんですが、これなら宿の食べ物も頼んでおいたほうが良かつたですよ」

目の前には黒の長袖と長ズボンを履き、眼鏡をかけた中の上程度によくある日本人顔の男が一人、モモンガさんだ。それもそうだろうな。こんな100%オーガニックな食い物なんてリアルに無いぞ。ちよつと、いや、かなり薄味だけどそれは俺達が人工物に慣れきつたせいつてのもあつて素材の味を楽しむ分にはおつりが来るくらいだつた。

「そういうえばエントマさんからカイコ串をもらつたのである。いつもでも食べないのもどうかと思うのでここで肴にでもどうであるか?」

「お、カイコか。高級品ジャマイカ!」

リアル世界では絹はよほどの金持ちしか身に着けられない高級品、それを生み出すカイコは餓えに負けた生産者が食べてしまい、毎度処分されていると言ふ黒い噂が立つほどのものらしい。

「モモンもどうだ?」

「いいえ、私は遠慮します」

やつぱブルー・プラネットさんの虫食講座は好き嫌いが分かれたからな。ましてやモモン、もといモモンガさんはスケルトン系だつたので参加しなかつたし、オフ会で出ていた超高級品のイナゴの佃煮にも手を着けていなかつたのはしやあないか。

「忍者も食べるであるか?」

「いただきます」

忍者はサバイバルにも特化しているだけあつて、抵抗無くカイコ串を食べている。

「ナーベは・・・・・また今度にしどくか」

「口トさ——んの配慮に深く感謝致します」

プレアデスでもエントマとか以外には不評らしいからな。虫料理。

「では、そこそこ情報も集まつたし、ここいらで各自散開するべ。何か面白いことがあつたら〈伝言〉で確認と言う事で」

「ああ、分かつたとも、口ト。ではまた宿でな」

「おう、宿でな」

やつぱこういう時間帯はスラムかな。とりあえずブラブラしてみるべ。あ、その前に鎧をシーフ用のに換えておくか。ここら辺は付与が効くから便利なんだよな。

さて、スラムにやつて來た。おれは実力を隠した状態で気配だけ垂れ流しにしてふらふらと歩いている状態、つまりそこのモブ冒険者と同じレベルに偽装して歩いている。

「チヤララ～チヤララ～チヤララ～ラ～ラ～ラ～ラ～カカカカツ」
鼻歌を歌いながら散策していると、なにやら争う声が聞こえて来た。

「んふふ～後はお兄さんだけだね」

「なんでこんなことをする!」

「これは・・・・・どうしたもんかな?」

「あ、こんなこと?　お兄さんが欲しいなと思つて」

「ど、どういう事だ?」

「有名なさー、薬師のお孫さんが留守でねー。いつ帰つてくるか監視してくれる人が欲しいの。私はそういう面倒な事はしたくないしー」

「そこの冒険者崩れのワーカーとか言うジョブらしき男を助けてもあんまりメリットを感じない。かと言つてこいつは単独犯なのか。それとも何か他に繋がりがあるのか。」

「・・・・・助けるか」

正直ワーカーっぽいのに俺の名を売るのも微妙なんだが、この通り魔の女、重心とかからオーガ程度なら倒せる技量を持つていそうだ。こいつなら武技のヒントにも、そして組織犯だったのなら拠点に案内させて名声上げの糧にしてもよさげだからな。

「そこまでだ」

「あん?」

「た、助けてくれ！」

不機嫌そうにこちらへ振り向く女。そして、必死な男。

「お前からは何か面白そうな匂いがするからな。とりあえず連行させてもらうかな」

「んだとめえ？ 馬鹿な正義漢かと思つたら本当の馬鹿か？ 装備だけは立派そうだけど…………ね！」

女の刺突。装備はステイレット。つまり刺すことしか出来ない短剣だ。刃が無いので斬る事が出来ない。それを俺は手首ごと掴み取つた。

「ふむ、芯にミスリル、オリハルコンコーティングか…………。低位魔法効果、そつちのは効果が違うのか？ ほむ、一時的付与？ 面白い、装備自体は糞だが発想は気に入つた」

「クソが！ 放せ！」

もう片方のさりげなくステイレットを握る手も拘束しているので女はガツツンガツツン膝蹴りをしている。だが無意味だ。

「そここの。こいつは俺に任すろ」

「あ、ああ！ 感謝する！」

男は全速力で逃げていった。

さて、面白そうなネタも手に入つたし、モモンに連絡取るかな。
（モモン、今大丈夫かな？）

（どうした口ト。早速何かのイベントにでも遭遇したか？）

（そんなとこだべ。ここらの金ランク程度では持つていらない装備を持つて いる女を捕まえた。しかも通り魔の現行犯だ）

（それはいい。他には何がありますか？）

（武技は使わせる暇をやらなかつたけど、そこらの鉄ランクでも使え そのなのをコイツが使えないはずもないだろ。一旦連れて帰るべく

（分かりました）

途中でモモンガさんリーマンの癖が出たのかロールプレイが抜け てたけどそこはまあいいか。

（ちよつと、私をどうするつもり!?）

（無言の腹パン）

これでよし。気配なら探知出来るから人の居ないルートを通つて
窓から部屋に戻るべ。

「ただいまー」

『お帰りロトさん』

ここまでサボシの技能を使つて人に会わずに戻り、窓へは跳躍して
入つてきた。

「こいつが例の奴」

「ああ、それが」

おれのアイテムボックスの中にはシーフツールとして、魔力を通す
と変形するミスリル製の針金があるので親指に結束バンド代わりに
巻いてある。

「とりあえずこいつを尋問して、情報を吐かせたら〈人間種魅了〉と〈記
憶操作〉で武技の情報を聞き出してから教わるべ。いあ、最初から魔
法使えば尋問も必要無いか」

「そうですね。そうしますか。〈記憶操作〉…………んー、このあ
たりか。魔力消費が半端じやないな。よし、〈人間種魅了〉、起きろ」
「ん、んん…………」

レベル100の異形種のマジックユーチャーの魅了が決まつたのか、
敵意の無い表情でこちらを見ている。

「どうして私縛られてるの？」

スラムでの出来事だと忘れているらしい。

「ああ、今解くからそのまま腰掛けていてくれ」

「分かつたわ」

「それで、お前の名前は？」

「クレマンティースよ。忘れちやつたの？」

魅了は親しい友人のような感情を浮かべる。俺がそんなのに見え
ているんだろう。

「そうだつたな。クレマンティースだつたな。で、なんでお前は人を
殺そうとしてたわけ？」

「殺すつもりは無かつたわ。ちょっとこれを刺して、魅了状態にしよ

うと思つただけ

「その武器はお前が作つたのか？」

「んーん、特注よ。ミスリルにオリハルコンコートしてゐるの。すごい
でしょ」

「ああ、凄いな。他に特徴とかあるか？」

「えーとね。魔法を一つ付与出来るつてところかな？一度使うとまた
補充しなきやいけないんだけど」

「それはどんな魔法でもか？」

「私が使う範囲では魔法に不自由した事はなかつたわね。つて言つて
も帝国のフルーダみたいな奴はえーと・・・・第5位くらいま
でだつけ？あのランクの魔法は試したことないわ」

うむ、やはり俺の目に狂いは無かつた。

「レアつてほどじやないけどこれを下地に一から作つたら面白いもの
が出来そだと思わにいか？場合によつては羊皮紙の消費もなく
なりそうだし」

「ああ、羊皮紙ですか。今はまだ大丈夫ですけど、スキルも封入出来る
なら切り札に「次元断切」とかロトさん用に〈嘆きの妖精の絶叫〉と
か雑魚掃討用に使えるようになりますしね」

「うみゆ、ナザリックの鍛治師に再現可能か検証させるのも良いべ。
で、後はコイツから武技教わりたい」

「ああ、それもありましたね」

「後は・・・・なんかどつかの孫の監視とか言つてた氣がするけど、
お前は何たくらんでるわけ？」

「私の計画じやないわよう。あの子が「どんなアイテムでも使用出来
る」つてタレント持つてるみたいだつたから、カジつちゃんの計画の
足しになるんじやないかつて思つただけで」

「カジツチャンとは？」

「ズーラーノーンの幹部だつけ？まあ私も一応幹部なんだけど。こ
この墓地でアンデッドの軍勢作る準備してゐるわよ」

「モモン・・・・やつたな」

「ええ、やりましたね」

「おめでとうございます。モモンさん、口トさん」

「これで一気に名声が上がるのであるな」

「マジかよ……ブロントの野郎が女引っ掛けてきたと思つたら棚ぼたにも程があんだけ……」

がははーグツドなんだが？

「待て、慌てるな。して、クレマンティース。そのカジツチャンとやらは何時頃計画を発動させるんだ？」

モモンが鋭い指摘をする。確かに今すぐ発動とかだつたら片手落ちだわな。

「んー、あの子が居ないからしばらくは無理かな。叡者の額冠は見せたから急かされるだろうけど、私が居ないと戦力ががくつと落ちてそこのらのならともかく、あの子の誘拐は迂闊に出来なそうだし」

これでこいつの使い道が決まった。

「モモン、こいつこのまま少しずつ〈記憶操作〉してナザリックの武技担当にしよう。一応他にも複数欲しいけど」

「そうですね口トさん。おい、クレマンティース。お前は今困つていることは無いか？」

「んー、風花聖典に追われている事とかかな」

「よし、うちの拠点で匿つてやる。ついでに美味しい飯も出るぞ。来るか？」

六色聖典の事はむしろこつちが知りたい。ついでに監視に草を生やす奴を付けるけど。内藤とかカイエン殿とか。

「一応言つておくとお前より強いのはゴロゴロしているからな。多分ズーラーノーンとか言うのより安全だろ」

「ふうん？ま、ズーラーノーンにはそこまで義理とか感じてないし、わかつた。行くわ」

「よし、決定。それで、どうします？口トさん」

「墓地には顔を出させない方向で。そつちはコイツを送つた後かな。叡者の額冠とか言うのもこいつが持つてるみたいだし。・・・・・持つてるよな？」

「うん、持つてる」

「一応レアっぽいしそれも研究させる方向で、夜が明ける前に終わらせとこう」

「そうですね。転移先は・・・・・アンフィテアトルムでいいか」

「んだばナーベ」

「はっ」

「お前は収者の額冠をデミウルゴスかアルベドに渡して来い。後街の現状を見てダークエルフのアウラとマーレは早めに慣れさせないといけにいと思った。手が空いているようだつたら交代してもらつて来い」

「畏まりました」

とりあえず近場に悪の組織つてのがあるらしいので潰すか利用するかは見てから決めるか。

第十話

クレマンティーヌを捕獲した俺達は、そこら辺のアホに聞き耳を立てられないように、また、武技と言うモノがどんなもんか試す為に一旦ナザリックに戻ってきた。リューサンと忍者は宿で俺達がいくえふめいで要らない疑いをかけられないよう待機している。

「お帰りなさいませ。モモンガ様。ブロント様」

『お帰りなさいませ』

アルベド、アウラ、マーレが出迎えてくれる。今居るのが第六層。なんとなく選んだんだが、何の対策も施していない低レベルの人間に熱い所や寒い所に連れて行つたら拙かつたので特に気にしてはない。

「うむ、出迎えご苦労」

「今帰つたんだが？」

最初は守護者全員が出迎えようとしてたんだが、伝言で出迎えは最低限で良いと伝えたからこの人数らしい。

「蒙昧なるわたくしの質問をお許し下さい。至高の御方々」

アルベドが恐縮した感じで聞いてくる。

「許す（ピピピ）

「その、ナーベラルの肩に担がれているものは？」

「うみゆ、俺達がさらに強くなる為のヒントってどこかな」

記憶を弄つたモモンガさんがこれ以上の魔力消費を嫌い、魔法抵抗力から万一掛け直すのもめんどいので腹パンで氣絶させて来たのがナーベラルにお米様だつこされているクレマンティーヌだ。

「それは素晴らしい事ですわ！　早速ニューヨニストを呼んで従順にさせましょう！」

「おめでとうござります！　モモンガ様、ブロント様！」

「おめでとうござります！」

喜色一面の守護者達。

「落ち着きたまえ」

すぐに静かになる守護者達。

「ここからは俺が説明しよう」「

モモンガさんに交代する。

「これの名前はクレマンティース。武技を使って拉致しても問題無い人物として捕まえてきたが、場合によつてはナザリックで働いてもらう事になる。その為必要以上に痛めつけてはならないのだ」「わたくしが浅慮でした。お許しを！」

即座に平伏するアルベド。

「気にするな、アルベド。誰にでも間違いはある。重要なところで失敗しなければそれでよい」

「モモンガ様…………」

「さあ、撫まれ」

「あつ」

アルベドの手を引き、立ち上がらせてから汚れを払つてやるイケメン（骨）

「モモンガ様…………」

潤んだ瞳で仮面を見るアルベド。

アウラとマーレ、ナーベラルも父性と慈愛の溢れるモモンガさんを見て、更なる尊敬の念を籠めている。モモンガさん寝てる時にアルベドとなんかあつたのかね？

なんか良いふいんき（何故か r y）になつちえいるし、俺まで再びターゲットにされても堪らないのでモモンガさんが上手くまとめてくれるまで丸投げする事にした。

一段落着いたところでアルベドとかの仕事が残つてゐる連中は下がらせ、現在俺とモモンガさん、ついでに氣絶してゐるクレマンティースがここアンフィアトルムに居る。

「どうすつかな」

「どうするとは？」

モモンガさんの問いに答える。

「そもそも、俺達レベルカンストプレイヤーが武技を覚えらるるのかつて点だ」

「そうですね。リアルと同じようにブロントさんがコーヒー淹れようとしたらえらい不味いのが出来ましたし」

つまり、武技がスキル扱いなのか、そうなると例えばジョブに料理人を取つてない状態なのでリアルで料理出来ても調理が出来なくなつて いるかつて事。

「この点を考えるに、スキルや魔法で呼んだ奴もレベル固定されているのか。こないだ死体を媒介にしたデス・ナイトは行動時間が制限されてないから鍛えれば強くなるのか。レベルを下げたらスキルを覚えられるのか。まあそんな感じかな？」

魔力の消費を抑える為に再び眠つてもらつたクレマンティーヌを降ろしながら考える。

「しかしそうなると考え方です……。〈星に願いを〉を使つてレベルを下げるときステータスが下がりますし、外で行動するなら装備の質も下げなければならない。仮に下げたとしても、武技を覚えられる保証はどこにも無い。詰んでません？」

「いや、まだだ」

アイテムボックスの中から流れ星の指輪を出す。これはギルド潰しの過程で手に入れた品だが、プレイヤーにとつてリアルマネーと運次第でいくらでも手に入れる事ができたアイテムだ。

「そ、それは！」

「うみゅ、流れ星の指輪だな。別名モモンガさんのボーナス1回分」「やめテ！」

これが意外なほど多く手に入ったのも、エリクサー症候群……つまり、希少価値ともつたいない精神が使用を留まらせるのだ。未使用でろくにログインもされてなかつたギルドの宝物庫に死蔵されているケースが割りと多かった。ついでにモモンガさんもこれに当てはまる。

「今日はこれを使つてみよう

まずは1回しか残つていない奴を薬指の指輪と交換する。

「よし、指輪よ！ 僕に武技を覚えられるようにする！」

指輪が光る。が――。

「どうです？」

「うみゅ・・・・・・」

特段何か変わったようには感じない。

「わからぬえ」

「わからんのか。この戯けが」

モモンガさんもちよつと期待してたようだ。ちよつと考えてみよう。

「これがエキストラスキル扱いなら条件に当てはまるジョブを既に所持していたら、ユグドラシルだつたらバージョンアップで実装されたNPCとかからクエストを受けて覚えたりするな」

「そうですね」

「他に考えられるパターンは、そうだな。単純にレベル上限が上がったとか。まあこれは可能性としては薄いんじゃないかな？ 一般論でね？」

「そうですね。世界が変わったので適応されるルールも変わったとしたら、[「星に願いを」](#)でレベル上限値開放からのレベリングで無限ループが出来ますし。あ」

「どうすた？」

「ナザリックで無限POPするシモベでレベлинグ出来ないかな？」

「いい着眼点ジャマイカ？」

現在課金罠とかが補充出来ないのでナザリック内の警備レベルを落としてはいるが、元々ナザリック地下大墳墓はダンジョンを改造したギルド拠点であり、この地特産のモンスターとともに自動POPする。ナザリックオールドガーダーとか。

問題点は俺達のレベルが高すぎる点であつて、仮になんらかのアイテムでレベル上限を上げたとしてもPOP待ちしながら狩つたとしても焼け石に水。下手したら完全な徒労に終わりかねない。

だが、恐怖公やプレアデス辺りだつたらまだ有効だろうし、一般メイドに至つてはレベル1だ。

「後で会議だな」

「そうですね」

瓢箪から駒かな。

「話を戻すぞ。この場合、仮に実装されていたらクエストN P Cはクレマンティースで試してみればいいし、ラーニングも可能かもしだい。もしくは、単純に練習して習熟度を上げてマスターする可能性もあるから一つ一つ試していけばいいんじゃないかな？」一般論ですね？」

「そんなどころですか。でも、流石に全部試すとなると今晩だけでは時間が足りませんし、どうしましようか？」

「うーみゅ・・・・・とりあえずクレマンティースを起こしてみるか」

バチン！バチンッ！とクレマンティースをビンタする。

「つ！」

すると、流石に気絶してはいられないのか、クレマンティースが飛び起きた。

「【おはよう。】

「【なんだてめえ等！？】

〈人間種魅了〉が解けているらしく、微妙に記憶も弄られて混乱しちえいるらしい。

だが、俺は構わず続ける。

「お前には一つの道がある。一つ、ここで働く。二つ、なんか色々弄られてここで働く。三つ、アンデッドになつてここで働く」

「二つじゃないじゃないですかブロントさん」

うるさいよ馬鹿。最後のは咄嗟に思いついたんだよ。

「まあ、お前色々あくどい事やつてきたんだろ？ 殺すんだ。殺されもするさ」

インガオホー。

「流水加速、能力向上、能力超向上、不落要塞・・・・・・」

俺が喋っている間にある程度の把握が済んだのか、じりじりと警戒していたクレマンティースがモモンガさんへ突進した。

「ぬ？」

それをモモンガさんがハ工でも払うかのように腕を振る。クレマントレイースは後衛とは言えレベル100のプレイヤーの腕力で振るわれた一撃を払いのけた。そして突進中に抜剣したステイレットをモモンガさんの仮面に突き出す。が――。

モモンガさんは仮面のスリットに突っ込まれたステイレットを握っていた腕を捕まえ、動けないようにする。

一糞か！放せ！

二刀気な良いな

どうやら俺の腹パンの一撃で気絶した事を覚えていたらしく、魔法詠唱者っぽい見た目のモモンガさんにターゲットを絞つたようだ。

モモンガせん今顔があるのにそんな舐めアして良い謝?

「ふたりで来てましナ」

「てめえ、アンデツドか!!?

いがにも

演出なのか。後ろに黒い後光が射し込み、絶望のオーラを垂れ流す

「そして、これが私のハンサム顔だ」

他面を外し 方の眼鏡が指揮者ノ状態の顔を眺て二二、

「その顔装備扱いなのかな？」

「どうなんでしょうね。」
〔大致死〕で治るといいなあ」

このモモンガさんのゾンビっぽい顔も俺が渡した流れ星の指輪で作成したもの。ダメージは受けていないらしく、会話も特に苦しく無さそうだ。

ひつあつ

魔法詠唱者の拘束を振り払うことができず、絶望のオーラの影響なのか顔面を蒼白にしているクレマンティーヌ。

「なんか漏らしそうな顔してるぞモモンガさん。放してやつたほうがいいんジャマイカ?」

「そうですね」

モモンガさんは顔面に刺剣を突き刺したままだが、とにかく一步でも離れたいが思つたように身体が動かないらしく、弱々しい抵抗を続けるクレマンティーヌを降ろすが、即座に逃げようとする。

「どこに行くのかな？」

即座に俺が回り込み、通せんぼする。

「お願い…………許して…………何でもするから殺さないで」何やら恐慌状態に陥っているらしく、腰が抜けて四つんばいになつている様が土下座めいている。

「ん？ 今なんでもするつて言つたか？」

「言つてたな」

「よし、お前は今からナザリツク地下大墳墓所属武技教導官だ。後で辞令を出しておこう」

「は、はい。よろしくお願ひします…………」

後で会議の時に守護者達と顔合わせさせないとかな。

第十一話

「んじゃどうすつかな」

辞令は後で正式に出すとして、守護者を集めた後またここに戻つてくるのも面倒なんだよな。

「モモンガさん、なんか身分証明の代わりになるもんとか持つてにいか?」

「そうですね。ではこれを」

モモンガさんはなんかシルバーフォーマルネックレスを取り出した。

「なんぞー?」

「浪漫装備……ですかね」

「ほむ?」

「昔バザーでステッキを詰めるだけ詰めた装備があつたんで興味本位で買つちゃつたんですよ。まあ安かつたんで」

「続けて」

「で、いざ装備しようとした時こんな器用貧乏通り越してゴミ装備だつたことに気がついて……」

「もういいつ、モモンガさん!」

俺はモモンガさんの黒歴史と言うか自虐ネタをこれ以上聞く気になれなかつた。俺もやらかした事があるからだ。おそらく捨て値通り越して処分価格だつたんだろう。

「装備の適正レベル自体は50位まで使えそなうなんでこれでいいかなと」

「そうだな。んだば俺もなんか出すかな」

クレマンティーヌはこの会話に参加せずおとなしくしちえいる。

「おい」

「はいいつ! なんでしょう!?

いきなり話を振られてビビるクレマンティーヌ。強気なネーチャンがビクビクしている様子はそのスジには需要が高そうな感じだな。俺は武器を2つ取り出し――。

「どつちがいい?」

とりあえず聞いてみた。

「じゃ、じゃあこつちで・・・・・・」

パラディウムダガーを持つていった。アゾットは突きにくいしな。どつちもヴァナだと一定レベルからの装備だったが、ユグドラシルだと制限を付ける事自体データ容量を消費するので付けていない。どつちもOSR装備なんだがな。

「それおもえの就職祝いな」

「いいつ!?」

ダガーを取り落としそうになり、わたわたとお手玉をするクレマンティース。鞘つきで良かつたな。鞘なしだつたら指の何本かは落ちてたぞ。

「これもだ。受け取れ」

続いてモモンガさんも暗銀の骨っぽいネットレスを渡す。

「すごい・・・・・・なにこれ」

なにやら呆然としちえいる。

「あれどんな効果なん?」

「全ステ上昇及びHP、MP自然回復値上昇、全耐性の付与」

「それだけ聞くとやべーな」

「上昇値がゴミだつたんですね」

「そおか」

クレマンティースがネットレスを着け、パラディウムダガーを腰に差したのを尻目に会話しちえいた。

「よし、ナザリックでいやもん付けられたらとりあえずやつた奴見せて自己紹介しろ。ここは部外者に厳しいのが多いからね」「わかりました」

「んだば移動する前に武技の練習軽くやつとくか。流れ星の指輪やるからモモンガさんもな」

「いいんですか?」

「誠心誠意お教え致しますので殺さないで下さい」

クレマンティースは腹パンと装備授与で立場を悟つてしまつたようだ。

「ほら、そこでグツとためたらシュツてするの！」

「こうか？」

「モモちゃんため過ぎ！ そんなぐぐぐつてしない！」

「分からん」

俺とモモンガさんはクレマンティースから武技の指導を受けていた。こいつ慣れるの早すぎだろう。

「いい？ こうして……こう！」

なんで戦士職を持つていないモモンガさんもやつちえいるかと言うと、ジョブに影響されないで覚えらるるがどうかの検証も兼ねているつてどころか。なんか流れ星の指輪も使つたら光つたし。すかしクレマンティースが感覚派すぐる。どちらかというと理論派のモモンガさんは理解を諦めて見取り稽古に集中しちえいる。ちなみに今練習しているのは能力向上だ。

「こうか！」

「うんそう！ ブロちゃん意外と早かつたじやない」

「うくん・・・・・・・・」

「モモンガさん、こういうのはノリが大事だ」

「ノリ・・・・・・ですか」

「アレだな。青空文庫であつた・・・・・界王拳つて言えば分かるか？」

「あくうん、なるほど」

文字は漫画で覚えた。子供の頃はマスクとゴーグルをして通いつめたもんだ。

「ちよつと離れて下さいね」

「おう」

「何々？」

俺とクレマンティースが離れると、モモンガさんは足を肩幅くらいに開き、両拳を腰の高さに構えた。

「ふううう、はあ！」

モモンガさんが気合を入れるとなんか身体全体から黒っぽい波動

が出た。

「モモンガさん、絶望のオーラは不味いって」

「あばあばば」

漆黒の波動の他に絶望のオーラまで感知出来るくらいなんか色々噴出しているけど、俺はともかくクレマンティンヌが恐慌状態になつてるので止めておかないと危険が危ない。

「**（大治癒）**をおごつてやろう」

いちいちバッドステータスを特定するのもめんどい時は**（大治癒）**だな。MPがあればこれ一つで大体なんとかなる。

「どうだろ。武技発動します？」

「試しに殴つてみろ」

俺のスキル構成は無効化ではなく基本軽減系で占められているのでダメージ計測をしてみる事にした。

「了解です。行きますよ…………ふんっ！」

モモンガさんが持つて いる杖で俺に殴りかかる。俺が仕込み杖で作つてやつた死神の剣だ。鞘の部分を額で受けてみる。

「少し痛い。ダメ上がつてるんじやね？」

「やりました」

これで指輪さえ使えばカンストプレイヤーだろうが後衛職だろうが何とかなる事が分かつたな。次はカンストじゃないのが武技覚えられるかどうかだな。まあ指輪は守護者レベルでも無いと勿体無くて使う気が起きないが。

「よし、〆に試してみたかつた奴やつてみるか」

「お、なんですか？」

普段俺のスキルはいちいち宣言して使う暇が無いので、斬る時、防御する時などそれまとめて発動しちえいるのだが、それとは別にオススメのアビリティでも再現してみようと思った。でもまあいきなり難しいのは置いておいて、だ。

「センチネル！」

スキルで防御が上がる感触を思い浮かべながら武技を発動する。技名叫んだのは気分だな。

「よし、モモンガさん殴つてみろ」

「はい。〈竜の力〉からのお、ふんっ！」

「ちよ、おま」

言い終わる前に胸部装甲からガンツ！と割と鈍い音が響き渡る。
無強化でもそこまでのダメージではないのは分かるが。

「痛くねーな。流石のセンチネルだ。すかしモモンガさん能力向上で
良かつたんじや？」

「いやあ、また絶望のオーラが暴発したら嫌だなと思いまして
「しゃあねえな」

「いきなりオリジナルの武技じやなくて要塞で良かつたんじやない
「要塞つてさつきの説明からするにダメ反射だろ？ そつちはパリイ
系と併用すつからまた今度な？」

俺くらいPスキルが極まつちえいるど、本気で殴る時は無意識でも
強撃とか色々スキル上乗せするし、一つじやにいので技名叫んでいる
暇も無い。

「実験も終わりましたし、そろそろ会議にしましようか」

「だな。クレマンティースの挨拶も兼ねて歩いて行くべ」

「守護者以外にも顔は覚えておいて貰わないといけませんしね」

「各階層に顔を出すのは後回しだな。先に墓地のズーラーノーンとや
らを見に行くか。クレマンティース道案内な」

「わかつたー。でもカジつちゃんに私も挨拶したいなー」

「行つてみてから決めるからおとなしくしとけ」

墓地ね。無限POPしそうならグラットン持つちえいくか。説明

文が設定として反映されてるならどの程度か試してみないとな。

第十一話

「なんだばいい時間だからそろそろ会議にでも行くべ」

武技の練習で思つたより時間を取られてしまつた俺らはそろそろ移動するべきだと思つた。一応町の中に居ると言う事になつてゐるからね？

「そうですね。後は各自で自主練するとして、玉座の間でしたつけ？」
モモンガさんが転移門を出してくれるので確認を取つてくる。お客様さんが居るからな。

「うい。まずは着替えるか」

そうしてショトカ登録してあつた早着替えでいつものサークートに着替える。オススメはアーティファクト打ち直しとかあつて名前が変わつたけどやつぱりガラントシリーズが愛着あるな。惜しむらくはユグドラシルにはアイテムに容量いっぱいまでデータを詰め込むとそれ以上の改造は出来ないつてところか。すかし感覚でやつてるけど実際どうなつてるんだろうなこれ？

「【えつ!?】 なにそれ！」

クレマンティンヌが驚いている。実際リアルでこんな事されたら俺も驚くだろうな。

「ショトカって言う奴だ。気にすんな、禿げるぞ」

「【えーっと…】」

なんかグラットン出してからおかしくなり始めてるな。そういうやフレーバーテキストもなんか適用されるんだつけ？ 例えばシャルティアやアルベドは属性マシンでギヤップ萌えとかなんか実際に居たらとてとて面倒なもんを詰め込まれても今のところ破綻無く動いている。逆に割とシンプルなセバスなんかも悪く言い換えれば内容スッカス力かも知れないが侍従の頭をやつてたりでも不具合は無いみたいだ。後はなんか創造^お_や主の影響が多大に出ちえいたりするみたいだけどまあなんかカルマとか色々な要素が絡んで今のN P Cが出来ている。これはアイテムにも適用されていて、本来メロンジュースに使われているはずのサンダーメロンとかはぶつちやけると設定

だけでユグドラシルには無いアイテムだ。まあ何が言いたいかと言
うと飲んでもパチパチはしないはず。でもしたつて事は反映されて
いるんだけど、グラットン……グラットンソードはフレーバーにこれ
まで w i k i に記述のあつた設定を山ほどつぎ込んでいて、その量は
アルベドとどっこい。エディタに一杯一杯書かれている訳だ。その
中に「ナイトが持つと光と闇が備わり最強に見えるがあんこくが持つ
と頭がおかしくなつて死ぬ」と言うものがある。んで、まあこれは職
業クレリックでも暗黒神崇拜してる奴とかカルマが悪に傾いている
奴。まあ大体悪い事してそうな奴にも適応される。ここで善よりの
ジョブ一個も持つてなくてカルマが悪よりだと致命的な致命傷にな
る。一応カルマ悪でも信仰する神が善だつたりとかなんかそう言う
のがまあ他のN P Cみたいに色々絡んで判定している可能性がある
訳だ。後はついでに入れた「これは生きている」とかそんなの。つま
り、何が言いたいかと言ふと……。

「クレマンティーヌよ、お前大丈夫か？」

「なあにモモちゃん？ 別にわたしは悪いところ無いわよ？」

サイコパスっぽいこいつは頭がおかしくなり始めている訳だ。

〈モモンガさん〉

〈……どうしました？ ブロントさん〉

急に〈伝言〉で話しかけられたモモンガさんは不審げにこっちを見
て来たが、それでも一応〈伝言〉で返してきた。

〈なんかリアルにダークパワーっぽいのが漏れてるっぽい〉

「なあつ！？」

眼窩の奥の炎が一瞬だけ強く光り顎を大きく開くモモンガさん。
まあそななるな。

「えつ、何？ なんなの？」

「大丈夫だ。深刻な影響は（現時点では）にい

「ええ……？」

〈どうするんですかブロントさん！ ナザリツ^うクカルマ極悪ばっかり
じやないですか！ しかも俺もカノストしますよ！〉

〈流石に拙いか。一応推論だがレベル差もあると思う。クレマンティ

んヌよりモモンガさんの方がやばいハズだけど影響出てないっぽいし、何よりあいつがしゃべってるのはタブ変換だけだ

「タブ変換ってなんですか!?」

あまり違ひが判らないらしいが端っこから漏れてる余波だけでこ
れか。「むむむ。」このままだと一般貧弱メイドからおかしくなり始め
て守護者とか上司が処分しかねない。ほむん、また新しく鞘作るか。
この際流れ星の指輪でどこまで汎用性があるかの実験も兼ねてみる
べ。抜いて使つたらアウトなんだがな。使いたいからしようがない。

「ふう。冷静に考えたらスタッフ・オブ・AINZ・ウール・ゴウンと
双璧を成す装備ですしね。しかも壊れてもギルドが無くならない
……あつ、すいません」

「なあに気にするな。あつちはただのアドウリンレベルなモグハウス
だからな。勿体ないと言えばシユレッダーに残りの物資全部突っ込
んでおけば良かつたきゅらいなんだが」

「……ほんとに影響出てませんよね?」

「……Di e丈夫だ」

「ブロントさん!？」

しきりに心配するオーバーロードをなんとかなだめて新しく鞘を作
るまで封印と言う約束をして玉座の間まで転移した。この間円形
闘技場でずっと駄弁つていただけだ。

「モモンガ様、ブリリアント・アンルリー・レーザー・オブ・ノーブル・
テザー様がご入室なさいました」

「ゞ苦勞」

セバスにモモンガさんが一声かけて玉座に座る。守護者達も片膝
付いた状態で顔を伏せて言葉をかけられるのを待つてはいる。

「顔上げていいぞ楽にする」

俺は玉座の斜め前くらいに適当に立つて声をかけた。ついでにク
レマンティンヌは歯の根が合わない状態でガチガチやつてはいる。

「今回集めたのはまあ、こいつが思つたより使えるから顔見せしどこ
うと思つてな」

その言葉にここに居る俺、モモンガさん以外の連中が嫉妬の視線を売れマンに向ける。当の本人はバフかけてやつたけど死にそうだ。

「まあそう睨んでやるな。か弱い現地の人間だ」

そのモモンガさんの言葉に眼力が若干弱くなるも、特にシャルティアがやばい。処女ビッチでバイ。ソースはペペロンチーノ。なんか玩具を見る目でクロマンを見ている。

「こいつのおかげで俺とブロントさんはさらなる力を手に入れた。そしてこれからも高みを目指す為、このクレマンティーヌを雇う事にしたのだ。こいつが装備しているネックレスと短剣は前祝に渡したものだから勘違いしないようにな」

この発言に陶酔顔のアルベド。デミウルゴスはなんか一瞬眼鏡を曇らせた後畏敬の念でこつちを見ている。他の連中はなんかすごい事になつちやつたぞつてか鬼になつていて。一方鶏口マンティンヌに向ける視線はまあ、それくらい当然つて感じか？

「流石は至高の御方々。常に高みを目指すお姿……我々も見習うべきですね」

「アア、ソウダナデミウルゴス。私モ更ナル鍛錬ヲ積マネバ

「嗚呼、至高の御方々が更なる至高に……おちび、至高の上つてなんであります？」

「えつと……究極？ つてアルベドは知つてたの？」

「勿論よ。旦那様の事は全てを存じ上げております。勿論あの夜の事も……ぐへへ」

「ぐうつ……あんたなんかあれよ！ 腹筋が硬すぎてすぐに飽きられちゃうに決まってるし!!」

「あらあ、流石処女と賞味期限切れになつたヤツメウナギは語彙が少ないわね。あの晩のモモンガ様。はああ……可愛かったわあ

「ううううう……おちびい！」

「あーあーもうアルベドもその辺にしどきなよ」

「あああアルベド！ アウラもこう言つてゐるんだしその辺にしておこうか！」

「はあい、モモンガ様」

ううん、なんか大変な事になつてゐるな。

セバスは何やら微笑ましげな表情で見てゐるし、マーレはオロオロと辺りを見回している。そろそろ次進めるか。

「落ち着き給え」

ピタツと静まる玉座。

「後みうごを差すようですまにいがなんかグラツトンからダークパワードが漏れて影響が出てるらしい。まあそこまで深刻じゃないしくつか対策考えているから気にすんな」

俺の言葉に一気にテンションが下がる配下の連中。

「発言をよろしいでしようか。ブロント様」

「許す」

デミウルゴスが心配そうにこっちを見ている。

「具体的にはどのような影響が及んでいるのでしょうか？」

「そおだなあ。あれだ。こちつぱ遣いに誤字マシマシな状態だ。そこのクレマンティースはタブ多めだがまあ、その内抜けてくるだろう」カルマ極善でアルタナ信仰だからまあなんとかなるだろう。パラディンだとレイズ使えないから取つてないけど。

「左様でございましたか……お答え頂き有難うございました。ブロント様」

とても鎮痛なまなざしてこちらを見ている守護者とか。やつちまつたか？

「兎に角、ちよつと新しく鞘作つてみるからこれ以上は影響出ないと思ふ。ちと気を抜くと名前とかも間違えたりするからそこんとこヨロしくな。クレマンティースは会議に居ても退屈だろう。しばらくブラブラしてきてもいいぞ」

「ひやい！」

名指しされてびくつとするクレモアンティース。……んー、言葉に出す時は頑張つて名前くらいは間違わないようにsてるけど中々難しいな。

「シャルティア、んー……そおだな。第六層辺りに転移門出してやれ。セバス、プレアデスの中で暇なのを一人と適当な奴を何人か付けても

てなしてやれ

「分かりんした。ブロント様」

「かしこまりました。ブロント様」

シャルティアが〈転移門〉を開く際、何かぼそぼそと交わしてクレマンティンヌは潜つていった。セバスは部下に指示を出している。

「ん、ん、！ 以上だ。お前達からは何か報告はあるか？」

モモンガさんが場の空気を押し流すように咳払いをして話題を変えてくれた。助かるわ。

「はっ！ 以前回収した人間ですが、一部が蘇生魔法で灰となる事が分かりました。現在資源節約の為、死体は保存しております」

デミウルゴスが巣レイン法國の連中でなんかやつてているらしい。

「ゞ苦労だつた、デミウルゴス。あー、漆黒聖典だつたか？ あれの隊長はどうしている？」

「記憶を引き出した後生かしております」

しつこく聖典は何度か生き返らせては実験で潰したりを栗化しているらしい。

「おおそうか。別に隊長じゃなくても良いんだが、まあいつらを何人か使つてパワーレベリング……強く出来ないか試してみたい。記憶をいじくり過ぎて壊れているならいつぞ記憶を捏造しても良いか。自動POPのを倒させて様子を記録してくれ。それと、他のNPC……一般メイドとかも強くなれるのかどうかも知りたいから業務内容に加えてくれ。ブロントさんからは何か補足はありますか？」

「うみゅ、バフ……魔法とかで強化した速成組と一応倒せる武器と死なないように最低限強化したのに分けてやってくれ。それと恐怖公の眷属もかな」

出来れば全部時間をかけて育てたいけどそもそも言つてられにいのが現状だぬ。

「かしこまりました」

「後はそうだな。レベルが上がつたとしたらナザリック内の消費コストがどうなつているかの問題だが、レベルが上がるかどうかが最優先だな。これ以上皮算用をしても仕方あるまい。後はレポートにまと

めて提出するように。ナザリック付近の現在状況はどうなつている
？アルベド」

「はい。現在偽装工作が進んでいます。マーレの手を借りればさらに
早くなりますがいかがいたしましょう？」

「マーレは最終調整のみで良い。完璧に仕上げたいがそこまで速さは
重視していいからな」

「かしこまりした。モモンガ様」

「カルネ村の状況はどうだ？」

「最近はアンデッドが徘徊し始めているとの報告があります」

「そのアンデッドはどうした？」

「テスナイトに処理させております」

「分かった。アンデッドが自然と生まれてくるなら管理用に新しい下
僕を送ってくれ。そいつらでやりたい事があるからな」

「仰せのままに。モモンガ様」

「後は地上と第六層の作物の生育の違いをレポートに——」

こう言つた事は俺が口を出すよりモモンガさんの方が得意だった
りする。むしろ平時で頭が回っている時はゲテモノ揃いのギルドの
頭だつただけあつてかなりえごい。

「以上だ。何かあれば〈伝言〉で俺かプロントさんに送れ。何か質問
や疑問に思つた事はあるか？」

と、そろそろ明け方付近になつて来たせいかぼーっとし始めて居る
頭で聞き流していると会議もゞに入つたようだ。なんかモモンガさ
ん威厳とか出したい無意識魔王ロールと親近感出そうつて感じの口
調が混じつてキャラがブレてんな。や、外では魔王、城いえではアツト
ホームなパパつて感じなのか？ まだ籍すら入れてぬえけどな。

「いいえ、ございません」

「本当か？ いや、咎めているつもりは無いのだ。組織で重要視され
るのは精度の高い情報。それを少しでも確実にするには報告、連絡、
相談を密に行う事が大事だからな。俺に相談しにくい事があれば近
くの仲間に相談する事も覚えていてくれ」

モモンガさんはここに集まつていりゆ連中を見回しながら会社で

大事な事を教えていた。これ仲間の中でも何気に大事だかんな。

『はっ！ かしこまりした。モモンガ様！』

「今日はこの辺りにしておこう。皆忙しい中、ご苦労だつた」

モモンガさんがこちらを3回チラ見してからそうめた。すまにいが寝れる時は寝たいんだ。

「大丈夫ですか？ ブロントさん。フラフラしてますけど」

「おう、多分そろそろ明け方だかんな。顔見せついでに会議開いたし

宿戻つて寝るか」

「そうですね。お疲れさまでした。転移門出します」

「おつー」

なんとなくこのままの装備だとやっぱそうだなと思ったのでショット力登録の無難そうなのに着替えてからベッドにダイブした。クエ全然してなかつた感。【残念です。】

第十二話

解散して睡眠を取つたんだが寝巻のオートリジエネで1時間くらいで完全回復（成人）してちえしまつた感。流石にネロと言つた手前休んでるかもしれないにいモモンガさん起こしてクエ行くのもPTAに反するな（戒め）

しゃあねえな（ソル）、言伝を念のため書置きしてソロでなんか受けてくるか。黒マンティンヌも起きてたらついでに連れてつか。

〈アルベド、おるかー？〉

〈念話〉でナシ着けとけばいいだとカカツと起動……するも返事がない。

〈あつ、あつ、ブロントさまですか？〉

あつ（察し）

〈あ、はい。アルベドさんですか？ そつちにモモンガさん居たら薬草採取でも受けてくるつて伝えてもらえます？〉

〈つ……！ そんな、ブロント様！ あ、っ！〉

〈返事は良いので、ごゆつくりどうぞ〉

「ブロント様あ～！」

多分モモンガさんの部屋の方から悲鳴とも嬌声ともつかないサキユバスの悲鳴が聞こえた。階層おんなじだからね。仕方ないね。

思わず丁寧語になる程度にドン引きしてしまつたがデフオでサキユバスだつたら時間の問題だつたし翌日モモンガさんにフォロー入れておけばいいだろう。男女の問題はデリケートだからな（真理）すかしどうしたもんか。あの色ボケ統括がモモンガさん独占してると他の連中の嫉妬がマツハなんだが……かと言つてアルベドとモモンガさんが致してゐる時に守護者集めてもナザリックが派閥争いとかしかねない。やつぱここはとんずらで一人一人回るしかねえか。となるとどうすつか。傷心状態（ブローケンハート）なシャルティアから行くか。

カカカカツ！

シャルティアは消沈していた。彼の悪逆たる（カルマ極悪）守護者統括に自身の怒りを知らしなければならぬと。

シャルティアには恋の駆け引きがわからぬ。シャルティアはアホの子である。耽美に耽り、配下と遊んで暮らしてきた。けれども男女の機微については人一倍敏感であつた。特に童貞を失つた至高の君については薄々何かあつたとは感じたものの、察する前に犯人によつて告白されたのだつた。

そんなシャルティアは配下の吸血鬼の花嫁達に苛立ちと劣情をぶつけていた。

「なんなのよあのゴリラ！ アインズ様に寵愛を授かつたつて自慢しやがつて！ 羨ましい！」

シャルティアはわめき散らしながらアンデッド特有の死臭やら香水など、さまざま匂いが混じり形容しがたい臭いと化していた部屋で吸血鬼の花嫁の下腹部をその拳で貫いていた。その周囲には血液や人体のパートが転がつており、嬲つている対象が瀕死になる度に魔法を使い回復しているようだ。

しかし悲しいかなこの場所に誰も止める者は居ない。被害者たる吸血鬼の花嫁自身も嬌声と悲鳴を上げながら懇願するしかないので。そんなシャルティアの私室に一人の救世主が！ そう、謙虚なアルパカたる彼である。

トントントントン。

ノックが四回。それに反応しシャルティアは不機嫌に扉を睨み付けた。

「ア、ア、ッ！」

「シャルティア、おるかー？」

これには思わずこの部屋は暴君であつたシャルティアも顔面蒼白。拳を深く挿し込み過ぎて吸血鬼の花嫁が血反吐を吐いたのにイラつとした。

「ブロント様!? 申し訳ございませんっ！ ちよつと！ ほんのちよつとだけお待ちになつてください！ <魔法効果範囲拡大化・大致

死>！」

思わずうろ覚えの廓言葉も投げ捨て瀕死になつてゐるシモベ達に<大致死>をかけた。

「お前たち！ 40秒以内にここを片付けんし！ そこのお前はブロント様と歎談して時間を稼げ！」

人間は愚か高い身体能力を以てしても普通に考えたらおおよそ不可能な命令を下し、シャルティアはそのうち一体、吸血鬼の花嫁の足首を掴み浴室へと急いだ。結局、準備は5分程度かかり、その間絶頂と激痛で顔からあらゆる体液を吹き出しつつも乱暴に拭つただけの吸血鬼の花嫁が扉の隙間から顔を出してなんとか時間を稼いだのだつた。

「いきなりすまにいな。ちょっと気になつたもんだから顔を出してみたんだが？」

俺はなんか血生臭くとも甘つたるい匂いのするシャルティアの部屋に居た。

「そんな！ 至高の御方に謝られる事など一切ありんせん！ 私こそブロント様をお待たせしてしまい申し訳ないであります」

そう言つて頭を下げるシャルティア。ダガすかし、その瞬間にパツドがずれてた事に気が付いて顔を赤くしたり青くしたりしちえいる。「しょうがねえな（623+K）」

シャルティアの頭に手のひらを置き、優しく撫でてやる。俺は不器用だからよ。アンデッド♀の慰め方なんかわからにいんだが？

「あ、あう～」

ひとしきり撫でると真っ赤になつた銀髪の真祖が居た。

「色々溜まつてゐみたいダから無理すんな。ほれ、ばつち来い」

色々マセてるが△ん石の子なんだが？ 深く考えると頭がおかしくなつて裏世界でひつそりと幕を閉じる。グラットンがない→コミュ障→心が狭く顔にまででてくる→パーティーメンバーがいません↓いくえ不明。グラットンがある→リアルでじゅうじゅつ→HN M戦でも引っ張りだこ→ロット勝ち→彼女ができる。ほれこんなも

ん。

۲۰۷

BU?

「ブロントザまあああ！」

さつきとは別の意味で顔を赤くしたシャルティアが突進してきたので衝撃を後ろに受け流しつつ受け止めた。流石削り用ガチビルドだガチビルド。ガラント一式が無かつたら肋骨がえぐれてたかもしれにい（＊、ω、＊）

「あう！」

腹に抱

腹に抱き着いたかと思つたらすりこ
やめていただけませんかねえ（戦慄）

な

ずれたサークートを直しながらこいつどうしよう……と思案に暮れちゃいた。

「も、申し訳ございません！」

そのまま土下座の姿勢になるシャルティア。単なる工口がキだと思えば大したことないんですけどねえ。

「よーしシャルティア。とりあえずステイだ」「はいっ！」

そのまま自決されると本末転倒なのでちょっと考える時間が欲しいから待たせてみた。するとシャルティアはそのままの姿勢でなんかモジモジしはじめた。

「……」

「うう、はうつ」

うわあ（ドン引き）

流石はペロロンチーノ（2回目）こいつの設定多分アルベドとどっこいの長さなんじやねーの？ だけどこのまま無かつた事にして仕切り直しても今度はモモンガさんの二の舞になりかねない（直感B+）

ここで問題だ！ このロリババア（話し始めて数日）をどうやって切り抜ける？

1、知的でクールなブロントさんは突如解決のアイデイアを浮かべる。

2、仲間が来てたすえられてくる。

3、食われる。現実は非情である。

正直時間をかけてもまだなんとかなりそうダガ今後ストーカーが増えそうだしおはようからお休みまで気分だけで指先一つでニンゲンをぶちつとしかねない奴を野放しにはできにい。状況を整理しよう。こいつは無礼を働いて土下座しちえいる。つまり罰かなんかで満足させればいいしモモンガさんとアルベドに対する傷心もなんとかなるかもしれない。一石二鳥だ。

よし、決めた。

「おいシャルティア」

「はあ、はあ、なんでありんしよう……？」

「顔は上げるな。思うに罰をやろうかと思つたんだが……どうして欲しい？」

かがんで耳元でささやいてやつた。地味に俺の柔軟性が試される。

「ひう！ ふ……」

「ふ？」

「踏んでください……」

なんかプルプルして銀髪の雑魚が蚊の鳴くような声で懇願してきた。吸血鬼なだけに（至高のジヨーク）

「よーし、踏んでやつから次から溜め込む前にちゃんと相談すんだぞ」

「はいい」

と言う訳でサバトンの裏で軽くぐりぐりしてやつたらなんかあちこちから色々な液体を垂れ流して失神したカンストNPCが居た。これでこいつは大丈夫なんですかねえ？

幕間　スレイン法國では

一方そのころ、スレイン法國では――。

「絶死絶命様戦死！」

「風花聖典の到着まで後半日との事です！」

「ダメです！　保ちません！」

「風花聖典が戻るまで持ちこたえるのだ！　今こそ信仰を試す試練と知れ！」

未だに熾天使が暴れまわっていた為、法國の最高戦力に繰り返し蘇生魔法をかけ死に戻りを仕掛けさせていた。これは熾天使自身が本来ならレベル90程度なのだが、地属性であり、神の炎ウリエルと言う近接特化型に加え、堕天により攻撃力が上がつたせいで攻撃力だけ見れば100レベルオーバーとなっていたのが原因であった。

ただし、堕天のデメリットにより信仰魔法が一切使えなくなり自身への強化が使えず、最高戦力である絶死絶命……すなわち番外席次が復帰するまでの消耗戦を強いられていた。

それでも墮天し変質した種族スキルである眷属招来により、自分より下位の天使を墮天させた状態で呼び出すことが出来る。トラップである彼の本来の使い方は短期決戦において殲滅できれば良し。不可能であればパーティの要を落とし、自身が息絶えるまで消耗戦を仕掛けると言うものであつた。その間に索敵により補足されてしまえばトラップの持ち主である謙虚な騎士とその仲間達が加勢するという悪辣さである。

勿論前提条件は厳しく、まず第一に使用主が極善である事。第二に取得クエストをクリアしている事。そして、クリア後に確率でドロップするアイテムを使用し魔法を覚えることである。

この通称「熾天使クエ・裏」はクールタイムが異常に短い「善なる極撃」に耐えつつ特定の順番で熾天使達を撃破しなければならないのでオーバーロードのような種族上ダメージ特攻が入るもの、カルマが極悪のものは戦闘開始した瞬間溶けるように死亡する事から論外とされていた。

何より撃破報酬のドロップ率にばらつきがあり、ミカエルは腐るほど出るのにウリエルが出ないなどのプレイヤーの怨嗟が木霊していた。これをオススメのRPGシリーズに例えるとウリエルのドロップ率はクラーケンクラブ以下である。

以上の理由によつてトラップとしては破格であるものの、汎用性を考えたら「熾天使クエ」で墮天しない天使が手に入るのに十分。要約すると廃人達が暇つぶしに周回して手に入れ、取得済みならバザーに流すものと言う代物であつた。

その墮天せし神の炎であるが、地上に接触することによりオートヒーリングが発動する特性を生かし飛べない現地住民を相手に無双していた。本来ならば空中からの攻撃を得意とする法国側の天使も召喚者が危機であるため、召喚された瞬間数ダース単位で消し飛ばされると言うルーチンを繰り返されている。今も天使の強化が間に合わなかつた為に余波で兵や召喚者がミンチになり、穴を埋めるために別のものが交代していた。

もはや全面戦争と言つても過言ではない地獄には惜しみない戦力が投入されるも、六色聖典の内漆黒聖典が壊滅。風花聖典が別任務で国外に居た為に抑えられるものが番外席次のみとなつていた。これも度重なる死亡により大幅にレベルダウンしており、法国に存在するワールドアイテムは瓦礫の下敷きである。

——だが、それは決して無駄ではなかつた。

「いい加減、死になさい！」

復帰した番外席次による一撃に吹き飛ばされた墮天せし神の炎。生存している法国の戦闘員全てによる度重なる魔法抵抗難度強化を付与した弱体魔法により……徐々に、本当に徐々にであるが墮天せし神の炎は弱つていつた。対する番外席次は常に強化魔法の重ね掛けを最高の状態に維持され、相打ちを狙つた捨て身の戦法により確実にダメージは蓄積していた。

「おのれ、地虫共が！」

それでも墮天せし神の炎は主である謙虚な騎士への忠誠を示す為、もはや回復率が3割以下となつたオートリジエネに意識を向けながら

ら一振りで周囲の法國兵達を薙ぎ払う。衝撃波により建造物が砕け散り、飛散した瓦礫がさらに赤い花を咲かせる。番外席次を回復させる為の死兵となつた彼らはそれでも前進する。

だが、それで良かつたのだ。通常ならば、対抗魔法として召喚された己の使命は敵の消耗。この地に呼ばれるまでの記憶は朧気で、その中には酷い時は呼ばれた瞬間こちらが消し飛ばされたり、戦闘区域外に転移させられ戦闘すら行えず強制送還された事もあつた。これが自身の記憶なのか、それとも彼の熾天使の分け身として現界した者たちのものなのかは分からぬ。だが、それでも主の敵は滅し、害する。主を害される前に。それが自身を支えていた。

怪しげな建物は召喚された際に片つ端から叩き潰した。敵の陣中に降りた時はいつもこうしていた気がする。次点での脅威は目の前の地虫である。潰しても潰しても沸いてくる地虫共を一匹でも多く潰し、至高のあの方の目に入らないようにする。それこそが我が歓び。

そう考えながらもクールタイムが終了した眷属招来を使い、散開させる。こうすれば目の前の地虫の強化魔法が切れ、自身へのうつとおしい弱体魔法も弱くなる。もはやこのダメージレースは墮天せし神の炎が死ぬか法國の全ての民が死に絶えるかとなつていた。

第十四話

至福の表情で失神したSYLテイアを吸血鬼の花嫁に任せた俺は一度戻つて軽い装備の点検でもすれば丁度いい時間になるなと言うか鬼なつたのでぶらぶらと見て回りながら⑨層まで徒步でぶらぶらする事にしたのダガ、3層を抜ける頃には大行列になつてしまつたのでこのままだと2戦目を始めかねない時間帯になると悟つた俺はきゅうきよ解散を命じると私室に転移した。

転移した後、今の手持ちの無限の背負い袋の中身を吟味しつつ補充、整列、優先度が低く類似アイテムの多い順から樹形図状にラベル貼りした背負い袋の中に背負い袋を入れる作業をする。これは戦闘の時でも取り出せるよう試しながらやるのでぶつちえけいくらやつても時間が足りない（進化論）逆に暇つぶしも兼ねたトレーニングにもなるのでやることない時は割とこんな感じかな（この辺りが強さの秘訣）

そうやつて空間の波紋の中に手を突っ込んで中身をイメージしたkら即取り出す作業を繰り返してたらモモンガさんから＜念話＞が入つた。

「お待たせしましたブロントさん。薬草採取お疲れ様です」

「【ありがとう。】んだばちよつとシャルティアの様子見に行つてて薬草はまた今度にした。モモンガさんもゆうべはおたのしみでしたね」

「やめろオ！」

「冗談だ。冒険者ギルドでも冷やかしにいかにいか？」

昨日登録したつきりだからよ。なんか張り出されてる奴見に行きたいんだが。

「そうですね。せつかく登録したのにナザリックにトンボ返りでしたし。ああ、でも今戻りでしよう？　ああいうところつてもう目ぼしいクエストは無くなっているんじゃ？」

くんだ。だから冷やかしついでにクレマンに街中案内させつか

なつて思つてた。そういうやあいつのスケイルアーマーギルドメンのランク証だつたから着替えさせてからだけどな〉

〈あつ（察し）〉

有能そうな現地住民がアライメント悪だつた件。

〈そう言う事だから大体おやつ時くらいに出発になりそうだけどどおする？〉

飯も食つちえおきたいところダガそれだと時間たりぬえ。

〈そうですね。それだと半端に顔を出しておくよりは今日の残りはナザリックで仕事でもしようかと思います。ほんとはすぐにでも冒険に行きたいんですけどね……〉

〈あんま根詰め過ぎないようにな。モモンガさんが仕事するならおえゝもカルネ村に顔出してから町は行くは。一応聞いとくけど財政状況はどうなつてる訳？〉

〈あまり芳しくないです。すぐには言いませんが何かしらの資源を獲得しないとナザリック自体の運営が傾きます。現在も課金罠は停止して最低限の警戒態勢で回しているのですが、頭が痛い問題です〉

そこまでかい。

〈OK分かった。その辺もシユレツダーに突つ込めるのが無いか探つてみる。やばかつたら残りの指輪使いつぶしてもかまわにいからよ〉

ユグドラシル金貨の生える木とかな。

〈ありがとうございますブロンントさん。それをやるのは最後の手段ですね。つと……なんか端末で業務連絡してる気分になつて來たのでランチがてら顔合わせませんか？〉

〈おお、すまんな。こつちも配慮が足りなかつた感。せつかく食えるようになつたんだし飯食いながら話すべ。あんまかしこまつた奴出されても困るから軽いのにしてもらうは〉

〈良いですねそれ。昔誕生日にジャムサンド食べたの思い出しました。手づかみで食べてもいいものでも頼んでみます〉

俺らじやケーキなんて夢のまた夢だもんげ。

「なんだな。リアルより良いもん食えるけど一気に食つたら飽きた時怖そだしな。俺もサンドウイッチ頼む事にするわ」

「そうですね。では円卓で」

「うい」

「念話」を切つてアイテム整理を終える。思えば遠くに来たもんだ。リアルじや変な臭いのするバターとねちやつてした食パンですら贅沢品で普段の食事は10秒チャージだったからな。考えながら二回手を叩く。

「お呼びでしようかプロント様」

「おう、これからモモンガさんと円卓で会議だからよ。書類も作るかもだからサンドウイッチでも頼む」

「畏まりました、至高の御方。ただいま供回りを御付け致します」

「おう」

部屋前で待機してるホムメイドが90度頭を下げて出てつてしまふ、護衛の連中が来るまでこっちも椅子に座つて待つとく訳。ぶつちゆけまどろっこしいけどこれやらんと仕事が無いナザリックのNPCが「お手本が居なくなる⋮⋮」と泣き顔になるのでモモンガさんとの協議の結果最低限は付けるべきと決まった。そういうとこモモンガさん良く気付くよな。ああいう気配りが人気の秘訣かも（社会人）

「大変お待たせ致しました。プロント様」

「気にすんな。いこか」

部屋から出て護衛と一緒にゾロゾロ歩くんダけどこれでも数減つてるんだよな。厳選したらしくてレベル90台のジョブ違の連中が装備だけそれっぽく統一して後ろ歩いてる。こう、ドラクエの勇者ご一考みたいな感じ。アライメント極悪だけど。

ほんとは指輪ワープかバフかけてとつと行きたいけどその辺レベル1の貧弱一般メイドが余波で死にかねないし、あいつらが構つてほしそうに頭下げるから歩きながら手え振つてやつたりして。この辺もどうにかしないとなー。抱えるつもりがジークブリー！死ねえ！ つてなつたら草も生えない。

暇だとどうしても目についたとこから改善しないといけにあ使命
感に囚われるけどこるはモモンガさんの事笑えない。しゃあねえな
(ソル) 出来る男つてのは切り替えが上手くないとだからその分部屋
でダラダラすつかとてきとーに考え方しながら歩いてると円卓に到
着した。

「ブロント様がご到着致しました。モモンガ様へのご報告をお願いし
ます」

「畏まりました」

目の前でシモベが手続きしてのを眺めながらぼへーっと待つけ
ど簡略化できにいものか。

「お待たせしましたブロント様。それではどうぞ」

「おう、ご苦労さん」

労いの言葉をかける度に赤面したり一瞬硬直するシモベが開けた
扉をくぐつて円卓に入る。そこにはなんかのカツップ片手に書類に目
を通す骨が居た。

「待つたか?」

「いえ、それほどではありません」

お互に軽く返して席に着く。

「んじや早速はじめつか。モモンガさんと2りにしてくれ」

一応会議の体を取つてのけどあんまガチガチな奴じやにいからな。
「畏まりました。食事は後ほどお持ち致します」

「おう、んじや財政状況の確認だな」

円卓から出ていくメイドを後目にこつちも始めるかね。

「はい、現在の状況と施工中の案はこつちにまとめてあります」

そういつてモモンガさんに渡された資料をめくる。

「thx。こないだのなんだつたか、ザイトルクワエだつたか? あ
の件のが果樹園やつてんのか
たしかピニスンだつたか。」

「そうです。種族的にも適任だと思つたので。後は寿命の長い生き物
の方が教育のし直しも長いスパンで見れますから」

モモンガさんはもう昼食を食べ終えたのかデザートのブドウをも

いでいる。

「んだな。そつちはそれでおkだとして、予備案も必要か。つとと来たな。良いぞー」

ノックして俺の分のサンドウイッチが来たのでガントレだけ外して一緒に持ってきたフインガーボウルで片手を軽くゆすいだ後、水気をぬぐつた。

「そうなりますね。こちらではアンデッドによる開墾も視野に入れているのですが、あの開拓村を実験場にしたいんですよ。（モグモグ）（モグモグ）ふおうだな。（ゴクン）恩義に感じてるんだつた受け入れはするだろうけどその前にある程度の異業種で慣らしてからのがよくね？」

話ながらサンドウイッチをパクつく。バターの甘味の中にほのかな辛さがベーコンとレタスとトマトのアクセントになつていて（にわか）

「（ゴクン）ああ、確かに。その辺この体になつてからいまいちピンと来なくて。人型に近いのをいくつかピックアップさせて選別しましょうか」

「だな。後はカルマ傾向もついでに善と悪両方付けて村人の印象でも測るか」

付け合わせのフレーバーティで口の中をさっぱりさせると頭もスッキリした。INTバフかな？

「その辺は抑えの効くNPCから選別しないと大事故に繋がりかねませんね」

「だよなあ」

俺はサンドウイッチをぱくつきながら構わずしゃべるけどモモンガさんはきちんと飲み込んでから話すあたりやっぱ性格出るな。つか食えるようになつて良かつたんだがあの顔は生体武器扱いでいいのか？

「なあモモンガさん、話逸れるけどその顔装備扱い？」

「あ、ええ、シャルティアの爪やコキュートスの装甲と同じ扱いみたいですね。違和感はありませんけどね」

「そつか、話の腰折つて【ごめんなさい】」

「いえ、いいんですよ。では戻しますね。あの開墾村……たしかカルネ村でしたか。の方はそれでいいとして、ブロントさんの方からは何かありますか?」

「だな。あの近くに森があつたべ。ピニスン拾つてきた」

「ええ」

「あつちでもあのレイドボス以外にも物資になりそうのが無いか探つて、最悪植林しながらの林業とかもどおだ? まあ要はトレントみたいなのの養殖とパワーレベリングだな」

ユグドラ産のマンドラはその辺に植えると死人が出るからな。

「林業……まあ林業ですね。ならサンプルをシュレッダーに突っ込んで単価を調べるところからですか」

「そおなるな。どちらにしろシュレッダーは加工品が買い叩かれるからな。原材料にも目を付けとくのは悪くないんじやないかな? 一般論でね?」

「現時点ではそれがベターですね。ではこの辺にしどきますか。食べ終えるまでつて決めておかないと時間の経過が分かりにくくて」

「アンデッドだしぬ。その辺アルベドは寝かしてくれるか?」

「うつ……! 何と言ふか……時間になるとメイドが呼びに来るんですよお……」

意外とまんざらではない顔してんぞ。

「搾り取られてるな。この場合はごちそう様つて言えばいいのか?」

「知りませんよ、今まで未使用だつたんですから! そういうブロントさんはどうなんですか?」

意趣返しとばかりにこつちに振るモモンガさん。

「ハハハ、聞いて驚くなよ。さつきシャルティア踏んできた」

「……え、踏んだんですか?」

「つて言つてもあれだな。ペロロン風に言うと「しようがないにやあ」つて奴だ」

「訳が分からぬよ」

「なんて言うかな。アルベドにモモンガさん取られたからちよつと心

配になつて様子見に行つたんだが」

「はい」

「配下の吸血鬼の花嫁に八つ当たりツクスしてたからちょっと傷心にサービスして何して欲しいか聞いたら「踏んでくれ」って言うもんだからよ」

「ええ……」

ドン引きするモモンガさん。

「つづー訳で浮ついた話はにいな。すまんね」

「いえ、何と言うか、フォローまでしてもらつてすみません」

本当に申し訳なさそうにする骨。気にしすぎだべ。

「気にすんなつと話し込んでしまつたな。そろそろ行くか」「ですね」

「なんだばクレマン呼ぶか。あいつの鎧は何がいいかね?」

すつかり忘れてた感。

「シャルティアで思い出したし、いつぞやの横乳ハーネスでいいんじゃないですか?」

「おk」

やべーなモモンガさん。骨になつたからつてずっとオンだと精神まで骨にぬるぞ。どうにか公私の区別付けさせにいといけないんだがどうすつかな。